緋弾のアリアXX

Aria the Scarlet Ammo

スーパーコンダクティビティ
恋と戦の超伝導

赤松中学

MF文庫J

緋弾のアリアXX

Aria the Scarlet Ammo

恋と戦の超伝導（スーパーコンダクティビティ）

赤松中学

孫
アリア
覇美

ＭＦ文庫Ｊ

緋弾のアリアXX

恋と戦の超伝導（スーパーコンダクティビティ）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 怪鳥の標 Underway on nuclear power

2弾 破星燦華鋒（はせいさんがふ）

3弾 トライアングル・ノヌガーレ

4弾 雪の樹海 Snowflakes

5弾 星伽山の御神体（はときさんのごしんたい）

Go For The NEXT!!! 緋出ずる国（ひいでるくに）

1弾 怪鳥の標 Underway on nuclear power

――日本へ帰り、星伽白雪に会いなさい。
――緋緋色金の事は、彼女が全て知っています。
メヌエットの言葉に、俺は愕然とする。
愕然とする、が……
ほんの少しだけ、『やっぱりな』という思いもあった。
かつて香港で戦った孫――不完全緋緋神も、正体、つまり緋緋神の事を尋ねた俺にこう答えていたのだ。
『識りたければ、日本に居ればよかったものを』
……何かを探してあちこちさまよったが、答えはスタート地点にある。
実際のところ、世の中にはよくあるよな。
戯曲『青い鳥』みたいな、そういう皮肉な話。
「小舞曲のステップの如く、順を追ってお話ししましょう」
ホームズ邸の音楽室で絶句する俺とアリアに、メヌエットは車椅子の物入れから出したパイプを咥えて――

チェリーの精油を香らせつつ、推理を語り始めた。
「お姉様たちは初めから、緋緋神問題に対するアプローチ法を間違えてらっしゃるのです。問題とは、その問題の正体を見極める事で初めて対応できるもの。『殻金を盗まれたから取り返そう』と場当たり的に対応したり『憑依されたから追い出そう』と闇雲に緋緋神と闘うより先に――相手が何者なのか、その正体を暴くべきです」
……正体。
緋緋神は緋弾を通じてアリアに乗り移り、操作している。
ＬＯＯを操作していたマッシュのように。
だが、緋緋神は金属に宿る魂みたいなものだ。人間じゃない。
だから、正体などという概念とは相容れない。
と、俺は思い込んでいたが……
「正体が分からなければ、どう戦えばいいのか、どう話し合えばいいのかが分からない。相手が火なら水を、木なら火を用意しなければ倒せない。ネズミならチーズを、子供ならキャンディーを用意しなければ、和解の相談もできません」
語るメヌエットの勿忘草色の瞳は、スイッチが切り替わったように理知的で頼もしい。
「――その正体を、白雪が知ってるって事ね？」

アリアもまた、赤紫色（カメリア）の瞳にほんの少しだけ『やっぱりね』的な色を交えている。

「星伽神社の巫女たちは初代緋巫女の時代からおよそ２０００年、緋緋色金　すなわち緋緋神の研究をしている。言わば星伽神社は『緋緋色金研究所』の側面も代々持っている神社。その歴史を継承した者が当代の緋巫女、星伽白雪のはず。彼女より緋緋神に詳しく、またその正体に近い者はいないはずですよ」

メヌエットの回答は、明確だった。

「しかしこの推理にも、つっかえ棒のような欠陥が１つあるのです」

「何だよ欠陥って」

そう聞く俺にパイプを向けたメヌエットは、

「あなたです。この件には、必ずやキンジが絡む事でしょうが　キンジが絡むと、私の推理は正常に働かない事があるのです。推理の理は、理詰めの理。その理を破壊するのが、不可能を可能にしてしまう男ですからね」

プログラムのバグでも見るかのような、不愉快そうな顔をしやがった。

「あたしのカンでも、キンジのせいでまた思った通りに進まない気がするわ。ちょーっとばかり胸が大きいからって、白雪に会ったらまたすぐ鼻の下伸ばしそうだし」

アリアもアリアで平たい胸の前で腕組みし、俺を害虫扱いで睨む。

おいお前ら、姉妹揃ってこのエネイブル様にイチャモンつけてけつかるねんか？

と言いたいところだったが、ホームズ姉妹はそんな小虫の話は『ちょっとした困り事』ぐらいのノリで終え、

「ところでお姉様」

「何」

と次の話題へ移ってしまう。小さっ！　2人の中での俺の存在……！

「もう一つ、良い方に働くか悪い方に働くか分からない事が……この一件に興味を持つであろう『ある人物』がいるのです。その人物は、お姉様とキンジが星伽白雪の方を向いたタイミング――つまり、今頃を見計らって介入してくる。そういう推理が、できてしまうのです」

「きっと同じ人の事を予感してるわ。あたしも胸騒ぎがするの」

「騒ぐ胸もないのに騒ぐとは、相当な予感ですね」

「あァ？　あんたも言うほど無いでしょ！」

からの、メヌエットの胸ぐらを掴むアリアと、アリアの両肩にモンゴリアンチョップを叩き込むメヌエット。姉妹ゲンカが始まった。さっき優雅な小舞曲を一緒に踊ってた時の美しい姉妹愛はどこへやらだ。

だが、直観のアリアと推理のメヌエット――ホームズ姉妹は2人足せば、シャーロック

1人分ぐらいの能力があると考えてもいいだろう。
となるとここは助言通り、日本に帰って白雪に聞いてみるべきだな。
今まで教えてくれなかったからには事情もあるんだろうが、緋緋色金の件、何が何でも聞き出すさ。

ホームズ姉妹が取っ組み合いになるのはよくある事らしく、割と慣れた手つきでアリアとメヌエットを羽交い締めにして引き離す双子のメイド・サシェ&エンドラを背に
まずは白雪に電話してみようと思った俺は、携帯で掛けると電話代がどんだけかかるか知れたもんじゃないので、固定電話を拝借しようとリビングへ向かった。
イギリスの固定電話からの国際電話は掛け方を知らなかったので、リサを連れてきたんだが……

「……？」

天秤みたいなアンティークの電話の受話器を取ろうとしたリサは、ぴくっ、と暗い窓の外に視線を向けた。
そのまま硬直して、瞳孔のハッキリ分かる翠玉色の眼で曇り空を眺めてるぞ。

「どうしたリサ」

「ご……ご主人様。失礼しますっ……！　んっ！」

両拳を巨乳の前に上げて少し気張るような仕草をしたリサの頭、メイドカチューシャの後ろに――ぴょこ！　と、例のケモノ耳が飛び出した。

その耳の両脇に両手を立てたリサは、窓の方を向いて何かを聴音している。

普段の穏やかで優しい表情ではなく、真剣な――

何か、異様な存在に怯えるような顔で。

……ホキョァァァ……

（――何だ!?）

夜霧の空、その彼方から小さく聞こえた

その不気味で奇怪な鳴き声に、俺も窓の外を見る。

小さく悲鳴を上げたリサは、メイド衣装のスカートを跳ね上げて尻もちをついている。

急いで白木の枠の窓を開くと、ベーカー街の夜道を行く人々も今の声に騒いでいるのが分かる。

ホッキョアアアアアアアアアーッ――！

……ッ……！」

また空から聞こえた。

反響もあるだろうが、ほぼ真東。ロンドン中心街の方向だ。

なんという……不快で、醜く、本能的な恐怖を誘う声だろうか。
きっと鳥だ。だがこんな鳴き声は聞いたことがない。
見えない距離からこれだけ明瞭に聞こえるという事は、デカいぞ。
「……ご、ご主人様っ……助けて……こわい……！」
そして不思議な事に、リサが
クジラをも従える百獣の王・ジェヴォーダンの獣が、竦みきっている。鳥ごときに。
青い顔をしたリサに手を貸そうとすると、リサはすっかりパニックに陥った様子で俺の手を、頭を抱き寄せ
って、おいっ！　なんでそんなとこに抱き寄せるんだよッ！
「どうか、何とぞ……！　リサを守って下さい……！」
涙ぐんだリサが自ら俺の手を押し当てさせた左胸は、とてもじゃないが片手には収まらないサイズだ。
マシュマロみたいな柔らかさで、俺の指5本をむんにゅりと呑み込む。
（ふぁぁっ！）
放せ！　と命令したいが、それもできない。
というのも俺の顔は、口を含む下半分がセーラーメイド服を突き破らんばかりの右胸に

押しつけられているからだ。胸に埋められた鼻で必死に呼吸をつなぐ俺だが、そのせいでメープルシロップみたいなリサ丸出しの香りを強制的に吸気させられてしまう。

さらにこの、リサの胸のぽちゃぽちゃした水っぽさ。厚手のメイド服の布越しとはいえ、マシュマロのように柔らかいそこに口をつけさせられている状態は――まるで『年齢差を考慮せずママ役と赤ちゃん役を演じて行われるらしい』と武藤が語っていた高尚な大人の遊戯。しかし、それならば本来蕩けるような慈愛に満ちているべきリサの表情は、ひどく怯えたものだ。

「……」

なるほど。

リサはあの怪鳥が怖くて、俺をヒステリアモードの勇者様に変えようとしたんだね。お望み通り、なれたよ。ほんの十秒で。

だが意図的に変身させられるのは好きじゃない、なので、リサのいけない胸をオシオキするように少し乱暴に掻き分け、幸せの谷間から脱出する。

――ホキョアアアアアーッ！　ホキャッ！　ホキャッ――！

という怪鳥の声が再び空から聞こえる中、アリアたちも音楽室からリビングに来る。

リサとの一件をごまかすように、俺がリビングの占いテレビをつけると……

全員が、ＢＢＣニュースのライブ映像に言葉を失った。

サーチライトで照らされた夜霧立ちこめるテムズ川の上空を、蝙蝠のような翼を広げた黒い怪鳥が飛んでいるのだ。まさに、今。

観覧車を掠めて飛んだその翼長は目測９m。霧の薄い部分を飛んだ時にギョロっと見えた目玉すらも、直径20cmはあるだろう。

その顔はペリカンを鋭くしたような、恐ろしい面構えをしている。

ベーカー街まで響いた鳴き声は、このバケモノの声なんだ。

（まさか……翼竜……!?）

小さい頃、図鑑で見た事がある。このメヌエットも幼体の化石を持っていたが、あれは爬虫類翼竜目の飛翔動物・プテラノドン。俺の目にはそう見える。

だが、それは白亜紀に絶滅した恐竜の一種のはず。

なぜそれが現代のロンドン、テムズ川の上を飛んでいるんだ。

サシェとエンドラは「悪魔です……！」「なんと醜い……！」と、十字を切ってテレビから後ずさる。テレビではロンドン市民も、テムズ川から蜘蛛の子を散らすように逃げている。プテラノドンは、キリスト教の宗教画に出てくる悪魔の化身みたいな色形をしてるからな。リサも含め、イギリス人の恐がり方は半端ないものだ。

だが信仰心はともかく、その悪魔じみた巨鳥に恐れをなさないイギリス娘が２人いた。

「プテラノドン・ステルンベルギ！　私の推理通り、やはり翼竜は恒温動物だったのですね。鳥目でもない。サーチライトの光を掠めた時、眼球の虹彩が収縮しましたもの。まあ！　今、頭部の後ろの鶏冠を垂直尾翼のように傾けて方向転換しましたわ！」

車椅子でテレビにむしろ近寄っていくメヌエットと、

「キンジ。あの大きな鳥はともかく、この霧。ロンドンじゃ夜霧はよく出るけど、発生が急すぎるわ。さっき外で感じた湿度はそんなでもなかったもの。それに、ヘンに重くて、川面を覆うような霧。まるで、香港の……」

窓の外とテレビを交互に見て、俺に注意を促すアリアだ。

「ああ。これは厄水の魔女、カツェ　あの子がタンカーを隠すのに使った魔術の霧と、同じ霧だ」

しかし極東戦役に敗れて停戦中の魔女連隊が、リバティーメイソンの本拠地ロンドンに今さら真空爆弾を撃ち込んでくるとは考えにくい。

となると……

「メヌエット。この騒ぎ、さっき君の推理した『ある人物』のお出ましって事かな」

俺はこの霧を、別の人物が使うのを見たことがある。

その光景を覚えている。

忘れようったって忘れられない、悪夢だ。

テレビでは、ついにカメラマンも逃げ出したのか――地面に捨てられたらしいカメラが異国情緒あふれるロンドンの建物だけを映し続けていた。

メヌエットは車椅子を転回させてこっちを向くと、

「……そのようですわね。お姉様、キンジ、どうぞ、ごきげんよう。私の事も、よろしくお伝え下さい」

貴族らしくスカートを小さく摘まみ上げ、別れの挨拶をしてきた。

「仲良く話すつもりはないけど、逮捕したらそうするよ。リサをよろしく頼む」

「――行くわよキンジ！」

アリアの号令で、俺は拳銃と弾倉、制服、その下に着込んだプロテクターを確認しつつリビングを後にする。

テムズ川に近づくにつれ霧が濃くなっていくロンドンを、レンタサイクルで駆ける。

今度は1人乗りの自転車しか無かったので、アリアは後輪の軸に飛び出したステップに立たせて2人乗りしている。

逃げる市民と、次々にすれ違う。子供は泣きじゃくり、教会から出てきた牧師は聖書を

掲げてプテラノドンにお経みたいなものを叫んでる。

サーチライトが掠めて見えた怪鳥は――作り物であって欲しいと願っていたが、本物のプテラノドンらしい。恐竜なんか初めて見たが、現代の獣とはケタ外れの存在感があるぞ。百獣の王・リサが圧倒されたわけだ。

……リーン……ゴーン……

……カーン……ゴーン……

19時を報せる、ビッグ・ベンの鐘の音の中――

俺は川岸の車道に出て、ドリフト気味に自転車を停める。

防弾セーラー服のスカートを翻して後ろから降りたアリアが、

「キンジ！　水上に赤い光！」

川下にボンヤリ見えた光を目ざとく発見し、指し示した。

霧を染める光は、イルミネーションのように不規則な点滅を見せている。モールスだ。

U...n...der...way...

《ワレ（Underway）　ゲンシリョク（on）　ニテ　コウコウチュウ（nuclear power）》

我、原子力にて航行中――それは１９５５年、世界初の原子力潜水艦・ノーチラス号がこのテムズ川を遡上してみせた時に打電したメッセージ。

ホッキョアアアアアアアアーッ！

上空のプテラノドンは光の上を旋回している。あの光――船舶とコンタクトを取うような飛び方だ。

おそらくあの怪鳥は、船が放った人払いのためのバケモノなんだ。

そしてこの霧は、テムズ川を遡上してくる艦を隠すためのもの。

……リーン……　……ゴーン……

……カーン……　……ゴーン……

ビッグ・ベンの鐘の音と共に、その艦は川面全体を隆起させるように浮上し、霧を撥ね除けながら微速で接近してきた。

全長３００ｍ以上の――

世界最大級の原子力潜水艦――

（――イ・ウー……！）

どういうわけか日本の自衛艦旗を掲げているが、間違いない。

俺が壊滅させた秘密結社、イ・ウー。

その根城となった、無法者たちの原潜だ。

我が目を疑う事に、それが今ここロンドンのテムズ川を航行しているのだ。

ザザザザァ……という川の水を掻き分ける音はするが、機関音はしない。惰性航行している。ロンドン・ブリッジの真下に艦尾が来るような位置で、停船するつもりだ。

そう思って見た橋の欄干に、俺は舌打ちしてしまう。

（やっぱりヤツらが……繋がってたかッ）

そこには、闇、津羽鬼、そしてセーラの姿があったのだ。

壺が入っているらしいドラム缶を担いだ闇は、俺たちの存在に気づいている様子だったが……敵対的な動きはしてこない。

……O zittre nicht, mein lieber Sohn...！

スピーカーからモーツァルト・『魔笛』の独唱曲を鳴らす艦橋には、巨大な『伊U』の2文字が描かれている。

霧に渦を巻かせながら、その2文字が俺たちの眼前25mほどで……悠然と、停止した。

停船したのだ。

「イ・ウー……海自に預けて、呉に係留していたハズなのに……！」

というアリアのアニメ声に、答える声があった。

イ・ウーの、艦橋から。

その、声は。

「決して先入観を持たず、いかなる事であれ、事実の導いた結論には従うべきだよ。アリア君。同じ人物が同じ物を2度盗めるのは、さほど不思議な事ではないのだ」

かつん、かつん……

と、階段を踏んで艦橋から上半身を現した、クラシックなスーツで正装した男は……

イ・ウーから大陸間弾道ミサイル（ICBM）に乗って飛び去った、史上最高の――そして、最強の名探偵。

――シャーロック・ホームズ――！

「曾お爺さま……！」

驚きながらも、心のどこかで再会を予感していたらしいアリアが目を見張る中――

「……生きてやがったか、シャーロック。老兵は消え去るのみ、じゃなかったのか？」

「消えればまた現れる。去ればまた来る。死んだと世間に思わせて甦（よみがえ）るのは僕がよくやる事だけど、キンジ君、君が驚くのは少しおかしい。僕の推理だと、君だってあれから最低2回は死んでるのだろうからね」

微笑したシャーロックがマッチを擦ってパイプに火を入れる中、浮かび上がった原潜の甲板（かんぱん）で、ゴクンッ……という重厚な駆動音が鳴り響く。

見れば、ガルウィング状に――

右舷最後尾の戦略ミサイル発射口が、1つ開口している。

「新時代は常に、海から訪れる。元寇、黒船、ミズーリ号――君の祖国・日本でもそうだろう。我がイギリスでも、同じなのだよ」

シャーロックが俺とアリアに手招きする背後で、橋からは鬼たちとセーラがイ・ウーの甲板に飛び降りていくのが見えた。霧を押し上げるようにして、クッションとなる気流が生じている。風使い・セーラの術だ。

勝手口にされているらしいミサイル発射口から、鬼たちが素早く艦内へ入っていく。

その慣れた様子は、ヤツらが前からシャーロックと連んでいた事を物語っている。

それほど計算高くない割に俺たちの動きを正確に先読みできていたから、鬼の後ろには軍事顧問がいるとは思っていたが……シャーロックとはな。

かつてジャンヌが言ってたが、壺はイ・ウーの卒業生だ。そのコネもあったんだろう。

もう少し早く気づくべきだったな、俺も。

プテラノドンも甲板に舞い降りてきて、右、左、と翼を折り畳み……とた、とたた、と不器用な足つきでミサイル発射口に潜り込んでいく。

「アリア君。キンジ君。君たちの都合さえ良ければ、おいで。悪くても、おいで」

太平洋で会った時と同じセリフで、シャーロックがイ・ウーへと招いてくる。俺たちを。

……ずず、ずずずん……

腹の底に響くような重低音が、聞こえてくる。

機関音だ。

イ・ウーが、再び動こうとしているのだ。

「言われなくてもそこまで行くさ。原潜を2度も盗んだ重大犯罪者が武偵の前にノコノコ現れて、タダで帰れると思うなッ。逮捕するぜ、シャーロック・ホームズ！」

俺はベレッタを抜き、チャリに再び跨がる。

「キンジっ……！」

俺とシャーロックを交互に見て慌てるアリアには、

「アリア。お前は戦わなくていい。本気で闘れはしないだろうからな」

尊敬するシャーロックに銃を向けられない事が分かっているので、背中越しにそう告げ

パンッ！

桜花気味に足を蹴り出して、チャリをロケットスタートさせた。

瞬時に加速したチャリは中道の縁石を、次いでテムズ川方向へ斜めに突き出た転落防止柵を駆け上がって

それをジャンプ台にし、イ・ウーめがけて俺ごと宙を舞う。

無茶な機動に自転車はスポークが折れ、フレームが歪み、前後ともに車輪はパンクし、空中でバラバラになっていく。

その破片と共に、俺がイ・ウーの艦橋へ降り注ぐ。

「シャーロック！　この桜吹雪、見忘れたとは、言わせないぞ！」

桜花で振り下ろした踵落としを、シャーロックはパイプを持ってない方の手のひらで、受けにきた。

パァンッ！　俺の蹴り足はサッカーボールを蹴り割ったような音と感触に阻まれ、威力をほぼ消されてしまう。

おそらく、空気のクッション。シャーロックがセーラからコピーした技だろう。

「忘れるものかね。だから今は少々、超能力を使わせてもらったよ」

シャーロックは俺の足首を掴み、バリツと思われる動きで素早く捩ってきた。

そう来ることは分かっていたので、俺は捻られる回転に合わせて体を自ら振り回し右手の銃を、足下のシャーロックに向ける。

バッ！　ババッ！

マズルフラッシュが閃き、金色の空薬莢が俺と共に回転しながら闇に散る。

だが、シャーロックは俺の足から外して伸ばした手で、俺のベレッタを軽く押し退けていた。俺が発砲する、まさにその寸前に。

さらにその手が今度は俺の手を掴み、指を絡めてくる。

銃を持ったままの俺の手と、チャッ、チャッ、と指相撲をするような調子で。

それは指による指への関節技で

「指切りげんまん、とかいうのだっけ。日本では、これを」

ハッ、と気がついた時には。

ベレッタが、いつの間にかシャーロックの手に渡ってしまっていた。

「ちょっと違うぜ」

バスッ！　ギンッ！　シャーロックの発砲を、俺はクイックドローしたデザート・イーグルによる銃弾撃ちで迎撃する。

ダンッ、と、ようやく俺がイ・ウーの艦橋に片膝姿勢で降り立つ。

シャーロックの、すぐ目の前に。
ニコニコと俺を見下ろすシャーロックは、俺から見るとL字に見えるようにベレッタを立てて持っている。撃たないよ、という仕草だ。
「……使わないんなら、返せよ」
俺が左手を出すと、
「よかろう」
ポン、と、ベレッタを返してきやがった。
これには頭に血が上り、俺は2丁とも銃をシャーロックに向けようとするが
シャーロックはパイプを口に引っかけて、両手を　せっせっせ、の、ヨイヨイヨイ。
俺の腕に引っかけて、手首と肘の関節を誘導してくる。
気づけば俺が握る銃は共に、俺自身の左右の胸に銃口を当てさせられていた。
その時すでに俺は桜花の力を足に溜めており、伸び上がるようにして亜音速の頭突きを放つ
「おっと！　もう君の頭突きは御免こうむりたい」
その寸前にシャーロックは、苦笑いで『待て』という手つきをした。
その手と腕ごと、顔面までグシャっと行ってやっても良かったんだが……
俺は、桜花をキャンセルせざるを得なかった。

艦内から艦橋に駆け上がってきた意外なチビっ娘の姿が、視界の端に映ったからだ。

「遠山、戦ってはならないです！　シャーロック卿は、味方なのです！」

そのちょっと鼻にかかったマヌケな慌て声に、俺は目を丸くする。

くりくりと大きな瞳をした、身長１４２cmのアリアよりちっちゃい推定１３８cmの、長い黒髪の少女。

「……こ、猴……!?」

寒さに弱いのか、名古屋武偵女子高のハレンチなカットオフ・セーラー服ではなくモコモコしたダウンジャケットを着ているが見間違いじゃない。

香港で別れたきりになっていた、猴だ。

「ロンドンには香港経由で来たんだよ、彼女は、キンジ君との仲介役にもなってくれると推理できたのでね」

……シャーロックめ、自分が姿を見せれば俺が強襲逮捕しようとしてくる事も先読みし、制止役に女を用意してたか。

もちろん、猴を香港から引っ張り出してきた理由はそれだけじゃないだろうが……

ヒスった俺は、女の言う事は基本、聞いてしまうからな。

「おお。暖かい土地から来た猴君には、ロンドンの寒さは応えるようだ。さあ、みんなで艦内へ入ろう」

ターンせずそのままテムズ川を河口側へ後退し始め、かつ再び潜航し始めたイ・ウーの甲板は既に、水没している。

今や、艦橋だけが水上に突き出ている状態だ。

「キンジ、曾お爺さま――」

さっきセーラたちが降りてきたロンドン・ブリッジから、シャーッ――と、ワイヤーを使ってアリアが艦橋に懸垂下降してくる。

プリーツスカートを押さえて着地したアリアは、不機嫌な俺と、上機嫌なシャーロックと、2人をオドオド見回す猴がいるのを見て、「？？？」と目をグルグルさせてるよ。

「アリア君、大丈夫　キンジ君と僕は、お互いを傷つけるような――君を泣かすような事は、決してしないのだよ。なあキンジ君」

よく言うぜシャーロック。お前、アリアを背中から緋弾で撃った事あるくせに。

だが……

まあ、お前から殺気を感じなかったのは事実だ。

俺はベレッタとDEを収めつつ、相対的に上がってくる水面を見る。
イ・ウーは再び水面下に隠れつつある。沈むまで、あと3分もないだろう。
それまでに決断しなければならない。乗り込むか、退くか。
猴もハラハラした様子で、俺とアリアがどう出るかを見ている。
だがこの状況下で、シャーロックはパイプをくわえて余裕の一服。
そして、未だ最も敵対的な人物……俺に、語りかけてきた。
「閻君から、君らと和睦したいとの連絡をもらってね。これは面白くなりそうだなと」
「何言ってやがる。香港からここまで原潜で来るには、その連絡が来る前にそうなる事が推理できてたって事だろ」
「ご明察だ。君も初歩的な推理は出来るようになってきたようだね」
「もう1つ――今の俺には推理できてるぞ。このイ・ウーの、今からの行き先だ」
そう言うと、それが分かっていなかったらしいアリアと猴がこっちを見上げてくる。
「俺とアリアがこの艦に乗り込まざるを得ない、つまり、最後の殻金がある場所だろう。鬼たちはそこに撤収しつつある。つまり、ハビの所へ」
「その通り。日本にも近い――鬼ノ國へご案内しよう。旅程は、たったの165時間だ。僕が100年続けた『緋色の研究』も、近く大詰めだと推理していてね。その解明に何の

関与もしないのは、僕には我慢できない事なのだよ。だからこうして橋渡しをしに来た」

やっぱり……キノクニ、か。

シャーロックは俺たちに協力する、的に大仰なジェスチャーを見せているが……

「アリア。この話は危険だし、メヌエットが推理してくれた正道とも違う。だが知る限り、お前の緋緋神化を止める道は1つじゃない。ハビから殻金を取り返し『心結び』を改めて断つ――つまり緋緋神に精神を乗っ取られないよう、影響を遮断する形での解決もあり得る。お前を宮戦会議前の状態に戻すだけだから、完全解決とは言い難いんだがそれでも、応急処置としては十二分だろう。虎穴に入らずんば虎児を得ず、の精神で……シャーロックや鬼たちと共にイ・ウーに乗るかどうか、その最終判断はお前に任せる」

俺は早くも予定通り進んでいないこの状況を、アリアの直感がどう受け止めたか尋ねた。

アリアは数秒考えてから、

「……乗るわ」

そう答えた。

「目には目を、歯には歯を、よ。鬼たちはロンドンに入り込んで勝手を働いたんだから、今度はあたしたちが入り込んで勝手にやりましょ」

目には目を、歯には歯を。やられた事はやり返す。ある意味じゃ義理堅いそれは、世界

共通の武偵のモットーだ。

そして、非常にアリア的な物の考え方。

俺もアリアにはちょっとちょっかい出したら、必ずやり返されてるからな。

「それに、メヌの助言に従うにしても　あたしもあんたも、空港経由じゃ日本に入国しづらいかもでしょ？　今あたしが手を回してはいるけど、まだ外務省に目付けられてるんだから。まずキノクニで殻金を取り返しながら、外務省との取り引きがまとまるのを待つ。それから、晴れて白雪に話を聞きに行くべきよ」

言われてみれば……それも、ごもっともだな。

シャーロックに借りを作るみたいでイヤだったが、俺は　アリア、猴、シャーロックに続いて

川の水をフチから流入させつつある、イ・ウー内部への階段に足を踏み入れるのだった。

入口階段上部のハッチは超合金製の自動ドアになっていて、それが隔壁のように何枚も閉じていく。

その駆動音を頭上に聞きながら、俺たちはイ・ウー艦内への螺旋階段を降りていく。

LEDライトで照らされた階段はハシゴのように狭く急な造りで、シャーロックや俺は肩や腰が何度か引っかかる。猴もボシェットが手すりに引っかかりコートごとブラウスがめくれたりして、「ひゃあぁあぁあ」とかマヌケな声を上げてたよ。なお、やっぱり中にカットオフ・セーラー服を着てるのは分かったが、ほぼ真上からの角度なのでそれ以上の内容は見えなかった。

「では改めて歓迎するよ。アリア君、キンジ君。ようこそ、イ・ウーへ」

シャーロックの声と共に降り立った、イ・ウーの表玄関となっているホールでは

「……相変わらず、大したコレクションだな」

博物館のように居並ぶ恐竜の全身骨格標本が、シャンデリアで照らし出されていた。床は大理石。壁際には、各種の絶滅動物の剥製がズラリだ。

前に入った時にも思ったが、この時点でここが潜水艦の中だという意識は消し飛ぶ。

長期に亘って海に潜むイ・ウーでは、敢えてそうレイアウトしているんだろうな。

「後でゆっくり見学するといいよ、キンジ君。これから鬼ノ國まで、北極海回りで何日もあるのだからね。まずは閻君たちと共に、軽食の時間としよう。積もる話はそこで」

そう言ってシャーロックは、プテラノドンの化石標本の横を歩いていく。

その後ろにアリアが続く中、

「遠山！　猴は遠山に会いたかったです！　香港を出た後、欧米や日本で活躍されていたとか。さすが遠山です。卿と撃ち合いになった時はどうなるかとハラハラしましたが」

ジャケットを脱いで例のあれこれ短いセーラー服姿になった猴が、だきっ。

ちっちゃくジャンプしつつ、俺に飛びついてきた。

オレンジ色のシッポをクネクネ曲げて、ハート形にしてるよ。

「あ、ああ。俺も再会できて嬉しいよ。まさかシャーロックが連れて来るとは思わなかったけどな」

ちょっとタピオカミルクっぽい甘い匂いがする猴の体を、『たかいたかい』的に掴んで抱っこしてやると……

「北角の粥品専家でお粥を食べてたら、いつの間にか正面にシャーロック卿が現れて『您好。私は遠山キンジ君の友人だよ』と、お粥を食べながら仰ったのです」

シャーロックめ。猴から見れば俺と同じ現れ方をして、その証拠を示したってワケか。

ていうか、なんでそんな事まで推理できてんだよ。

諸葛あたりから聞いたのかもしれないけどさ。

「その時点で卿と藍幇は接触した後だったですが、『キンジ君とアリア君に、緋緋色金のアドバイザーをしてほしい』と、卿は最後に猴を直接スカウトしたのです」

と、俺に床へ下ろされた猴は……

階段の下に駐めていた、補助輪つき自転車に元気良くまたがる。

超ミニスカートの背面をサドルとオシリの間に挟み込みもしない隙だらけの猴は、

「猴も遠山に、香港を救ってもらった恩返しをしたかったのです！」

愛らしい笑顔で俺を横から見上げ、ペダルをキコキコこいで、補助輪をカラカラ鳴らし始めた。全長３００ｍはある艦内じゃ、移動にチャリがあった方が便利ってことか。

確かに……猴は緋緋色金を体内に持ってて、人為的に不完全緋緋神孫にもされてた、人工緋緋神みたいな人材だからな。

緋緋色金の真相に迫ろうという今、知恵を貸してもらうにはこれ以上ない人選だろう。

そこを前もって連れて来るソツの無いシャーロックに、アリア、俺、猴がついていく。

しかし、シャーロック……

さっきまで撃ち合ってた俺に、ああも堂々と背中を見せて歩くとは。大した度胸だよ。

とも思ったが、そういやシャーロックは盲目で、気流を感じて視覚の代わりにしているとか言ってたな。前後は関係ないのかも。

なので俺は位置取りを無視して、シャーロックの横に追いつく。

「おい、シャーロック　さっきのプテラノドン。あれお前のペットだろ。ジュラシック・

パークみたいに白亜紀の琥珀から恐竜の血液でも見つけたのか？」

「いいや。化石から作り出したのだよ。化石が石だというのは半世紀前の常識で、今では生物化石から分子化石、つまりＤＮＡも取り出せるようになっているのでね」

「……それにしても、何だって恐竜なんか作りやがったんだよ」

「男の子は恐竜が好きだろう？　キンジ君。僕もまた、男の子なのだよ！」

ニコォー！　と笑ったシャーロックの顔は……

１５０年以上生きてるってのに、俺よりもっと少年っぽかった。

放射能という重大な欠点があるにせよ、原子力が莫大なエネルギーを生じる事は科学的事実だ。ウランはたった１ｇで、３ｔの石炭と同量のエネルギーを発生させられる。

原潜とはすなわち原子炉を搭載してる潜水艦なので、半永久的にほぼ無限の電力供給が保証されている。無限の電力で海水を脱塩し、淡水も無限に作れる。その淡水を電気分解するから、酸素も無限。どんな巨大艦を作ろうと、戦略的な航続力も無限。

なので長期航海に備え、プールやテニスコート、ゲームセンターや牧場など、耳を疑うような設備を搭載した原潜が米ソでは事実次々に建造されたのだ。

とはいえ、このイ・ウーほど自由な造りの艦は世界にも類を見ないだろう。

博物館や大学を思わせる造りの広大な艦内を歩く内に、ヒステリアモードも解けてき

て……自分が第何デッキのどこにいるのか、分からなくなってくるほどだ。
そうして着いた、野原、としか言いようのない人工芝の大温室に
和装の闇と津羽鬼、ドラム缶のフタをちょっと開けて中からこっちを見てる壺、あと、
ブレザー&タータンチェックのスカート姿のセーラがいた。
鬼の一味はアフリカっぽい柄のゴザを広げて、ピクニックっぽく食事をしてるようだ。
目が合ってちょっと身構えたアリアと俺を、闇が手招きしてくる。
「さあ、仲直りのパーティーをしてきたまえ」
そうシャーロックが促す中……拳銃の安全装置を一応外し、接近すると……
ゴザにはまたも山盛りの握り飯、ハンバーガー、バナナ春巻、ブロッコリーのサラダ、
サンドイッチなんかがあった。
が、鬼たちは握り飯しか食ってない様子だ。
「……オニギリしか食わないのかよ、お前ら。ビタミンCとか摂らなくて大丈夫なのか」
空気読みも兼ねて聞いた俺に、闇の隣で正座していた黒和服の津羽鬼がムッとした顔に
なる。
「『おむすび』と言え」
「なんでだよ」

俺が握り飯を1つ取ってゴザに座りつつ尋ねると、あぐらをかいた闇が、
「其は『鬼斬り』に繋がる忌み言葉ぞ」
なんだか分からん説明をしてくれたが、まあ……とにかく、この場の空気はノーサイド、敵味方関係ナシって感じらしいな。雑談に応じてくれてるし。
津羽鬼は俺を嫌ってるようだが、それは俺と闇が割と気安く話すせいだろう。
これは最近分かってきた人間関係のシステムなのだが、姉貴分の女に憧れてる妹分は、俺がその姉貴分と喋ると怒るのだ。つまり津羽鬼のこれは、白雪の妹・粉雪や、アリアの戦妹・間宮あかりが俺を毛虫のごとく嫌うのと同じ現象である。津羽鬼は闇を尊敬してるみたいだからな。
（つまり、マジの敵対はもうやめたって事か……）
となると、俺だけトゲトゲしてるのも損だよな。
アリアとシャーロックもゴザについてハンバーガーとかサンドイッチをつまんでるし、猴もぺたんと座って先割れスプーンでバナナ春巻食べてるし。
アリアはブロッコリーをもりもり食べるセーラの隣にたまたま座った事もあり、
「あんたのその服、どこかの制服なの？」
「これは男装。スコットランドのキルト」
などとイギリス人同士、英語で会話してる。

一方、ショートツインテールの金髪頭をした壺は……こっちを見もせずに、
「しゃ、しゃあろっく……」
蚊の鳴くような声でシャーロックを呼び、ドラム缶のフタのスキ間からヤキイモを差し出してるな。褐色肌の手を4本とも使って、丁寧に。
俺と闇たちの話を興味深そうに聞いていたシャーロックは、
「おお、ベイクド・スイート・ポテトだね。ありがとう、壺君」
と、スーツでキメた姿に似合わないヤキイモを笑顔で受け取っている。
壺は……スキ間からちょっと見えるメガネの下の顔を赤くして、「え、えへへ」などとだらしない笑いを漏らしてるな。なんだあれ。
俺は具のない『おむすび』を食べながら、女とグダグダ喋るのもニガテなので単刀直入に、
「お前たちが俺たちと停戦する意志があるような話を、シャーロックから聞いたんだが」
闇に、そう切り出す。
すると闇はコクリと頷いて、俺を金色の眼でまっすぐ見てきた。
「是。アリアを緋緋神様にするは、アリアの魂を殺める事。それは即ち、アリアの愛をも殺める事。我等と鬼で合議の末、そこに迷いを生じたのだ。鬼は迷わぬ」

「迷いが生じれば止める。それが鬼の道よ」

闇と津羽鬼の言葉には、少なからぬ覚悟が込められている。

……マジっぽいな、この和平話。ここで戦いにならなかったのも事実だし。

鬼たちは、アリアを緋緋神化させたがっていたが……

それがアリアの人格を消滅させる事を、嫌ったってワケか。ヒステリアモード時の俺の説教を聞いて。

我ながら思い起こすのも小っ恥ずかしい『愛』云々の談義だが、結果的に有利な流れを引き出せたんなら万々歳だ。

「ハビ、おっと、ハビさんは何て言ってるんだ。その件」

呼び捨てにするとまた鬼たちが怒るんで、俺はあのチビ鬼にもさん付け。気苦労するぜ。

「この件、御屋形様の御意に叛く、遠方より電信でお伝えするは無礼ぞ。我が直接、折を見て忠言しよう。陰腹を切る覚悟でな」

「『折を見て』って、いつだよ」

「分からぬ。御屋形様の御機嫌次第だ」

「それじゃ問に合わないかもしれないだろ。アリアは放っておいても自動的に緋緋神化し

ちまいかねないんだ。玉藻ってキツネ女は、3月末がタイムリミットだとか言ってた」

イ・ウー艦内での公用語は日本語・ドイツ語との事だったので、俺たちは日本語で会話しているのだが……

鬼の言葉は古く、帰国子女のアリアは会話の部分部分が分からなかったらしい。

だが、俺が焦り気味なのを感じてシリアス顔で聞いてる。

「玉藻殿が、弥生の晦日と仰ったか……確かに、問に合わぬかもな」

「闇。腹なんか切らなくていいから、キノクニに着いたらハビさんの所に俺を連れてってくれ。後は俺が何とかするから」

「如何とする？　御屋形様と争う腹づもりなら、断る」

「忠誠心があるのは結構だがな。アリアの魂を救う意志があるなら、積極的にでなくてもいいから力を貸せ。アリアの緋緋神化は、殻金があと1枚あれば止められる。その殻金は、ハビさんが持ってるんだ。お前らは戦わなくてもいいから、俺が取り返すのは看過しろ」

俺がハビをとっちめる的な事を言うと――

闇と津羽鬼は怒るかと思ったら、ため息。

物事が分かってない子供に対する両親みたいなリアクションをした。

そして津羽鬼が、

「闇姉様がお前を覇美様と戦わせとうないは、遠山、お前自身のためよ」

「俺の、ため……？」

「お前が覇美様と殻金の取り合いになろうと、お前は覇美様にお手傷ひとつ負わせること能わぬ。瞬く間に、殺されるであろうぞ。それもまたお前ごと、お前の愛を殺す事」

「殺される？　武偵はそんな脅しは毎週のように聞くもんだ。俺は」

と言う俺を遮って、闇が……

「遠山、汝は算術が分からぬか？　倫敦の時計台で渡り合って体感したであろう　我と汝は互角。そして前も言ったが、仮に我が七鬼いても、覇美様に敵うものではないのだ」

……数学的に、俺の必敗を宣告してきたよ。

ヒステリアモードの俺は闇に勝ったは勝ったが、あれは闇が津羽鬼や壺を思う家族愛につけ込んで隙を突けたから。力量的には闇も言う通り、ピッタリ互角だった感触がある。

その闇の7倍以上の戦力を持つ、ハビ……

……となれば確かに、今度こそ俺が倒せる相手じゃなさそうではある、けどよ。

と、それを理屈の上で理解した俺はムスッと黙る。

黙る事しかできない。

「鬼ノ國にて、お前を拝謁はさせようぞ。御屋形様もお前に会いたがっておられる故な。然れど、お目見えしても決して争うな。我も汝の側に立って陳弁する故、対話せよ」

対話？　あの言葉もカタコトのハビちゃんと？　それができりゃ苦労しねーだろ。

だが、今その辺をクレームすると闇たちが怒りそうだな。

せっかく和解ムードなんだし、とりあえずは……黙って、従うような顔をしておくか。

その後、ヤキイモをスプーンで食べたシャーロックはどこかへ行ってしまい闇と津羽鬼、猴、食事中に割と打ち解けたらしいアリアとセーラも、フロやらシャワーやら寝るやらでバラバラいなくなってしまった。

野原みたいな温室には、俺と、ドラム缶のフタのスキ間から竹の釣り竿を出して残飯を取り込む壺だけが残っている。

アリアとセーラのお喋りを盗み聞きしたところによると、ほとんど自動操舵らしいイ・ウーは北極海へ向かっているようだ。全く揺れないから、移動してる感覚は無いけどな。

時刻的には……夜も更けてきた。

なので、ジャンヌに東京で聞いた話によればイ・ウーの初期メンバーでもあったらしい壺に、

「おい壺。俺はイ・ウー艦内の事がよく分からん。男はどこで寝りゃいいんだ」
そう聞いたら、
「お前なんぞ、そこで野宿すればいいおん」
雑だなオイ。
シャーロックにはあんなに丁寧に接してたのに。
だが、それで何となく分かったぞ。ここでまたジャンヌ情報が立ち上がってくるんだが、こいつは天才肌で、イ・ウー在学時代はシャーロックの言う事しか聞かなかったらしい。
俺は壺とシャーロックは天才同士、どこか共感したのかと思い込んでたが……
「壺。お前、シャーロックが好きなんだろ」
女子に対するデリカシーの無さ日本代表クラスの俺が、いきなりそう言うと。
「ぼふんっ！」
壺はドラム缶の中で爆弾でも暴発させたかのように、フタを真上にフッ飛ばした。
よく分からんが、何だあれっ。ドラム缶が噴火したみたいに湯気が出てるぞ。
「あなや！　何ぞ！　遠山ッ……！　な、な、何ぞッ……！」
天井にぶつかって落ちてきたフタを、はしっ。と4本腕で取った壺は、ばしん！
ドラム缶に改めて載せ、スキ間からぎろろろろり。赤熱化して光ってるみたいな

顔で、俺を睨んできた。湯気は壺の頭から上がってるっぽい。

分かりやすい体質の女だなー……

「何ぞも何もねーだろ。本人には言ったのか？」

「い、云える訳も無かろうおんッ。醜き我と、美しき卿と、つ、釣り合わぬおん」

誘導尋問に簡単に引っかかって、好きだってこと認めちゃってるし。

（……よし、コイツをハビ攻略の糸口にできるかもしれないぞ）

さっきは黙って従うような顔をしたが、闇に『ハビと話し合え』と言われて『ハイそうします』ってほど俺も素直じゃない。

ハビをどうすりゃ殻金が取り戻せるのかは未だに見当もつかんが、まずはヤツの情報をコイツから引き出してやる。

戦いは事前の情報戦で勝敗が8割決する。とか、高天原先生も授業で言ってたからな。

「お前は自分の体の形にコンプレックスがあるのかもしれんがな、女は見た目じゃないぞ。男の俺が言うんだから間違いない。それにお前、顔けっこうカワイイだろ」

「ま……ま、真実か。では如何とすれば抱かれようおん」

「そ、そんなに、足飛びな事を言うな。いや、だが、えーっと、そうだな……まずはアレだ、ラブレターを書け」

ラブコメ関連は最も苦手な俺が、小学生レベルの知識で出任せを言うと……

「こ、こ、こ、恋文とな！」

ぼしん！　とドラム缶のフタを閉じて中に閉じこもっちゃったよ。壺。

「……おい。壺」

コツコツ、と、ドラム缶をノックするが……沈黙している。

……いきなり、しくったかな。

と思ってたら、ぱか。フタがちょっと開いた。そして中から、ぺっ。『卿江』と毛筆で書かれた慰斗袋みたいなものが出てきた。

キャッチすると、時代劇とかに出てくるみたいな……手紙、か？　これ。

で、フタをちょっと開けた壺が、真っ赤な顔を4つの手で隠しつつ……

「遠山。しゃ、しゃあろっく卿に、渡してたも。我は男鬼に相手にされた事があらぬおん。そのような、こ、恋文など、手ずから渡す胆力があらぬおん」

ふーん。

鬼も鬼によっては、ラブレターを渡す度胸すらないのもいるんだな。

俺も出した事無いから、どんだけ勇気がいる事なのかは分からないけど。

「それと此の件、努努、他言無用おん。鬼と人は結ばれざるもの。天の理に逆らう事お

ん。闇や津羽鬼に見つかれば、喫驚され、嘲笑されようおん」

あーあ。乙女チックな。

「そんなにビビるなよ鬼のくせに。じゃあ、これをシャーロックに渡してきてやる。だが、タダってワケにはいかないぞ。郵便屋だって金を取るもんだ、お前、俺の質問に答えろ」

「……」

「じゃあこれを闇に渡してもいいか」

「な、なにゆえぞ！　止せ！　止さぬかおーんッ！」

……何かちょっと、かわいそうになってきたな。

だがここはハビ対策、つまりアリアのためだ。

心を鬼にして聞き出すぞ。

「鬼と人間の体は解剖学的にちょっと違うよな？　俺は、人間には無い鬼の器官に興味があるんだ。たとえば鬼袋ってのは、鬼の体のどこにある？」

アリアの殻金はハビの、鬼袋にある。

外科手術か何かでヤツの腹をかっさばくにしても、どこにあるか分からなきゃ困るのだ。

そう思って質問すると、やはりさっきシャーロックぼっかり見ていて闇たちと俺の話を聞いてなかったらしい壺は
質問の深意が分かってない様子で、
「人も好奇よの。胃のすぐ上おん」
それを、教えてくれたのだった。

他にも壺に艦内の地図を描かせた俺は、
(しかし、和紙に筆でよく描けるな、こんな地図。直線とかどうやって描いてんだ?)
と、旧字体の漢字が読みにくいながらもそれを辿って……
念のため、かつてシャーロックと戦ったICBM格納庫を査察しておく事にする。
ラジオハザードのマークが描かれた隔壁が自動ドアみたいに開き、その中には
(あちゃー……積んでるな)
大陸間弾道ミサイル。また、8本か。
だが、この外殻に描かれた『Polaris09』などの表記から分かる。
これは核ミサイルではなく、ある種の脱出ポッド乗り物なんだ。
そういや外堀通りで、ヒルダに襲われた俺とアリアをワトソンが助けた時もこれに……

「ワトソン君はナンバー5だったかな、君が前にここを訪れた時。リバティー・メイソンからスパイとして来た事は露見していたから、お客さんみたいな扱いだったけれどね」

俺が来ると推理してたらしいシャーロックが、さらに考えてる事まで言い当ててきた。

振り返れば、シャーロックは隔壁の脇でステッキをクルクル回している。

あれこれ予知とか推理とかをされたプライバシー侵害には、もう文句を言う気も起きなかったので

「……そうだろうとは思ってたが、やっぱりワトソンもイ・ウーにいたんだな。ていうかシャーロック。お前、前にここで緋弾を手放して、気に老けてたみたいだが今はまた、20歳ぐらいに見えてるぜ。緋緋色金も無しに、どうやった」

「キンジ君。君は、ある不可解な事実を提示された場合、その事実からそこに至るまでの全ての可能性を隈なく推知するべきだよ。死を遠ざけ、若返る方法が色金だけだとでも？

実際のところ君と別れたあの夏の日の夕刻、僕は生理学的には一度死亡している。しかし英国の某侯がルーマニア国立加齢科学研究所のマーリア女史……ブラド君の夫人に依頼し、死亡直後に蘇生させているのだ。今は彼女の協力も得て、ＮＭＮでサーチュイン遺伝子の活動を亢進させる若返りを行ってみたところだよ。成長期を何度も行き来して、どこまで知能を高め続けられるか試してみようと思ってね」

……よく分からんが、イ・ウー時代のコネでその辺も自由自在にやってるって事か。

だが、成長期がどうのとか言ったな。どうりで、さっきのテムズ川での手応え。前、戦った時より強くなってると思ったぜ。

「遺伝子なんかイジって、ブラドみたいな姿になっても知らねーぞ」

「ご意見は真摯に受け止めよう」

だが今は、前にここで会った時のように敵対的なシャーロックではないみたいだ。なので俺は

「で、お前は推理できてるのか。アリアがどうなるのか。できてるなら……教えてくれ」

コイツが味方でいてくれる内にと、率直に助言を求めた。すると、

「……恥ずかしながら、正直に答えよう。分からない」

「分からない？　なんでだよ」

かのシャーロック・ホームズがあっさり白旗を揚げた事に、俺は面食らってしまう。

「そもそも色金という物質が、僕の推理通りにいかない物だったのだ。それもあって僕はあの時、色金を次世代の君たちに託したのだよ。アリア君に与えた名前『緋弾のアリア』とは、アリア君に緋弾の謎を解明して欲しいという願いを込めた名でもある」

「……分からないからって、押しつけやがって。何でも分かるような顔をしといてよ」

「何でも分かる？　それは買いかぶりというものだよ、キンジ君。僕にも、推理できない

例外は数多あるのだ。今や僕は、その謎を鑑賞することが生きがいなのだよ。だから緋緋色金の事『緋色の研究』にも、こうして熱を上げている。ああ、君のことにもね」

「……俺？」

「メヌエット君にも言われたのでは？　君は『智』。不可能を可能にする男。つまり君は、歩く矛盾なのだ。矛盾は推理できない、理屈の例外。目には目を、歯には歯を、例外には例外を。つまり君は、君と同じ推理の例外――緋緋色金の真相に迫るのに相応しい人物だ。僕にとって、君は色金と同じほどに大変興味深い人物なのだよ」

「ゾッとしない事を言うなよ」

世の中の粗方が推理できてしまう、シャーロックにしてみれば……

逆に『推理できない物事』のほうがずっと面白い、って話か。

そしてそれがどんなにヤバイ物事であったとしても、頭が桁外れに良くて力もあるから実際に関与できてしまう。挙げ句、周囲を巻き込んで答え探しをする――危険な名探偵だ。ったく。それで色金なんてパンドラの箱を開けてくれちまうから、こっちはいい迷惑だよ。で、そのパンドラの箱を閉じるのはもう1つのパンドラの箱、俺の役目って事かい。

（だがまあ、『後片付け』も武偵の仕事か……）

俺は深くため息をつき

そういえば、シャーロックはこの格納庫で俺と戦った時……男女の恋心は推理できない、とも言ってた事を思い出す。世界一の名探偵とはいえ、何もかも推理できるわけじゃないって事は最初から宣言してたワケか。

……あ、そうだ。男女で思い出した。

「話は変わるんだが。お前に手紙だ」

と、俺は防弾制服のポケットに入れていた二つ折り和紙の封筒を取り出す。

「手紙？」

「推理できなかったか」

「ああ。推理外の出来事だね」

だろうね。というのもこの手紙はラブレター、恋心のカタマリなんだし。

どうだね、興味が湧くかねシャーロック君。

「壺からだ。後で読んで、返事書いてやれ。内緒の手紙だから、取り扱い注意だぞ」

さっきヤキイモ貰ったりとか熱視線を送られたりで、この名前を出せばピンと来るかと思ったが……

「なんとも不思議で、興味深い話もあったものだ。同じ船の中で、郵便のやりとりとは。しかもそれを代理人が渡してくるとなると、実に深い謎といえる」

シャーロックは、キョトン。驚くほど推理できてない。

女からナイショの手紙をもらうというシチュエーションに陥っても、その手紙の内容が全く思いつかない様子だ。

コイツ……俺系だな。俺は病気持ちのせいだが、シャーロックはいつも謎解きにばかりかまけてて、女のことなんか普段まるで眼中にないんだろう。

俺から手紙を受け取ったシャーロックは、内容が推理できない事が悔しいのか……開封する前に、アリアと似た仕草で腕組みした。

本気で推理する時のクセなのか、さらにメヌエットと似た仕草でパイプも咥えた。

「事件の外見が不思議に見えれば見えるほど、その本質は単純なはずだ。平凡な顔ほど、印象が残らないのの逆で……」

そして引き続き、ブツブツ呟きながら『卿江』と題された手紙を手に考え込んでる。

マジで分からないらしい。

壺、お手柄だぞ。今この時だけは、この危険人物シャーロックもしばらく、安全な名探偵でいてくれるみたいだよ。

シャーロックは意地でも推理しようとしていたが、人が自分宛のラブレターを手にして

考え込んでるのをニヤニヤ見続けるほど俺も無粋じゃない。ので、格納庫を出る事にした。

で、艦内図を頼りに、寝心地のよさそうな場所を探し歩く。

普通の兵員室もあったが、そこは不幸に定評のある2年の遠山だ。ガチャッと開けたら女子がお着替え中でボコられるって運命が待ってんだろ？　さすがに俺も危機管理能力が備わってきてるんでね。そうはいくかっての。

というわけで居室は避け、安全そうな施設を狙って艦内をさまよう。

図書室のソファー。寝床として悪くなさそうだな。穀物倉庫は、ちょっと粉っぽいかも。ホールにあった巨大シャコ貝の中も、なかなかどうして悪くなさそうだぞ。

と、ブラブラしてると

何だか分からん暗い部屋に出た。地図上では『ランドリ』とか書いてあるんだが？

洗剤のいいニオイがするから、もしや風呂かと身構えたが……電気を付けたら、違った。

大きな日本製のドラム式洗濯乾燥機が並んでる。

ランドリーって事か。実際、コインランドリーぐらいの広さの部屋だ。

そういやシャーロックは、1週間航海するとか言ってたしな。

せっかくタダなんだし、俺も後で洗濯させてもらおう。
（このサイズのランドリーを使ったら、台場なら８００円は取られるぜ？　儲けたな）
と、作動中の洗濯機をペシペシ叩いていると……
「……？」
足下に、何か落ちてる。ちっさい布だ。
なんだ？　と思って拾い上げてみる俺。
……
……？
なんかハンカチみたいな、白い布で……若干くたびれてるというか、使用感があるな。
だが縫い目があるとこを見るに、ハンカチじゃない。
……イヤな予感がするぞ。
と、広げていくと。
「……ッ……ッ……！」
パ、パンツ……
女子の、し、下着じゃねーかッ！　下の！　なんで床に落ちてんの！
しかも、白木綿でヘソ下にリボン１個のこれは見覚えがある。へ、竜巻地獄だっけか。
突風の術で俺とサイオンとハワード王子が吹っ飛ばされた時にモロに目撃してしまった、

元眷属、元イ・ウー主戦派残党――セーラ・フッドちゃんのじゃないですか！

などと困惑して硬直してたのが、運の尽き。

不幸に定評のある俺の前で、がらりら。

「……！」

ブラウスやインナーの洗濯がそろそろ終わるとみて、やってきた

颱風のセーラさんが、俺とご対面。

「……！」

セーラは、その布を仮面のごとく被ろうとしているかのように広げて静止していた俺を見て……ぞぞぞぞぞぞぞぞ！

と、音が聞こえてくるような調子で震え上がってる。

そして、かっぴらいた藍銅色のジト目に――じわあぁあ、と涙を浮かべ

「うわあぁあぁぁ」

たたたたた！　駆けてきた。

カマイタチで首でも切断されるかと思ったが、セーラは驚きのあまり魔術を使えるほど集中ができないみたいだ。そこは、よかった！

そして俺にボコン！　と体当たりしてきて、からの、ぽかぽかぽかぽかぽか！

「かえせ。かえせっ」

前に富嶽で弓を取られた時と同じ、弱っちいハンマーパンチを胸に連打してくる。

普段クールなのに、超必死になってるのもあの時と同じだ。

だが今回その理由は分からんでもない。

たぶん他の服と一緒にブツを洗濯機へ入れようとした際、床に落っことして、そのまま気づかず帰ったんだろうが……

何にせよ俺がそれを手にしていたのは、セーラにとって身の毛もよだつショッキングな光景だったのだろう。見たところ14～15歳の多感なお年頃っぽいし。

――ピーッ――

洗濯機が洗濯完了の音を上げた時、俺は……

確証は無いのだが、なんと手にした物でなのか――驚くべきことに、自分がヒステリアモードになっている事を認識する。

だがこれは数瞬しか続かないぞ。そういうタイプの血流だ。

（――ッ！）

次の瞬間、ライムの香りをさせて銀髪を跳ねさせたセーラが、ぱしっ。

俺の手から、それを取り。

「……何を返せばいいんだい？　セーラ、君はそれを何かと見間違えた？」

トボケる俺は、セーラが持っている艦内図を指し示す。
「……？　……？」
セーラは壺が描いたその地図を見て、バッ、と洗濯機にへばりついて中を見て、そこに自分の下着が入ってる事に気づくと
「かえれ！」
手近な洗濯カゴを掴み、投げつけてきた。
「どうしたっていうんだい？　ずいぶん不機嫌だったけど」
「かえれ！」
「わ、分かったよ」
適度にオトボケを演じた俺は、仰せの通りランドリー室を出ていく。
そして廊下に出て……フーッ……と、安堵の息をついた。
やってから分かったが、さっき、俺は
右腕だけで、桜花を使ったのだ。パンツを亜音速でランドリーに入れるために。
人間はおよそ4秒に1回、１２０ミリ秒のマバタキをする。セーラもその例外ではない。
なので俺はセーラがマバタキした隙にドラム式洗濯機のフタを開き、下着を中に安置

し、フタをして、艦内図をポケットから出し、頭上に掲げたのだ。その間、１２０ミリ秒

その後、艦内図をセーラが取ったのである。

人間が全力で拳を突き出す際、普通は全身の筋骨を「一気に」動かす。

しかし桜花では、全身の筋骨を「順番に」動かす。
体内で後ろから前へ速度を次々とパスし、加算していくのがその術理なのだ。
速度を通常の桜花、つまりマッハ約1に到達させるために必要なパス回数は、4～6回。当初はこれを『つま先→膝→胴→肩→腕→手首』でやったが、スカイツリーでワトソンと戦った時には『左手首→左肘→左肩→右肩→右肘→右手首』でも出来ている。
つまり、桜花に使う筋骨は体のどこでもいい。
これらの条件から、ヒステリアモードの頭脳が……新たな技の、断片を……
思いつきそうだったんだが、この辺りでヒステリアモードが終わってしまった。
多分、今までの最短時間だったな。滞ヒステリア時間。
世間には、女性そのものより女性の衣服や持ち物にβエンドルフィンを分泌する体質を持つ男性もいると言われているが……
ああいった布キレだけに対して脳内物質を本格的に分泌する倒錯は、未熟な俺には高度すぎたみたいだよ。

イ・ウーは速力を上げ、47ノットでの浅深度没水航行と、時浮上を繰り返して北極海を通過中とのことだ。
世界最速クラスの原潜とはいえ、これは一種の船旅。日本近海のキノクニまでは165

時間もかかる。
時刻帯を幾つも跨ぐので厳密に何日とは言いづらいが、体感的にはだいたい6日だ。
で、これを機にノンビリ休息を取りたかったんだが……
3日目の朝、早くもアリアに捕まった。
元々は超人が技を教え合う学究組織だったイ・ウー艦内には、教室のような部屋もあり
そこに俺を引っぱるアリアは、
「あんた昨日1日中寝てたでしょ。日本じゃタイミングを見て武偵高に行って、期末試験ちゃんと受けるのよ？」
などと勉強を強要しようとしてきた。
アリアのスパルタ教育法は、誤答すると俺の首を絞めるというオリジナリティー溢れるもの。死への恐怖心が集中力を喚び覚ますため、なにげに成績は上がるんだが命が危険。
なので俺は、
「こないだ自分で言ってたろ。いま日本に帰ったら密入国になるって」
と、もう祖国を捨てる覚悟で命を守ろうとしたんだが……
「その辺はもう大丈夫よ。今日明日中には何とかなるわ。貴族院の保守党議員に電話して、銭形をつつかせたから」

とか、アリアが言ってくる。

「貴族院？」

「知らないの？　バカなの？　イギリスの上院よ。日本でいう参議院」

俺の無知さにマジでビビったような顔で、アリアがバカにしてくるので……

「ケッ、騙されんぞ。お前は潜水艦内に何日もいて暴れられないから、勉強にかこつけて俺でストレス発散しようとしてんだろ。そんな陰謀には引っかからん。だいたい、お前がどんだけ名家のお嬢かは知らんが、そんなワガママを聞いてくれる国会議員なんかがいるわけねーだろ。いるんだったらどこのどいつか言ってみろ」

と、バカはバカらしくアリアによる陰謀説を捲し立てると

「お父様よ。確かに公私混同なんだから、ナイショにするのよ？」

アリアはそう言ってからの、への字口。

ホームズ家から浮き気味のアリアは、家の話をあまりしないから知らなかったが……

……国会議員さんだったのな。アリアの父ちゃん。

自説を1秒で論破された俺は、アリアによるリフティング抱っこ（アリアが両手で俺を頭上に持ち上げて運ぶ方法。主に俺が逃げようとした場合などに使われるが、どう見ても抱っこではない上に、藻掻いて落っこちるとアリアのツノが背に刺さる非人道的な運搬法。命名：アホの理子）で処刑教室に強制連行された。

で、そこからは家庭教師みたいなアリアによる春期講習の時間。

俺に付きっきりで勉強を教えてくれるアリアは、現国や古文はイマイチだが他の教科が軒並みデキる。なお、問題集や参考書にあたるものはイ・ウーにあった。英文だけどな。

「……そういや、お前は何やってたんだ？　昨日」

数学の時間で、アリアが指定した三角関数の問題を解きつつそう尋ねると……

「曾お爺さまと、積もる話をしてたわ」

「緋緋神に関して、何か言ってたか」

「その辺はあんまり。曾お爺さまにも分からないんだって、だからあたしが何とかしないとね」

「……恨んでないのか。お前。シャーロックのこと。去年、緋弾を撃たれて」

「別に。これが犯罪者とかならず者国家の手に渡ったら」

肘をついた机越しに俺のノートを見ていたアリアは、自分の左胸……緋弾のある位置に小さい手を当てて……

「緋緋神より、もっと悪い事に使うかもしれないでしょ。曾お爺さまは、その緋弾をあたしに託した。ホームズ家の欠陥品と呼ばれたあたしに、女王陛下からの重要な勅命を引き継いでくれたのよ。あたしはその期待に、ハッピーエンドで応える義務があるわ」

崇敬してるシャーロックに対してとはいえ、たとえ撃たれても、事態を大局から捉えてそう言えるってのは……

器が、でかいよな。アリアは、こういうところ。体はちっちゃいけど。

「まあ、撃つ撃たれるは武偵あるあるだしな」

本当は『まあ、お前もよく俺を撃つしな』と言いたかったのだが、言ったら撃たれるので、俺は発言を無難な一般論にスライド。これぞリスクマネジメントである。

「撃たれた後で殻金を外されて緋緋神に乗っ取られるリスクが発生したのは、宣戦会議であたしが不覚をとったからだし。メヌエットは、足飛びに白雪に会えって言ってたけど、先にハビの所へ行って殻金を取り戻してから自分のミスをフォローしてからの方が、スッキリ会える。だから、イ・ウーに乗って良かったわ」

「そういやイ・ウー……これ、海自に預けてたのか？」

テムズ川で自衛隊の旗を掲げてたんで、気になってたそこを聞くと、

「うん。ここで戦った後、割とすぐね。去年、修学旅行Ⅰで関西に行った時……つまり、あんたがレキとイチャイチャしてた時」

「いや、あの時、俺はレキに狙撃拘禁」

「あんたがレキとイチャイチャしてた時にも。曾お爺さまにまた盗まれて守秘義務契約が

失効したからこうけど、あたしは呉港で車輌科の武藤と、それから前イ・ウーに乗ってた理子に依頼を発出して、拿捕したイ・ウーの臨検と海自への寄託の条件交渉のテーブルに付いてたのよ。イギリス海軍とも連携しつつね。事後処理をキッチリしてたの、あんたがレキとイチャイチャしてた時にも。ほら手が止まってる。ていうか！　あんた高校生にもなって、ここ。足し算問違ってるわよ？　バカキンジ！」

「は、はい。すみませんでした」

敬語になってしまったのは、あの頃のレキと俺の事を思い出して不機嫌になったアリアが　俺のノート上の計算ミスを、さっき懸念した通り拳銃の照星で突いたからだ。

しかし、俺が『あの後どうなったんだろうなー沈んだのかなー』ぐらいに思ってたイ・ウーが……またシャーロックに盗まれたのはともかくこうして動いてるのは、アリアたちのおかげでもあったのか。

核アレルギーの日本とはいえ、海上自衛隊からしてみりゃ原潜はノドから手が出るほど欲しかったアイテムだろう。となるとそれを極秘裡に預け渡したアリアには、よっぽどの好報酬がもたらされたに違いない。イ・ウーを壊滅させた立役者の俺は、1円ももらってないのに。なんかズルくね？　それとも、俺の要領が悪いのかな。そういうとこ。

まあ何にせよ、また盗まれてちゃ世話ないけど。

そうこうして

脅されながらのお勉強が一段落すると、時計を見たアリアは、
「よしよし、はい、よく頑張りました。ご褒美に息抜きタイムよ、はい立つ、はい歩く。ついて来なさい。昨日は見れたけど、今日はどうかしらね」
と、妙にウキウキした感じで俺を連れて衣装ロッカー室へ向かった。
そしてそこで、ヒルダか理子あたりが置いていったと思われるオシャレなフェルト製のロングコートを着て、俺にもクラシックな男物のフロックコートを渡してくれる。
「なんで厚着するんだよ。艦内は暖かいだろ」
「外に出るからよ。いま、浮上航行中なの。ま、あんたが冷凍人間になりたきゃ着なくていいけど」
「そ、外？　いくら浮上中だからって――ここは北極海だぞ？」
驚く俺に、「ふふっ」と毛糸のミトン手袋をした手で口元を隠して笑ったアリアはとたたた、と、ツインテール付きテルテル坊主みたいな姿でロッカールームを出ていく。
ので、俺もコートを羽織ってアリアの後を追う。
（これ……シナモンみたいな香りが、ちょっとだけするな）
ああ。多分、ワトソンのだ。

ワトソンはイ・ウー時代も、男って事で通してたんだな。

苦笑いしつつも、俺はホールを抜けて急で狭い螺旋階段を上がるアリアを追いかける。また頭や肩が上の段に引っかかったが、アリアは艦橋内を上へ上へとスルスル行けてるな。言ったら頭を蹴られるから言えないけど、引っかかる部分に乏しいからだねあれ。

「昨日はホントに東へ向かってるか、天文測量しとこうと思って上がったんだけどね」

浮上航行中の表示を確認し、タッチパネルを操作してハッチを開けるアリアに

「お、おい。このパネル。外気温、マイナス25度って書いてあるんだが」

「露天艦橋にヒーターを入れたから大丈夫よ。天気は快晴ね。あんたを連れてるにしてはラッキーだわ」

ゴクゥンッ……と、最上部のハッチが開き、冷え切った潮風が吹き込んでくる。外だ。

アリアはウィンクして、俺の手を引く。

そして俺たちは2人つきりで、バスぐらいの広さがある艦橋の上に出た。

北極海上の風はやはり、冷たい。足下の通気口からヒーターの温風が吹き上げてはいたが、体感温度は0度ってとこだ。

船外は、真っ暗だ。艦首が凍てつく海水を掻き分ける遠雷のような音が聞こえなければ、まるで宇宙空間にいるようにさえ思える。

「まだ昼過ぎのハズなのに。なんで夜なんだ……？」

俺が左右を見渡してつぶやくと、
「極夜よ、白夜の逆で、冬の北極付近は正午でも日の出が来ないの。つまり日中、夜なのよ」
……凄いな。
北極は、まさに世界の果てだ。
緯度が上がると夜が長くなる事はヨーロッパで体験してたが、その究極形がこれなんだ。
「日中、夜か。ヒルダがいたら喜ぶだろうな。フィー・ブッコロスって」
「きっとね。ニコニコしながらブッコロスとか言うからヘンテコよね、あの子。ふふっ」
ドドド……ン……ズズズ……ズズ……ン……
遥か遠くで戦争みたいな音がしたので、眉を寄せて艦尾方向を見ていると。
「今のは大きな流氷が崩れた音ね。テレビとかで見たことない？」
そうアリアが説明してくれた。驚くことばかりだな、北極海。
世界中どこでも、来てみないと分からない事だらけだよ。
だが……
アリアなんでお前、上見てんの？　音の方じゃなくて。

あとちょっと気になるのが、さっきからチカッ、チカッと、瞬感じる薄ピンクの微弱な光。イ・ウーから何らかの発光があるのかとも思ったが、それにしては不規則な明滅だ。

「何だ？　何か、どこかで光ってないか……？」

「あんたカン悪いわねぇ。はい上見るっ」

まだ上を向いていたアリアにアニメ声で命令されて、俺は上を

（……っ……！）

天空のはるか上で、ヒラッ、ヒラッ、と……

断片的にだが、カーテンのような形をした

「――オーロラ……か。これ」

ピンク色のオーロラが、翻っていたのだ。

生まれて初めて見たよ。オーロラ。

オーロラとは、太陽から降りそそぐ帯電粒子が極地の大気圏に突入する際、高度１００km以上の夜空に見られる発光現象。という事までは、知っちゃいたが……

あんなに、はためくように素早く動くものだったんだな。写真で見たことしかないから、静止してるもんだと思い込んでたよ。あと単色のグラデーションなのも意外だった。

ていうか……美しい、な。

そして雄大だ。ガラにもなく感動してしまうほどに。

「昨日の方がよく見えたのよ。やっぱりキンジがいるとツキが落ちるのね」
などと俺をディスるアリアも、その声色は明るい。
「見た事なかったが、こういう現象だったんだな。オーロラって」
「あたしは小さい頃に飛行機から見た事あるけど、その時はもっと霞みたいな形してて、黄緑色で、こんなに動かなかったわ。オーロラにも色々あるらしいのよね」
俺と、アリアは――そのまま、2人でその光を見上げ続けた。
「……ねえキンジ」
「なんだ」
「今日みたいに……またあたしがあんたを呼んだら、ついてきてくれる？」
「なんでそんなこと聞くんだよ。ついてかなきゃ撃つだろお前」
「こういう、一緒に景色を眺めるとか、1ポンドの得にもならないお遊びでもいい？」
否定せんのかい、『撃つ』件。
「……いいさ。遊んでやるよ。あれもこれも無事に、全部片付いたら――お前と会った頃みたいに、また学園島のゲーセンに行こうな。UFOキャッチャー、またやろう」
「キンジ……」
このイ・ウーが向かっている、キノクニ。

そこには鬼の総大将・ハビがいる。

ハビは、アリアの殻金（カラガネ）を持っている。

殻金とは人間と緋緋色金（ヒヒイロノカネ）との結合のうち、緋緋神（ヒヒガミ）が人格を乗っ取りに来る『心結び』を断ち、超能力を使えるようにする『法結び』だけを許容するフィルターのようなもの。

それを取り返せば、アリアの緋緋神化は――とりあえず、押さえ込める。

闇の、すなわち俺（オレ）の7倍は強いというハビからどう取り返せばいいのか分からないが、それだってきっと……何とかできるさ。俺と、アリアなら。今までだって、あれもこれも何とかしてきたんだからな。

2弾　破星燦華鎲（はせいさんがふ）

北極海からさらに3日の航海を経て、ベーリング海峡を抜けたイ・ウーが停泊したのは南太平洋上の公海。

シャーロックに教わった緯度経度を元に猴（ゴウ）と2人で海図で確認してみたところ、ここは日本の南、台湾の東、パラオの北、グアムの西。

なんとも、どこと説明しづらいフィリピン海の一部だった。

浮上したイ・ウーの艦橋ハッチを開けると、艦内外の若干の気圧差のため、熱い潮風の湿気がムワッと吹き込んでくる。まだ午前中だが、摂氏30度はあるな。外。

シャーロック、閻と津羽鬼（ツバキ）、セーラ、猴、アリアと俺が艦橋にゾロゾロと上がると……目が、チカチカする。日本の真夏より眩（まぶ）しい、体験したことのない陽光だ。

「……っ……」

目が明るさに慣れてきて、ようやく見渡せた海面――その光景に、面食（めんく）らう。

なんという、どこまでも透明な海だろうか。

水が澄み切っている上に波が無く、直射日光が浅い海底まで届いてるから……

まるで、この真っ黒なイ・ウーが白い砂漠の上に浮遊してるようにさえ見える。

だがそれは錯覚だ。だって今、イ・ウーの船体真横で、バンドウイルカが小魚の群れを追って泳いでいる。ゆったりと海底をさらうように泳ぐ、マリンブルーのジンベエザメも見える。

そして艦首方向２００ｍの距離に見える――孤島も。

「あれが鬼ノ國ですか」

「左様。当代の鬼ヶ島ぞ」

カットオフ・セーラー服姿で涼しそうな猴――念のため、薙刀のような青龍偃月刀を持ってきている――と、和服の闇が、そんな会話をしてる。

（あの孤島が、キノクニか）

俺は手で庇を作って目を細め、その島をつぶさに見るが……なんとも、奇妙な島だ。

俺が知る限り、島とは砂浜や岩場の海岸で海と接するもの。しかし、キノクニは木々で海と接している。島全体がマングローブの密林で覆われており、海中に伸びる無数の幹というか根というかが海底に突き刺さって広がっているのだ。

まるで……いま俺の横でちっこい口をポカーンと開けてキノクニを見てるこのアリアと出会った、その前日に見た映画。天空の城・ラピュタが海に降りたような島だ。

密林に覆われた島内は見えないが、その広がった枝葉の下で海に脚とタイヤを浸らせて

いる大型爆撃機・富嶽のサイズから測るに、２００m四方ぐらいの小島だな。

富嶽の側面には、補修した跡がある。例の、東京上空を飛んだ機体か。

機内でも鬼がそんな定時報告をしてたが、日本からこの海まで飛んできて……着水したって事だろうか？　水上機には見えないから、どう離発着してるのかは見当がつかないな。

「あの島は元々、旧日本軍が海底油田採掘のために建設した着底式採掘場だったのだよ。その遺構に周囲の島々から漂着した植物の種子が根付いて、今や島のようになっている」

ジャケットを肩に引っかけて持ったシャーロックが、パイプを片手にそんな説明をしてくれる。

旧日本軍の、海底油田採掘場……

今じゃそこに、鬼たちが棲み着いてるってワケか。

「国連海洋法上『島』とは見なされず、どこの国も領有を主張し得ないこういった遺構はおもしろい事に、あちこちの公海にあるのだ。我らがイギリス近海でも、放棄された海上要塞を占拠して独立宣言をしたシーランド公国が有名で……」

などと知識をひけらかすシャーロックの講釈は、途中から聞き流しつつ

（あそこに、ハビがいるのか）

と、しばらく島を観察していると……そこから、一本マストの四角帆に『無』一文字を染め抜いた木造船が水面を滑るようにやってきた。

船齢は若いものの、あれは安土桃山時代から江戸時代にかけて使われた和船、弁才船だ。

それも小さな初期タイプを造ったらしく、帆走・櫓漕両用の小型輸送船って感じだな。

藤色の和服を着た女鬼が、ねり櫂を使ってそれをイ・ウーの艦橋後部にピッタリ寄せてくるので……

その船へ、俺たちはワイヤーとアルミパイプで出来た縄ばしごを垂らして下りていく。

和服やスカートという衣類の構造上、俺とシャーロック　男2人は、ハシゴを降りていく女子をまず見送ってから、降りる……が……

あれ？　シャーロックが、艦橋に残ったまま降りてこないな。

「お前は行かないのか、キノクニ」

「うん。僕はここで失礼しよう。鬼ノ國の諸氏とは占い仲なので、挨拶もせずに去るのは失礼とは思うのだが……壺君がドラム缶から出てこないからね」

「壺が？」

「どうも病気のようだから、これから保養地に出かけて看護しようと思っているのだ」

確かに、壺は艦橋に出てきてなかったな。
単に遅刻しただけかとも思ってたが……
壺を置いていった闇や津羽鬼のムードは、来ないのを了承してる感じだ。
だが、鬼が病気になったら、キノクニにもいるであろう鬼の医者に診せるべきだと思うが……？　と、言いかけて気づいた。
「――あの手紙の中身、推理できたのか。シャーロック」
「できたかどうか、推理してみたまえ」
「できなくて、読んだんだろ」
「君には探偵の才能がある」
シャーロックが異性をニガテとしていたというのは歴史家たちにとって周知の事実で、今も実際コイツは苦笑いしているが……
さすがのノーマル俺にも、読めたぜ。
「お前、ここで女を言い訳に、イ・ウーを持ち逃げする気だな？　俺とアリアから」
「曾孫娘に一度あげたものを取り返すだなんて、どうにも格好が付かない子供っぽい行為なのだけどね」
……回りくどい言い方だが、あっさり肯定しやがった。
人が言うように、どうも僕には子供っぽい一面があるらしくてね。またこの艦を駆っ

て、大海原を冒険したくなったのだよ。だからしばし、貸りることにした」

「……ったく。原潜をレンタカー感覚で乗り回しやがって。

だが動機が興味本位とはいえ、シャーロックにはハビのいるキノクニまでタダで運んでもらった恩もある。

それに……コイツは、いざハビとの戦いになったら味方についてくれるか怪しい男だ。

アリアにはともかく、俺や猴には敵対するリスクが拭いきれない。

正直、この辺で離れてくれるんなら、放っておくべきだろう。戦術的には。

「……シャーロック。今回は、見逃しとく。アリアや猴には、俺からうまく言っとくよ」

「ありがとう、キンジ君。そして、さらばだ。アリア君をよろしく頼む」

お前も壺も不器用そうだから、何もできないまま付かず離れず状態になるんだろうって事も読めてるが……

武士の情けならぬ、武偵の情けだ。

男女が2人きりでいようってのをジャマするほど、俺も鬼じゃないんでね。

キノクニへ渡る弁才船で、俺はシャーロックとイ・ウーについてヘタな説明をしようと試みた。そしたら、アリアも猴もなんとなくその辺の空気は察してた様子で驚かされた。

闇や津羽鬼までもだ。女って生き物は、こういう事に対するカンは揃って鋭いんだな。

で、闇たちに案内され、マングローブを分け入って入った島内は……案外、涼しかった。

少し磯ぐさい島の奥には、かつて石油採掘拠点だったのであろう穴だらけの廃墟が、緑に埋もれるように建っている。手狭な校舎ぐらいのサイズの建物で、その屋上や周囲のあちこちに荒ら家が建て増されているものだ。

その、そこかしこに……

「……いるなあ。歌舞伎町の雑居ビル街を歩いてるみたいなムードだぜ」

「ガ、九龍城砦みたいなのです。右も左も、上も下も、鬼だらけです」

俺がボヤき、立てた偃月刀を引きつけるように持った猴がビクビクしてる。

ここは、かなりの人口密度……いや、鬼口密度の国だ。狭い土地の至る所に鬼がいて、アフリカンな柄のミニスカート和服で生活しているのがチラチラ見える。

かつて聞いたとおり鬼は雌性先熟。18歳で成長が止まるらしく、一見、若い女だらけのパラダイス・アイランドに見えるのかもしれないが――その頭には1本～2本の、位置や長さのまちまちなツノが生えている。女は女でも、女鬼の島って事だ。

一升瓶を傾けながらこっちを見てる鬼がいたり、炊飯してるらしい湯気が見えたりで、

少し気になった俺が

「おい闇、お前ら酒とか食い物どうしてんだ。強盗しに入るコンビニは見当たらないぞ」

先日バイト先で強盗に入られた恨みを込め、イヤミっぽく職務質問する。

「調達の話か？　我等は原油を商い、ベラウで米や酒を購う」

と、闇が示した足下、錆だらけで穴だらけの鉄板の下

眼下の海面では、これまた錆びたピストンみたいな、水飲み鳥みたいなサッカーロッド油井が駆動していた。

さらに、効率は悪そうだが極めてコンパクトな油・ガス精製設備も併置されてる。見たことも無い形状だ。多分、壺の発明だな。

「ここには百鬼からの同胞が居る。ベラウには日の本ほど人も居ぬ。里を喰らい潰し人を逃がせば、後々何としょう？　故に、貿めるのだ」

占文の成績が微妙なアリアは「？」という顔をしていたが……俺は、何となく分かるぞ。

ベラウとは、群島国家パラオの事だ。パラオは旧日本領だったので、日本語が公用語になっている州があるほど日系人が多い。鬼たちが好む日本の食品も手に入るのだろう。

だが、そこで物資を強奪したら、人が逃げてしまってそれっきりになる。だから貿易で

恒常的に物資を買い付けることにしてるのだ。キノクニの鬼たちは。
「蜂蜜が蜂にしか造れぬのと同じで、米と酒は人にしか造れぬ。造らせて、採るのだ」
闇の隣から、津羽鬼は人間を虫扱いするような言い方をしてくるが
俺に言わせりゃ、こいつらは化石燃料にあぐらをかき、ぐうたら暮らしているだけだ。
見回したところ皆ゴロゴロして、食うか呑むか、寝るか、鬼同士ジャレ合ってるだけ。
勤労意欲のありそうな鬼は1匹もいない。釣りをしてるのはいたが、それも漁労といえる
レベルじゃないしな。こいつらには『働く』という概念が、たぶん無いのだ。
羨ましいといえば羨ましい暮らしだが、やはり人間とは違う種族だな。鬼ってのは。
「そんな話はいいから。あたしはハビに会いに来たの。あんたたち、話は曾お爺さまから
聞いてるんでしょ」
アリアがそう言うと、俺たちを先導する闇と津羽鬼は、
「覇美様はこの天守閣に御座す」
「然れど、今時分は御休みであろう」
と、旧日本軍の居住設備だったと思われる4階建ての建物に入っていく。
コンクリートがボロボロで錆びた鉄骨があちこち露出してる、ドアや窓ガラスさえ無い
廃墟を『天守閣』などと呼んでるのには苦笑してしまったが……

（今、闇……アリアがハビを呼び捨てにしたのに怒らなかったな）

オランダとかじゃ俺にマジギレしたくせに。なんでだろう？

「■■■という俺の疑問は、城に入るなり「おお！　御雛様ぞ」「御雛様がいらした！」と集まってきた女鬼たちの様子で解けた。

どうも、鬼たちはアリアを仲間だと……それも目上の存在だと思ってるらしく、崇めてきているのだ。本人は赤紫色の目をキョトンとさせてるが、俺には不思議は無いね。実質鬼みたいな女だし、ツノあるし。

（しかし、お雛様って呼び方は何だ……？）

桃の節句の人形の事じゃないだろう。寮の俺の部屋で『あんたがおせんべい食べる音で、昼寝してたのに目が覚めた』とかいう理由で俺の背中に発砲してきたような女をモデルに雛人形を作ったら、女児の情操教育に悪いしな。

「なんか神様扱いされてるみたいなんだけど？」

「こ、猴も歓迎されてるみたいなのです」

アリアは腕組みし、やや賓客っぽく扱われてる猴もキョドってる。が、俺に寄ってくる鬼はいない。

（……アリアは緋緋神になりかけの……つまり雛。だから『お雛様』か。不完全緋緋神の

猴は、緋緋神の化身ってとこなんだろうな）

と、心の中で合点する俺だが……ともあれ、1人でここに乗り込んでたら瞬殺されてただろうよ。これもシャーロックの思惑かもしれないが、アリアや猴と一緒で良かった。

というのも女鬼たちは階段やその踊り場でゴロゴロしてたんだが、どいつもこいつも鬼だけあって戦闘力は人間の比じゃなさそうなのだ。しかも7～8匹に1匹は、闇や津羽鬼みたいに極端に強そうなのが紛れてる。たぶん、鬼には戦闘タイプと一般タイプがいるんだろう。

木漏れ日というかコンクリート漏れ日の差す3階に着くと、

「同、ここで待たれよ。津羽鬼は覇美様の御機嫌を。後、お目通り叶うように致せ」

「はい。闇姉様」

闇と津羽鬼がそんな会話をし、闇がどっかりとあぐらをかいたアフリカンな柄のゴザに……俺たちも、とりあえず座った。

「闇。お前は、ハ……お前らのボスから、殻金を取り戻すのを仲介してくれるつもりなのか？」

俺はハビの名前を呼ぶことを避けつつ、一応そこを確認してみる。

「其の通り。我等はお前達の愛のため、覇美様の御意志に異を立てるつもりよ」

「愛って……」

「あ、あ、愛っ？」

俺は僅か2文字でテンパるアリアと共に赤くなるが、闇たちに愛理論を吹き込んだのは他ならぬ俺なので何とも言えないところだ。

猴はたまた近くを通りがかったヤモリを捕まえてたので、アリアと俺の間に流れた超こっ恥ずかしい空気はバレずに済んだけどな。

「御意志ってのは、アリアの緋緋神化か」

気を取り直して質問した俺に、闇が頷くと

セーラー服で体育座りしていたアリアが、そのツリ目を少し鋭くさせる。

「緋鬼の祖神・緋緋神様は、覇美様と志を同じくする、元々は覇美様こそが、緋緋神様の御雛様だったのだがな……」

「ハビにも、あたしや猴みたいに緋緋色金が埋まってるの？」

尋ねたアリアに、しかし闇は首を横に振った。

否。覇美様は緋緋色金と共に在らず。緋緋色金と共に在ったは、信長公ぞ」

「……信長公……？」

「信長って、織田信長のことか？」

目を丸くした俺が言うと、
「うむ」
今度は闇は首を縦に振るので、目玉が飛び出しそうになる。
（信長は世界中から珍しい財宝を集めてた、って何かの本で読んだが……その中に、緋緋色金もあったのか……ッ）
織田信長。
それは説明不要で誰もが知ってる、戦国時代の武将の名だ。
日本どころか世界史上にも名高い戦の天才で、その残虐さから
「こ、猴は『織田信長は鬼だった』という小説を、中国で読んだ事があるです。それは、史実なのですか？」
くりくりした目を見開いた猴が、俺も思ったことを聞いてる。
なんかレキの源義経に続いて、歴史家が聞いたら卒倒しそうな所に触れてるな。俺たち、今。
「否。信長公は人ぞ」
……よ、良かった。そこはホッとしたぜ。
一方のアリアは、その点について俺より調査を進めていたらしく……

「どうりでね。あんたたちがカドゥガン・レストランで広げてた陣幕の紋章、ジャンヌに調べてもらったら『五瓜』『無文字』どっちもノブナガのマークだったし。で、そのノブナガがハビとどう関係があるの。子孫なのかしら？」

面食らう事なく、冷静に話を進めている。

「否。永禄から天正の頃、信長公は緋緋色金を通じ、緋緋神様と意気投合なされていたのだ。緋緋神様は佳く佳く、信長公を加護なされた」

闇は話す内容にふさわしくないと思ったか、座り方をあぐらから正座に改めつつ語る。

……猴ノ孫のように人為的に緋緋色金の力を出し入れさせられてるケースはどうなのか知らんが、そうでない天然の場合……

緋緋色金からは、緋緋神と気の合う人物でないと自由に力を引き出せない。

（去年の夏、シャーロックが、緋緋色金を覚醒させられるのは『情熱的でプライドが高く、どこか子供っぽい性格』の者だとか言ってたが……）

歴史に伝わる織田信長の人格は、それに当てはまる。

どんな力をどの程度かは分からないが、きっと信長は緋緋神と気が合って、緋緋色金の力を使えてたんだ。

闇の言い方から察するに、むしろ緋緋神は信長に進んで味方してた感じさえある。

信長は戦国の申し子みたいな武将だからな。さもありなんだぜ。

「天正十年、信長公は本能寺にて身罷られた。その際、緋緋神様が、公の魂を嵐山に棲む緋鬼――其の時分の覇美様へと移す術を試みられてな」

「チャ……跳魂……！」

闇の話に、猴がシッポを「！」と立てて驚いてる。

「チャオ……ってのは何だ？　超能力の専門用語か？　説明してくれ猴」

「あい、跳魂は――死に瀕した道士――超能力者が、緊急避難のために魂を肉体から離し、他のものに移す術です」

……魂を、他のものにときたか。クラッと来るね。

だがここは大事な話だ。ニガテ分野だが、理解に努めるぞ。

緋緋神は信長が本能寺の変で殺された時、気の合うその魂を助けようとして――よりによって鬼、つまり当時のハビに憑依させようとしたって事だろう。多分な。

「でも、跳魂は石像とか人形とか、魂のないものを器としてそこに入り込む術です。鬼、つまり魂のあるものに移すなんて……できたですか……？」

「否、信長公の――他者の魂を移すは、緋緋神様にも仕切れずに了った。然れど信長公の魂は、その一部が覇美様に写し取られたのだ」

どうやらその術は難しかったらしく、緋緋神は信長の魂をハビに完コピする事はできず、一部の意識だけが転写された。

言われてみりゃ、戦いの様子を見て楽しむところとか、支配者然としたところとか……なんとなく信長のイメージとカブる点もあるっちゃあるよな。ハビには、とはいえ確かに、まるまる信長が乗り移ってるという感じもしない。

意識とは、21世紀でも科学的に定義されきっていないものだが……

俺の理解で言えば、薄まったり一部だけになった意識はもう本人の意識とはいえない。

ハビは基本、ハビなんだろう。

とりあえずハビの事は、薄まった信長の入った鬼……まあ信長の子孫みたいなものだと考えよう。

この辺は、超能力シロウトの気楽さでな。

「覇美様は『天下布武』を志され、太平となりし日の本を我ら緋鬼と共に出郷し戦の盛んな明、天竺、波斯、埃及、奴毘、越逐毘、沱桟野へと、布武の旅を幾百年に亘り続けられたのだ。そして天下各國の戦場にて、戦うに適うと見做した猛者・烈士・鉄人・大巨漢・偉丈夫と闘って来られた。覇美様は、その一人一人を、瞬息の間すら与えず全て一打ちにて倒しておられる。前世紀に入りてよりは、その天下布武の旅も船舶・航空機で更に自由なものとなっておるのだ」

信長の天下布武とは概念を異にするものの、ハビは天下に戦を求めて武者修行の旅みたいな事をしてたワケか。子分の女鬼たちを連れて。アジアから、果てはアフリカまで。

（……どうりで鬼たちの文化に、アフリカっぽい感じが混ざってると思ったぜ）

で、戦場で超人戦士を見つけちゃあタイマン張ってブチ倒してきたと。

……大迷惑だな。スミマセンねぇ、世界の皆さん。同じ日本出身の者として申し訳ない気分になるよ。

だがともあれ、その行動は香港で不完全緋緋神・孫が言ってた戦の好み――超人同士が真剣勝負をする戦――に合致する。

つまり、ハビは緋緋色金を持っていなかろうと……一部転写された信長の魂を経由して、緋緋神の影響を受信してる不完全緋緋神って事なんだろうな。

侮りがたいハビの素性に、俺とアリア、そして猴が微妙な顔をしていると――

「闇姉様」

上の階から、津羽鬼が黒和服の裾を品良く押さえつつ下りてきた。

「覇美様はお目覚めですが、やはり寝起きで御機嫌が優れられぬ御様子。ここの者たちをお目もじ致させるは、覇美様が朝餉を召し上がられてからにしましょう」

「御苦労、津羽鬼。其の様にする。遠山、アリア、猴。汝らも今暫し待て。目当ての殻金、得るも得られぬも覇美様の御機嫌ひとつであるからな」

闇がそう言うと、津羽鬼は階下を行き来して官女っぽい服装の鬼たちにあれこれ命令し――ハビの朝メシと思われる果物を、上へ運ばせた。

闇と俺たちにもオニギリとスイカ、それと日本酒が振る舞われたが……鬼の料理は雑で、オニギリには具が無いし、スイカは4分の1に切ったものを直に食うスタイルだし、酒は重要な面会の前に飲むワケにもいかないので断った。特にアリアに飲ませると泣き上戸になるしな。

食後、闇がヒマ潰しにと将棋盤を持ってきてくれたんだが……鬼の将棋は『銅将』とか『酔象』とか、聞いたこともない駒のある中将棋。かなめなら指せたかもしれんが、俺はルールを教わりながら闇と指すという妙な流れになった。――パチン。――パチン。と、駒音を立てながら。

「そういや闇。お前、この間……後楽園に落っこちてから、どうやって鬼たちと合流したんだ？」

――パチン。

「ん？　キノクニまで泳いだ」

パチン。

「おい、なんで何にもしないで俺の駒だけ取るんだよッ」

「『獅子』は動かずに隣接の駒を取れるのだ。これを獅子の居食いと云う」

「へー……ってオイ！　と、東京湾からここまで泳いだのかお前？」

と、ちょっと間の長かったノリツッコミを見せた俺に、

「そうだ。海流にも乗ったがな。七日七晩で着いた」

闇は、駒を手にバタフライのポーズを取って見せた。

……マジすか。１６８時間ブッ続けで泳いで、数千kmを渡ったと。

知っちゃいたが、化け物だな。俺もやればできるのかもしれんが、絶対やりたくない。

その闇の7倍以上の強さを誇り、かつて各国の超人戦士を皆一撃で倒しまくったという鬼の中の鬼　ハビ。ハビと殺金を対話・交渉で返してもらえるよう事を進められたのは、やっぱり、良手だったな。

伏せるような姿勢で将棋崩しをやってるアリアと猴を横目に見ながら……俺は、小さく安堵の息をつくのだった。

中将棋が俺の惨敗に終わると、闇は「遠山が弱すぎて、眠気が及んだ」とか言って横になってしまう。

そして「時差のせいだろ」とボヤく俺に背を向け、5分もしない内に寝息らしきものを立て始めた。

窓の外から差す木漏れ日の中、俺が駒を箱に片付けていると……

「……我は眠って居る故、此は寝言……」

俺にしか聞こえないぐらいの小声で、腕枕をした闇が背中越しに呟いてきた。

「？」

妙な前置きだが、俺に秘密のメッセージを伝えようとしてるっぽかったので俺は特に何も言わず、しかし耳を闇の方に向けながら駒をゆっくり箱に片付けていく。

「……殊に近頃、覇美様はお変わりになられた。日に日に、御心への緋緋神様の御影響が強くなられている御様子也。推し量るに、緋緋神様は周囲の我等に悟られぬよう即ち我等を従えたまま、覇美様の御心も侵食しようと欲されておられるのだ」

闇たちも今……

緋緋神に、仲間を乗っ取られつつあるって事か。

もしかすると闇たちが最近少し協力的なのは、アリアを緋緋神に乗っ取られるのを阻止しようとする俺の気持ちに共感してくれてるのもあるのかもな。

「……緋緋神様の御力は、鬼より遥かに強し、我等には抗う言も無かれど……我等は皆、

只純粋、奔放、自由に在られる覇美様が好きなのだ。何時何時までも爛漫な覇美様のまま、居て戴きたいのだ……」

闇……お前……

なんというか、あのハビを想う親心みたいなものがあるんだな。鬼のお前にも。

その喩えで言えば子のハビに親の闇が仕えてるのも、奇妙なようでそうでもない。世間一般には

親はみんな、愛する我が子に誠心誠意尽くすものだからな。まるで、仕えるかのように。

寝言のフリで言わなきゃならんほど立場的に明言はできないみたいだから、俺も言葉で確かめる事はしないが……闇たちも、緋緋神には喜んで協力してるワケじゃない。

大好きなハビが乗っ取られたりする懸念を抱えながら、そのハビの体で命令される事に従っていただけって事なんだな。

すこぶる複雑だが、俺なりにまとめれば

闇たちもまた、知能犯の側面もある緋緋神に巧妙な手口で陥れられた被害者たちなのだ。

謁見の準備が整ったとの事で、俺たちは閻と津羽鬼に先導されて――
天守閣の4階へと、上がる。
階段の途中から、3階までの廃墟っぽさが薄れていき……どうやら大昔の安土城の中を模したと思われる装飾も増えていく。
だが鬼たちはアバウトで、4階には石油精製施設の廃熱で常に湯沸かしをしてるらしい隣の公衆浴場から水蒸気が吹き込んでいた。
その湯気が足下を流れる、緋色に着色された壁の広間――奥に据えられた大魔王の玉座みたいなイスに――
片膝であぐらをかき、もう片膝は立てた、ハビがいた。
生水の代わりにスイカから水分を取ってるのか、半分に切ったスイカに顔を突っ込んで顔中で食うように貪っている。
こっちに向けている頭のクセっ毛は赤銅色で、緋色のヒガンバナが1輪飾られていた。
その子どもサイズの頭が、がば、と上がり
「――みーつけた！　あはははは！」
ハビは野性味溢れる表情でアリアを見据え、女子小学生みたいな笑い声を上げた。
その背後の壁には、織田家の家紋・五瓜が金色で描かれている。玉座の左右には黒地に

赤で『無』と刺繍された旗が1本ずつ立てられ、戦闘タイプではない鬼の官女がそれぞれ2匹ずつ、計4匹傅いている。

「……ハビ……あんたの心、分かるわ。なんとなく、感じる」

俺の隣でそう言ったアリアが、緋弾のある左胸の辺りに自ら触れながら、一歩出た。

最近少しずつ超能力者じみてきたアリアの言葉に……俺は、耳を傾ける。

そして、システムは異なるが同じ緋緋神の依り代であるらしいハビもだ。

「あんたは、天邪鬼ってやつなのね。好きになれそうな人を探してる。戦いがいのある、強い人間を好きになるタイプの子だわ」

「おう！　覇美が好きは、強い者！　天下布武して、世を戦で覆い、強い者、出す。覇美、自分より強い者の物に、なりたい！」

やった。あの、人間とは話の通じなさそうだったハビが――

いま初めて、アリアとの会話に応じているぞ。言葉は少し足りないが。

ハビは、自分より強い者を探していた。

自分の大好きな『戦い』の喜びを与えてくれる、強い者を。

それを見つけるために、天下に『武』を『布』く、ハビなりの天下布武を目指している。

そんな風に、聞こえた。

「どうりで、緋緋神の依り代に選ばれるワケね。あたしや猴なんかより、ずっと緋緋神と心の合意が取れてる感じだわ。でもハビ。あんたがつるんでる緋緋神は――善悪の判断も付けずに自分のやりたい事だけを押し通す、自己中なのよ？」

お前がそれを言うかアリア？

と言葉が出かかった俺だが、ここは堪える。

「緋緋神は何千年も、その自己中に人や妖や鬼を巻き込んできた。あたしや猴や、ハビ、あんたのこともよ。あんたはその思いを、緋緋神に利用されてるの。あたしはこれから、そんな緋緋神の正体を暴いて、オシオキをしてやりたいのよ。それにはまず……キンジがこの前あんたに言ったでしょ？　あんたが持ってる殻金が要るの。返しなさい」

アリアは鬼の王・ハビに対しても堂々と、その平たい胸を張って要求を突きつけた。

さすがはデヴォン州ダートムア・バスカービルのリアル領主様。物怖じしないその性格、今は頼もしいぜ。

しかし――

「やだ！　覇美、緋緋神のお告げのとおり、する。緋緋神はそれ、かえすな言った、いま戦ない、つまらない。覇美は明日、日の本と中つ国とで天下布武する。強いもの出させる、始める！」

・本歯の赤いゲタをはいた足をバタバタさせて、ハビが牙をむく。

日の本、中つ国――日本と中国か。

その2国で、明日、何を始めるつもりだ。

とある理由によって今、ヒステリアモードになりつつある俺の頭が……

ハビの意図を、すぐさま見抜いていく。

――マズい。これはまず間違いなく、ここに揃ったメンツを見て緋緋神がハビに吹き込んだシナリオだぞ。

中国側からは猴を孫に変え、日本側からはハビに乗り移り――緋緋神は、自分の化身を別々に出撃させ――火種に事欠かない両国間に、メヌエットが想定したようなテロ合戦の点火役をさせようとしてるんだ。きっと。

ジーサードが格付けされたRランク武偵が謳われたような、1人で小国1国を滅ぼせる、核兵器みたいな人間。それに準ずる超人も、中国や日本には複数いるんだろう。

緋緋神にノセられて中国がそれを出してくれれば、対抗して日本も出す。逆もまた然り。

宣戦布告も開戦も抜きで超人による重要施設の破壊や要人暗殺が始まり、戒厳はそれを阻止しようとする超人との一騎打ちが次々繰り広げられる。

その戦いには、多くの無関係な犠牲も伴われるだろう。

理子がやってたゲーム、戦国無双と三国無双を現代版にして混ぜたような感じに、現実の人間が巻き添えになるんだ……！

（そして、アリアが[redacted]）

このシナリオでは、余る。

その理由も、ヒステリアモードの俺には分かる。

乃木神社で戦った時の緋緋神の引き際は、香港で孫と戦った時より早かった。

緋緋神は、アリアをもっと大事に使っている感があった。

緋緋神にとって、アリアの用途は、きっと猴やハビとは違うのだ。

猴もそうだが、ハビも話を聞くに緋緋神の依り代としては不完全。

一方のアリアは、たぶん緋緋神にしてもより上位の[redacted]おそらく完全な依り代にできる

と見ているのだろう。つまり、完全緋緋神になれる存在として。

そしてそれが実現する時期も、ハビの発言からハッキリした。明日だ。明日、緋緋神は孫とハビを火付け役にしてテロ戦争を始めさせ……日中から超人を出させて、それと戦うつもりなんだ。アリアに乗り移り、完全緋緋神となって。

もう、一刻の猶予も無いぞ。

この天守閣が、運命の分かれ道だ。

なんとかして最後の殻金を取り戻し、アリアの緋弾を封印しないと……！

青ざめた俺の前で、

「覇美様。畏れながら申し上げる。此度の天下布武、今一度、御考え直しを」

闇が、踏み出してそう言った。

そっちに目を向ければ、闇の隣では津羽鬼が――辛うじてクールな表情は保ちつつも、額に汗をかき、膝を震わせている。

クジャクの羽根でハビを扇いでいる鬼の官女たちも、一様に怯えた目になっている。

いつこの場の誰が八つ当たりで首を刎ねられてもおかしくない、といった顔だ。ハビの背後で鈍色の光を放つ、ハビ本人より遥かに巨大な戦斧で。

封建主義的な鬼の世界で、闇が上に楯突いたことは恐るべきタブーだったのだろう。

それこそ織田信長に家来が反対意見を述べたようなムードだ。

じわぁ……と、広間に言いようのない緊張感が満ちていく。

「天下布武は今や、容易なら不る。此の闇、其の津羽鬼、彼の壺、各、遠山、サイオン、アリアに敗れしもの。人を侮って討たるるは、千年の昔から鬼が犯せし過ち也」

「将に布武をせんとすれば、緋鬼の血を絶やす由にもなりかねぬ也。覇美様、な、何卒」

闇は、そして津羽鬼は……

ロンドンで俺たちと戦った経験から、人間をナメてはいけないとハビに話している。

事実、日本と中国から超人戦士がゾロゾロ出てきてしまえば、ハビはともかくその部下の鬼たちといえども、さっき俺が想定した『無関係な犠牲』になりかねない。

ゲームで言えば、中ボスぐらいのノリで。

イギリスにサイオンがいたように、俺より強いヤツなんかアジアにだってゴロゴロいるだろう。そんなのとの戦に巻き込まれれば、緋鬼たちは絶滅しかねないのだ。

さらに闇と津羽鬼は、

「我等は英吉利に於いてより、武の道が即ち滅びの道ならんかと狐疑逡巡の最中に在り」

「な、中つ国に攻め入るは止し、共栄を図るは如何かと。即ち、愛の道を索めん乎と」

ビッグ・ベンでの戦いで俺が教えた『愛』という概念を理解し、勧めてさえいる。
キノクニの大臣格、闇と津羽鬼に諫言されたハビは……
「……よく、わからぬ」
そう言って、アカンベーするように舌を出した。
そして、それから黙る。
その沈黙が、続く。
「は、覇美様。何卒。此度の天下布武、御考え直しを」
津羽鬼が、その場に膝を折り……土下座し、改めて頼み込む。
「鬼袋の殻金も、アリアに下賜為さるよう御願い申し上げ奉る。緋鬼は自ら考え自ら動く、自由自在の鬼。そこに届く緋緋神様の御威光も、過ぎたるは及ばざるが如し哉。アリアを緋緋神様御降誕の依代とするに待ったを掛け、緋緋神様と対蹠為す覇美様の御立場を高め直す叶きかと」
アリアに殻金を返して完全緋緋神化を防ぎ、緋緋神・ハビ間でのパワーバランスを取れ。闇も、そういう闇なりの埋屈で、『殻金を返せ』という俺たちの要求を繰り返してくれた。
しかし……ハビは、ぶっすーとふくれっ面になって動かない。

そして、

「……謀叛か？」

つまらなさそうに呟き――ぴりっ、と――

カミナリ雲のように、大気を帯電させるような殺気を流した。

……官女の鬼たちが、クジャクの団扇を動かす手を止めた。

怖くて、動けなくなっているのだ。彼女らだって、仮にも鬼なのに。

これにはヒステリアモードの俺も、額に汗がにじむのを感じる。

闇の話がフカシだったら良かったんだが、ハビが流し始めた圧力は――

本当に闇の7倍は下らない、圧倒的なものだ。あのちっちゃな体に、それが詰まってる。戦艦でも空母でも消し飛ばす最終兵器が置いてあるような、言い様のないプレッシャーを感じるぞ。

もしそれがキレて、爆発したら――

「おもしろうないっ」

どことなく織田信長を思わせる口調で吐き捨てた、ハビは――

玉座の脇に置いてあった洋酒のビンを、ビキッ。

その口をキバで噛み割って開栓し、一口煽り、ぷあぁぁっ！

と、霧状にして自分の手に吹きかけた。
「闇、津羽鬼、覇美を、おこらせた」
今の酒は、滑り止め。拳銃や刀剣を使う際に、よく人間もやることだ。
つまり、交渉は……
失敗、って事だな。
だが、これは俺たちの失策ではないだろう。緋緋神問題においてハビと似た立場にあるアリアの話や、長年ハビと付き合ってる闇・津羽鬼の意見は、ハビが少なからず聞く耳を持つべきものに思えた。
それなのに、この取り付く島も無い却下っぷり。これは
目には見えない事象だから確証は無いが、緋緋神が手を打ったんだ、きっと遠隔から、ハビの思考への影響を強めるような形で。
ヒステリアモードの俺の予想は、闇もしていたらしく……
「……お目覚めの爾後なれど、暫時御休み戴く。御無礼御容赦にて、御手合わせを」
ハビに話しかける体は守っているものの、その金色の瞳はハビの魂の向こうにいるのであろう緋緋神と仲違いした感じになっている。
そして、

「紅天扒角、篤と御覧戴く」

ごすんっ、と、アフリカン和服の背に隠し持っていたらしい金棒を足下に突き落とした。

すぐさま闇が脇構えに構えたそれは、光沢のある、血のような赤色をした八角柱の金棒。

一般的に『鬼の金棒』としてイメージされる棍よりは棒に近く、ほぼ角柱形をしている。

……や……闘る気か。闇。

自分の2倍や3倍じゃない、7倍の戦力を持つ相手と。

見た目はあべこべだが、闇がハビに挑むことは、幼稚園児がプロレスラーに挑むような行為。話にならないぞ。

「よ、よせ闇。ハビが相手じゃ、お前でも八つ裂きにされるッ」

「やめなさい、仲間割れして何になるの！」

俺とアリアが制止するが、闇はこっちに視線すらよこさない。

あわわ……と、猴は偃月刀を抱きしめ、シッポをミニスカートの中に巻き込んでキョロキョロしている。

闇の最期を見たくないのか、津羽鬼は上下座して顔を伏せたまま泣き始めてる。
だ、ダメだ、始まっちまうぞ。
緋緋神が復活しかかってる今は、誰も戦ってる場合じゃないのに！
ザッ、ザッ、と、猛牛のように床を蹴って足の位置を固定した闇は、
「覇美様も、破星燦華銘を御手に取られよ」
自分だけが武器を使う事が美意識に悖るらしく、ハビにも武器――恐らく、あの巨大な斧――を持て、と促している。
「いらぬ」
ぴょん、と脚を振り上げたハビはすたん、と、玉座の前に立った。
そしてガニ股で立ち、少し前傾して、力こぶを作るように拳を握った。
眉をツリ上げ、しかし口元には笑み　その表情は実に、実に、楽しげだ。
俺の読み通り、あれは、過去の孫やアリアほどハッキリとではないにせよ……緋緋神の作る表情だぞ。
「よォし！　こい！」
ハビが叫んだ、次の瞬間――

パッ――

と、闇の足下で泣いていたハズの津羽鬼が消えた。

消えたんじゃない。動いたんだ。超スピードで走れる津羽鬼が。あのポーズは上下座に見せかけた、クラウチング・スタートのような突撃準備の体勢だったんだ。

そして津羽鬼は、闇に注意を向けていたハビに頭っから――ツノから、突っ込む奇襲を掛けた。

闇と津羽鬼はハビと戦う事も想定して、ある種のフォーメーションを2人で組んでいたという事か。この部屋に入り、話し始めた時点で。

ドォンッバチュッッ！　という音が、ヒステリアモードの耳に、拍遅れて伝わり――

津羽鬼がハビ目がけて、直線に突っ込んだ軌跡が、広間中に煙る水蒸気の流れで後から理解できた。

蒸気はハビの所で渦を巻き、今、雲のようになっている。

衝撃音は2回聞こえた。1度目は津羽鬼が床を蹴り削いだ音。

2度目は、砲弾と化した津羽鬼がハビに突き立った音だ……！

「……ッ……！」

アリア、俺、猴が息を呑む中――玉座の水蒸気の白煙が、晴れていき……

Manga-zone.org

見えてきたその光景に、さらに俺たちは絶句させられた。
津羽鬼のツノ、胸の中心を突こうとしたそれを。
ハビが、片手で掴んで止めている。
「あはっ！」
笑いながらも、ちょっと意外そうな顔をしていたハビは
闇と津羽鬼の作戦に気づいていたんじゃない。
とっさに、防御したんだ。
津羽鬼のスピードは、ヒステリアモードの俺にも捕らえきれないレベル。それに不意を突かれたら、ツノを掴み取るなんてことは絶対できない。少なくとも、俺には。
それをハビは、やってのけたのだ。事もなげに。
（……だが……！）
傷一つ負わせられなかったとはいえ、津羽鬼の攻撃は成功している。
ジャマな官女の鬼たちが逃げていってくれたし、ハビのバランスもいくらか崩させた。
それに何より、今この一瞬、津羽鬼はハビの右手を封じているのだ。
玉座の背後に立てかけられてある巨大斧は、去年10月に空き地島で見た大斧より2倍は大きい。あれはハビにとって片手斧だったが、これはきっと両手斧なのだ。つまり、すぐ使う動きはハビにも取れないハズだぞッ。

「闇姉様！」

叫んだ津羽鬼の金切り声も、助けを求める声ではない。『今です！』という意味だ。

「受けられよッ！」

ドドッッ！　と、跳躍する軍馬のように駆けた闇の金棒・紅天扒角が。

天井に開いていた穴の縁を掠め、コンクリートや鉄骨を紙や小枝のように破砕しながら

ドオオォンッ！　と、衝撃波混じりの打ち下ろしを放った。闇の全力に加えて、その巨体の全体重を載せて。

ガッツンッッッッッ！

重機のような音を上げて、左手の甲でハビがそれを受けた。

ハビは元からガニ股で構えていた足をさらに曲げ、しゃがむような体勢になったが……

それは手の甲を曲げ、バランスを取るようにして金棒ごと闇を空中に留まらせるためだ。

「ヨイヨイ、ヨイっ！」

膝を曲げた片足を上げてケンケンしたハビは、右手では津羽鬼を踊らせるように誘導し、左手では曲芸師のように闇を誘導していき……

闇と津羽鬼の顔と顔がくっつきそうな感じに、自分の前面に寄せてから……

「いひひっ！　――覇ァアアアァッッっっっ！」

大声と共に、いきなり左右にブン投げた。

「ッ！」

「――きゃあああああっ！」

まるで石ころのように、闇と津羽鬼が左右の壁まで吹っ飛ぶ。

――ブワァァァアアアァッ！　という突風のような何かがハビを中心に室内を駆け、思わず俺とアリアが1歩、2歩、下がってしまう。猴は尻餅をついた。

今の、は――

投げたように見えたが、投げたんじゃない。

吹っ飛ばしたんだ。気合いだけで。

「……闇ッ……津羽鬼……！」

天守閣の壁は障子かフスマのようにブチ破られ、闇と津羽鬼は　外の樹木や建物をも破壊しながら、転落していった。この4階から。もう、見えない。

「はい、今ので緋緋神も喜んだでしょ！　だからもう鎮まりなさい、ハビ！」

闇と津羽鬼を緋緋神への供え物にするかのような言い方で、アリアがハビを止めようとするが――

「まだ、まだ！　緋緋神、こんなの、よろこばない」

ハビは、ぴょん。と、真後ろに跳躍し
すとんっ。本歯のゲタで、例の大斧に乗っかった。
「……よろこぶは……」
ハビの重さで、立てかけられてあった大斧が、ゆらり……と傾いていき……
……ずどぉん……ッ……！
床に刃を落とし、天守閣を震わせた。７００kgはある響きだぞ。
遠山！　おまえ、戦え！　緋緋神、覇美の友だち。いっしょに喜ぶ！」
大きく、ブ厚く、斧というより鉄塊と言うべきその巨大斧を、ぐっ……ぶぅん！
と、ハビは持ち上げた。
気が遠くなる事に、片手で。
それだけじゃない。それを扇代わりにして
「じん、かん、ごじうねん」
舞い、始めた。
闇のようなハスキーボイスではないのでキマらないが、かの信長も愛したという敦盛を。
ハビにとっちゃ、あの巨大斧の重さなんか……両手斧どころか片手斧とすら感じない、

扇子みたいなものなんだ。
怪力ってレベルじゃない。
言うなれば――超力の鬼。それが、ハビなのだ。
しかも、その舞には隙がない。
武家に愛好された幸若舞には、武術の体捌きの影響があるからだ。だから、いま奇襲をかける事もできない。
だが、しかし……
……これは実は、この広間に入ってからずっと気づいていたのだが……
ハビには、隙がある。
あると言えばある。女の子として。
それも重大な隙が。
まず――
闇たち緋鬼は、柄はアフリカ文化の影響を受けているものの、和服を着ている。
かつて玉藻も言っていたように、女子の着る和服には現代の日本で使われているような下着が存在しない。
そして、ハビは座り方や立ち方のお行儀が悪い。これは猴やアリアと同じで緋緋神の力

が体の成長を止めているため、知能も子供っぽいまま生きてるからなのかもしれない。

あの玉座に座ってる時も両脚をバタバタさせてたし、目の前で思いっきり格闘戦をしてくれちゃってもいたしな。

それにより俺の網膜はセーラの竜巻地獄どころじゃない光景を瞬間瞬間で捉えてしまい大脳皮質視覚野へと収めてしまっている。男として重要な、だが上りたくなかった階段を上る視覚記憶を唐突に得た俺なのだが……鬼と人の体が同じ構造かには確証が無いので、その階段は未だ公式には上りかけである。

とはいえ俺がヒステリアモードになれてる事は別途、事実として受け入れなければならないであろう。

しかし、その件についても

あんな小学3～4年生みたいな外見の女の子でなってしまった事に、反省と自己嫌悪の桜花リストカットをキメる必要は無い。無いんだぞキンジ。猴&孫の時に自ら打ち立てた『見た目が女児でも実年齢は上という事を本能が意識すればヒスれるもので、それは多分無罪』という自説は、まだ否定されていないのだから。

ハビは確かに、ちっちゃくて愛らしい。自分の強さに確信があるせいか、女の子として隙だらけだ。だがそんなハビでヒスった件については、俺は自己弁護の

「キンジ！」

―ハッ、と、アリアの声で我に返る。
気づけば、二丁拳銃を抜いたアリアが、青龍偃月刀を下段に構えた猴が、俺の左右から前に出ていた。
「感じるわ。ハビへの緋緋神の影響が、少しずつ強まってる」
「猴も感じるです。ハビのは猴やアリアとは違う、新しい繋がり方なのです」
緋緋色金で緋緋神と通じている旧型の2人と、色金無しで心を緋緋神と通わせる新型のハビは――昔シャーロックが話していた共鳴現象を起こし始めたのか、ボンヤリと微かな緋色の光を帯びたように見えている。
俺が自分の事ばかり考えていた間に、事態は少々進展していたようだね。
「よすんだアリア、猴。ハビ様のご指名は、俺なんだから」
俺は、2人の間から前に出つつ……
アリアと猴の煩を、フェザー・タッチでそっと撫でてやる。
それぞれ「ひゃぅ……！」「ふぇぅ……！」とゾクッときたような声を上げて、とりあえず戦意を引っ込めてくれたようだよ。可愛いもんだ。
「俺は見たくないんだ。可憐な君たちが、争う姿を。たとえそれが神の――」
「……なったのねキンジ。何でなったの！」

がう！　と犬歯を剥いたアリアにセリフの途中で怒鳴られ、銃を突きつけられちゃったヒス俺だが……

「俺は常に君でなる。今までも、これからも、君だけだ」

嘘も方便。男と女の間では、時に事実と異なる言葉は優しさなのである。

で、その俺の優しいウソに、アリアはいつもの急速赤面。

わぐ、わぐ、と剥いた犬歯も噛みつき所を失ったように空振ってくれた。

そうして、

「さて、ハビ」

猴とアリアを華麗にクリアした俺は、ハビへと向き直る。

やれやれ、手がかかるものだね。一気に3人もの女性を相手にするというのは。

「戦いが俺が、欲しいんだね。なら、あげよう」

ロンドンでは俺が愛を説き、鬼たちが戦をもたらしたがキノクニでは鬼たちが愛を説き、俺が戦をもたらしている。

運命とは、皮肉なものだね。

「おう！　キンジ！　こい！」

すがすがしいほど平たい胸を張ったハビに、俺は……

ちょっと気になっていた点を、聞いてみる。

「……ところで少し昔の話だけど、ハビ。ハビは昔、宣戦会議で眷属側に付く事を迷わず選択してたね。それはなんでだい？」

よっ、と巨大斧を肩に担いだハビは

「んっ？　んー……？　……おー！　おもいだした！　眷属なれば、殻金、手にはいる。殻金もってれば、つよいキンジと戦える！　あの時の前、シャーロックが言った！」

なるほど。なるほど。

アイツは改めて俺の『絶対許さんリスト』入り決定だ。

やはりあの頃から、シャーロックは鬼たちの軍事顧問をしていた。そして、極東戦役を観察する形で緋色の研究、つまり緋緋色金の研究をずっと続けていたんだ。アリアの情報も、鬼たち経由で仕入れながら。

そして緋緋神がアリアに降臨しつつある今、緋緋色金の依り代……アリア、猴、ハビを世界中からここに集わせている。

オールスターを揃えて緋緋色金に関する全ての精算を行い、『結論』を出させるため

に。

だが、緋緋色金の事は推理しにくいながらも……シャーロックはそれがアリアにとって、どうあれ悲劇的な結論になると考えた。

（シャーロックのヤツは――それを、俺に覆させるつもりだったんだ！）

理詰めで考えれば、超力の鬼・ハビから殻金は取り返せない。アリアは緋緋神に乗っ取られてオシマイだ。それは人が逆らえない神の意志だった、という結論。

しかしそこに推理をブチ壊す存在――『賀』の俺が介入する事で、推理の理、理詰めが破壊される。『不可能を可能にする』行為によって。

だから、俺が動いた今――

推理の時間は、終わったんだ。

これからどうなるのかは、シャーロックにも推理できてない。

誰にも先の見えない、俺が作り出す未来の始まりなんだ。

まずは悲劇的な結論に繋がっていた推理のレールを、ブチ壊す。

そしてレールを作り直してやる。ハッピーエンドに繋がるように。

俺はここで、ハビから殻金を取り返す。アリアを緋緋神化から救って、全てを丸く収め、とっとと武偵高へ帰る。もうすぐ期末試験だし、せっかく命掛けでアリアに勉強を

教わったんだし。

「覇美、斧、つかう！　遠山、種子島、刀、使わぬか？」

女児そのものの仕草で、ことん、と首を傾げて訪ねてくるハビだが……

破星ナントカって立派な名前があるそれも、ハビに合わせりゃ単なる『斧』なんだな。

「子供相手に銃やナイフは使わないよ」

俺は人道主義的な事を言うが、これはまあ建前かな。

どうせムダだろうし、遠山家理論じゃ素手が一番強いって話になってるんでね。

だから、全力だ。俺は俺で、今の自分における最強の状態で臨むって事さ。

そしてここも、さっきの闇ＶＳハビとは逆になったな。ハビが武装してて、俺が素手だ。

「いいのか？　覇美、第六天魔王。魔王からは、逃げられない」

ずしん、と、本体というより斧の重さで足を踏みならして、ハビがガニ股で一歩出る。

「逃げないさ」

俺も出る。まどろっこしいのはニガテなので、広間を、普通に、前へ。

「ハビ、朝食は何だった？」

「スイカ」

「スイカだけかい？」
「おう」
「うーん……まあいいか」
そんな会話をしながら、俺とハビは距離を詰めていく。
そして
アッサリと、お互いの間合いに入った。
今や2人の距離は、1m半。
俺からしてみりゃ、戦術核ミサイルの真ん前に立たされてる気分だね。
俺がハビを見下ろす。
ハビが俺を見上げる。
さて。闇の7倍以上のパワーを誇る、超力の鬼を　どうするんだ？　キンジよ。
「……キンジ……！」
不安そうなアリアの声が背中にかけられたが、
「心配いらない。いつもの事だ」
そう答える俺は、振り向かない。
振り返れば、この額に滲んだ汗を見せることになるから。

――勝利への道は。

アリアを救う、道は。

あるような、ないような、だ。

だが人生、全ての道がハッキリしてるとは限らない。もしそうだったら、どれだけ楽か。

道無き道を、行く。

そうせざるを得ない局面も、あるんだ。

というか、俺はそういう局面ばっかりだよ。楽したいのに。

心の中で自分の不幸さに小さくため息をつき、その辺で俺も腹を括る。

そして、すー呼吸、ふー呼吸。

俺と息や鼓動を合わせるように見つめ合ってから、ハビが、

「天下ぁ――布武ぅ！　よぉし、どんとこい！」

右手で青光りする鉄塊――破星燦華銘を担（かつ）ぎ、パーにした左手を前に出して見せた。

眉をツリ上げつつも、太陽みたいな笑顔だ。

楽しそうだなぁ。

「ハビがおいで」

俺のこれはカッコつけて言ってるワケじゃない。

自分の格闘戦リズムが、カウンターを基本としてるからだ。

ぎゅっ、ぎゅっ、と左右の手で柄を握ったハビは、

「ヨイ、ヨイ、ヨオ――ロロロロロオ――」

大きく、大きく、恐らく実戦用では世界最大であろうその斧を振りかぶり。

――ズゥウウウウッウウオオオオオオオオオオッ――！

ただ単純に、まっすぐに、斧を叩き落としてくる。

ある種の美しさすら感じさせるほどにシンプルではあるが、ハビも、斧も、何もかもが桁外れで、想定されうる次元を超えているので――

それはまさに、周囲の空気どころか空間そのものを断つような未知の攻撃だった。

――ヒステリアモードが見せる、ウルトラスローの世界の中――

俺は、その攻撃を前にただ立ち尽くしている。

その力の美しさに、魅入られたかのように。

死の直前の走馬灯のように脳裏をよぎる対抗技へのイメージは、今回も断片的だ。

1つ目は後楽園での、闇の証言。

あの時、闇は『我が七鬼おって抗おうと、覇美様に敵うものではない』と発言した。
ハビの強さが闇の8倍以上なら『八鬼おって抗おうと』と言うハズなので、その強さは闇の7倍以上・8倍以下と考えることができる。
闇とヒステリアモード俺の強さは、互角だった。
つまり俺は、通常の8倍の撃力を作り出せばハビに対抗できるはずなのだ。
続いて、2つ目の鍵は……
ネバダの砂漠でジーサードと放った、『桜星』の記憶。
あれはジーサードが俺を流星　つまり桜花で押して、俺の桜花と合わせてマッハ2を作る技だった。
桜花は、桜花に、足せるのだ。
仮に俺とジーサードが4人ずつ、計8人いれば、ハビに通じる『8倍桜花』を作る事もきっと可能なのだろう。問題は、今それを1人でやらなきゃいけない事なんだが
俺は豈。それも、可能にする道を思いついている。
3つ目、勝利への最後のイメージは……
スカイツリーでのワトソン戦やイ・ウーのランドリーで、腕だけで放った桜花。
腕だけでできるのなら、理論上、足だけでも、体幹だけでもできるハズだ。

肉体を桜花に到達させるのに必要な速度のパス回数は、最低4回。これを『つま先→踵→膝→骨盤』までで実現する。右足でマッハ1、左足でマッハ1。足して、マッハ2。さらに腰からは脊柱のうち腰椎4骨、胸椎12骨を使って速度をパスし続ける。ここで、小計マッハ4を加算。

仕上げに『肩→肘→手首→指』の右腕・左腕でマッハ2を足せば

（8倍桜花ッ――！）

刃が触れた瞬間に俺が蒸発して消し飛びそうな、脳天めがけて降り注ぐ破星燦華銃。

それを――

――ガシイイイイイイイイイッッッッッッ――！

重ねた両手で、受け止めた。

全身全霊の、8倍桜花。その、秋水で。

できた。できたぞ！　止める事が。

1＋1＋1＋1＋1＋1＋1＋1＝8。アリアの前じゃ間違えたが、ここでは足し算を間違えなかったな、俺よ。偉いぞ。

「……ッ……！」

生来の強者、神にまで見込まれる鬼の中の鬼として生きてきたハビは……

緋色の瞳をまん丸に見開いて、巨大斧の刃と俺の手のひらの交点を見ている。
そして、ぱちくり。
マバタキした。『ありえないものを見た』という、俺の敵がみんなよく見せる表情で。
だが、これは勝利ではない。
ただ敵の攻撃を受け止めただけだ。
勝つには、反撃が要される。
しかし相手は女の子。しかも俺を今回ヒステリアモードにしてくれた張本人だ。傷つけたくはない。
いや、最初から……この戦いに於いて、俺がハビを傷つける必要はないのだ。
勝利条件は殻金の奪還。それだけだ。
だから――ビキッ！
まずはやれば出来た左手指だけでの桜花で、破星燦華錣の鈍い刃に穴を開けて握り込む。
それで斧をホールドして、
（鬼袋は、胃のすぐ上）
俺は壺から聞いておいた鬼特有の器官の位置にアタリをつけ、心の中で謝りつつも……

ちょっとだけ膨らんでいる、しかしやはりほぼ平らなハビの胸に手をあてた。
「わぅ？」
男に胸を触られてもポカンと口を開けてフシギがるだけの、幼いハビに……
「ごめん」
一言、謝ってから。
再び、乾坤一擲の8倍桜花を放つッ！
マッハ8などという超高速で突きを放てば、衝撃波どころか空気との摩擦熱で腕が燃え上がりかねない。さっきもやったが、このテの桜花は秋水で撃ち込む必要があるのだ。
――ウウウウウウウキュドンッ――！
ヒステリアモードの超スロー世界では、体内で8発の桜花が生じる音が充填音のように聞こえ、インパクトの音も通常の桜花とは全く別モノに聞こえた。
そしてこの一撃は、ハビを倒す事を狙ったものではない。
かつて闇の腹に掌底罹刹を打ち込んだ時、闇は酒を吐きかけた。
これはそれをヒントにした、『吐かせる』事を目的とした打撃なのだ。
戦車榴弾の炸裂音にも似た爆発音が、ハビの体から天守閣中に鳴り響き……
「ヴ」

と、呻いてから、げろげろ！

ハビは口から物を落とし始めた。人間ポンプ、いや、鬼ポンプ状態で。

「うえぇぇぇぇん」

そのまま四つん這いになって、鬼袋に収めていた物をあらかた吐き出している。

ハビが手を離した巨大斧が、ずどーん！

と、俺の脇に落っこちて

「……！」

アリアと猴、それと広間の壁際で固まって震えていた官女の鬼たちは、ポカーンと口を開けて絶句した。いつの間にか広間の隅へ様子を見に来ていた、他の鬼たちもだ。

あの天下無双のハビ様を、俺がワンパンでやっつけちゃったからだな。これ。

「……あー、これは違うな。これも違う……」

だがとりあえず皆のリアクションはスルーして、俺はハビが吐いた物の中から、大粒の真珠、瑪瑙の櫛、『天下布武』とか彫られた占いハンコなんかを捨てていく。

モノが何やら濡れてるのは、体内に入ってたわけだし、もう仕方がないとしよう。変なニオイもしないし。物が溶けてしまうような胃液とかとは違う、どうもヨダレに近いサラサラした分泌液だね。

「うぇえぇうえぇぇぇん」

鬼袋から物を吐くのはそれなりに気持ち悪い事なのか、ハビは泣きながらあれこれ吐く。

黄金のサイコロ、硨磲の小皿、珊瑚の笛、白銀の指輪……

もご、とキバに何か引っかかったらしいので、ポンと後頭部を叩いてやったら、けろん。

最後に、出てきた。

勾玉のような形状の、ルビーのような宝石が。

見覚えがある。これは最後の、殻金だ！

……やったぞ……！

「もうない。もう出ない。殻金、それ」

ハイハイのポーズのままその場で１８０度転回したハビは、恥も外聞もなく頭を抱えている。折られると思ったのか両手でツノを守ってるから、オシリだけ突き上げてるような姿勢だ。こっちは視線を下げないようにしとこう。

「覇ッ、覇美様ッ……!?」

「彼の若侍、如何としょう」

「靈す。口惜しや、人間共……！」

などと背後がガヤついてきたので、振り返るとウジャウジャ集まった鬼たちが、ハビを殴った俺に怒ってる。そりゃ怒るよな。想定の範囲内の出来事だ。

アリアと猴が、鬼たちから身を守るような構えをし始めたので……

「参った。参った。ギブアップだ。これ以上は戦わないぞ」

俺は先手を打つような形で、鬼たちに諸手を挙げてみせた。

殻金は既に、胸ポケットに収めてある。

もう、こっちの用事は済んだんだ。

女王様を腹パンしといて何だが、後は平和的に済ませるべきだろう。もし襲われたら、アリアと猴を左右の脇に抱えて、遠山家に伝わる『潜林』で天守閣から脱出するぞ。後は鬼の釣り船でもパクって、小笠原諸島まで逃げてやる。閻は日本からここまで泳げたんだ。閻と同レベルの俺も、ここから日本まで自力で帰ってやるさ。

そんな末期的な作戦を脳内で立てながら、マバタキ信号で『カラガネ入手』とアリアに伝えていると……

「――ころすなぁー！」

起き上がって振り返った、ハビが……

「みーつけた！　みーつけた、キンジ！　覇美よりつよい！」

8倍桜花を喰らって1分も経ってないのに、ぴょんぴょん跳ねてやってきて、はしっ。

「つよいとつよい、つれあいなる！」

俺の胸に両手両脚で抱きついて、顔の高さを揃え、チュッ！

と――

（……！）

スイカ味のキスをしてきた。

これにはまず、どうもそういうのを見慣れてないらしい鬼たちが「ひゃあー！」「せ、接吻なさった！」「み、見て仕舞ったぞよ！」と右往左往。

おかげで、鬼たち側からの戦いのムードは霧散してくれたのだが――アリアが「くぉおぉおおら！　バカキンジぃ！」と戦いのムードを爆発させたのでプラマイゼロだ。

ずざあぁぁあっ！　と俺の背後に回り込んだアリアは、俺の両太ももを後ろから抱えて、ダブルレッグ・スープレックス――！

事前にパッと俺から離れたハビは放置で「ちっちゃな！　女の子に！　何してんの！　このド変態！　ロリコン！　ロリコンは！　社会共通の敵！」と、ダウンした俺の背中に

バックマウントで跨がって、後頭部にパンチの鉄槌地獄。今度は俺がスイカを吐くハメとなった。

「……と、遠山。殻金は有ったですか」

仁王像みたいな顔で立ち上がったアリアの横から、怯えつつの猴が聞いてきたので、

「あ、ああ……」

ハビをノーダメでクリアしたのに味方にライフを削がれた智さんは、フラフラと立ってポケットから猴に殻金を手渡す。

それを見たアリアも、ようやく社会共通の敵こと俺への怒りを引っ込めてくれた。今はそれどころじゃない事を思い出してくれたらしい。

「猴。あんた、それをあたしの胸に戻せるの？」

「あい。猴はシャーロック卿に、その役目も仰せつかっていたのですが……ですが……」

「……ですが？　ですが何。それ、違うの？」

ちっちゃな猴の手のひらを覗き込むアリアが、

「違わないです。これは間違いなく殻金の結晶。猴が覚えている、藍幇が持っていた殻金とも部分的にピッタリ合わさる形状です。でも、その……」

ひと目でそれが分かってしまったのか、猴は気弱そうな表情で口ごもり、

「……効力を、失ってるです」
効力を……失ってる？
「どういう事だ」
鬼たちが「覇美様、お興入れぞ！」「華燭、華燭ぞ！」「闇様、津羽鬼様、何処」などと騒ぐ中、俺とアリアは猴に詰め寄る。
猴は、たら、たら、と額に汗をかき、
「これは今、ただのルビーと同じ物になってしまっているです。きっと緋緋神が、ハビを通じて殻金の機能を破壊したせいなのです。難しいことですが、殻金に掛けられた術式を狂わせて機能停止に追い込むことは、不可能ではないのです」
猴の話は、つまり……
緋緋神による、妨害があったという事か。
殻金は、ハビが腹に入れていた。つまりハビに憑いた緋緋神の手中にあったとも言える。
そこで　俺なりの理解で喩えれば　緋緋神は殻金にハッキングして、プログラムをいじくり、ソフトウェア上で壊したのだ。
アリアの緋弾を、再び封印されないようにするために。

（……先手を、打たれた……！）

殻金。俺たちが命がけで集めてきた、その最後の1枚は――破壊されていた、のだ。

つまり、もう……

……打つ手はない。

アリアは元に戻れない。

緋緋神に、なるしか、ない――

「――あはは」

そのアリアが、笑い始めた。

右手の甲を口元にあて、小さな背をのけぞらせながら。

広間の奥へと、俺たちから離れて行きながら。

俺たちはアリアがどうしちまったのか分からず、笑い続ける姿を呆然と見る。

「ははは、ははははッ！」

……この……笑い方は……ッ！

付き合いが長い俺（あれ）には分かる。

アリアが笑っているし、アリアの声だが、アリアの笑い方ではない。

「はー、ははははははッ！　というわけで、残念だったな遠山（とおやま）！」

……緋緋神（ひひかね）の……喋（しゃべ）り方だッ……！

乗り移ってきたのか、アリアに！

「ちょっと前からアリアにはいつでも入り込めそうだったんで、頃合いを見計らってたんだけどな。あたしがダメにした殻金を見て、お前たちがガッカリしたところで憑依らせてもらったぜ。猴と覇美も揃ってるし、今がベストタイミングだろ」

バッ、バッ、と左右の手を捻りながら振るう、舞うような鋭い仕草はもう、アリアのものではない。

まるで舞台女優のように大仰で優雅な、緋緋神の動作だ。

この緊急事態に戸惑う俺に、

「――ヒヒよ――人を相手に、さらなる不意を突くつもりですか」

という声が、音としてではなく頭の中に直接響くように聞こえてきた。

これは……

瑠瑠神。エリア51・第89A管理区で聞いた、瑠瑠神の声だ。

その声は名指しされたヒヒ、つまり緋緋神にも聞こえていたらしく、

「何イ？」

緋緋神アリアのイラッとした視線が、俺のズボンの右ポケットへと向けられてくる。

俺もそこを見下ろすと、

「ヒヒは同時に何体も化身を動かせるのでしょう。お出でなさい」

再び頭に響いたその声とリンクするように、ポケットの中で青い光が逆っていることに気づかされた。

急ぎ、そこから瑠瑠色金でコーティングされたバタフライ・ナイフを出して開くと――

「……うッ……！」

激しく、青く、光っている。

だが、発熱してはいない。これと同様の現象は、かつてこのナイフが緋緋色金の成分を含んでいた頃のアンベリール号でも見た。

事象から感覚的に分かる。瑠瑠神がアクセスしてきているのだ。

ニューヨークからこっち、気配を消すようにずっと沈黙していた瑠瑠神が……ここで、ついに動いた。緋緋神が出るのを、待っていたんだ。

だが――だとすると、マズいかもしれないぞ。

俺が瑠瑠神に意識を向けた隙に、今度は

「う……！　と、遠山……！　これは、この感覚は……孫……がッ……」

「あっ、あっあっ……！」

猴とハビが呻き始め、アリアと共に靄のようなオーラを放ち始める。

めまぐるしく事態が変化する中、それでも俺は超能力の素人なりに状況を把握しようと努める　猴とハビは同じぐらいだが、アリアは彼女らの2倍ぐらいの強さで光っている。皆、同じ色だ。火よりも強い炎を思わせる、緋色……！

（緋緋神は……アリア、猴、ハビに……一斉に、乗り移ったのか！）

なんてこった。

俺は香港や東京で、不完全緋緋神と個別に戦った経験はある。どちらの戦いも完全勝利というワケにはいかなかった。ギリギリ勝ちを拾ったというところだ。

1体でも手こずった、緋緋神が

今、3体出現している。

中でも緋緋神アリアは、乃木坂で現れた時とは明らかに違うことが感じ取れる。

何がどう、という細かい違いではない。もちろん靄のような発光の強さも倍増しているが、そういった些末な違いではなく　本質が、全体が、雰囲気やムードが、気配が違う。

そう、一言で言えば『格が違う』存在感があるのだ。今の緋緋神アリアには。

超能力に疎い俺にも分かるほど、ハッキリと。

（……アリア……！）

この……出現したというより、降臨したという感覚。
その感覚が、緋緋神アリアに自ら合わせるまでもなく示してくるのだ。
これは――完全緋緋神だ、と。
緋鬼たちが待ち望んでいた神が、今、アリアの体を使って降臨したんだ。
チクショウ……どうすれば……！
「キンジ、もうこれまでのようです。あなた方は失敗した。ヒヒを止められず、その完全な復活を許してしまった。ヒヒはキンジがアリアを案じる隙に乗じて、猴とハビにも憑き、キンジに挟撃をかけようとしていたのですよ」
俺を叱るような、瑠瑠神の声が響き
エリア51で見た、サラ博士の裸体を模した青白い霊体が俺の隣に結像していく。
眠るように目を閉じたまま空中に浮遊し、祈るようなポーズをしている……
……瑠瑠神だ。こっちも、姿を現したぞ。
「おっと！　バレてたか」
ビックリ顔でカットオフ・セーラー服を翻し、瑠瑠神から飛び退いたのは――猴、いや、孫。すなわち、これも緋緋神だ。
ブブブンッとバトントワリングのように偃月刀を回した孫は、玉座の前に立つアリアの

右に立ってこっちに向き直った。

「ズルいぜ、ルル。依り代が揃って面白そうだったんで、ついまとめて乗り移っちまったが……それが分かっててここで出てきたってことは、殺る気だな？　このあたしを3体分、まとめて」

あれだけ喋りが迂々しかったハビが、そう緋緋神の口調でペラペラ喋る。そして大斧を手に、とたん、とったたん、と、クルクル回って飛び跳ね――ビシッ、と、アリアの左で回れ左し、こっちに向き直った。

瑠瑠神には一応の警戒をする緋緋神アリアを中心に、孫とハビがその左右を固めている。

その光景――それぞれ意志を持って動く緋緋神3人の姿に、俺は改めて衝撃を受けた。

（……緋緋神は……同時に3人、存在できるのか……！）

ここもまた、人間の発想力じゃ追いつけないことだな。

緋天・緋陽門。レーザー。瞬間移動。次次元六面。あれこれ超々能力を披露してくれた緋緋神だが、またここでも驚かせてくれるぜ。

眉を寄せつつ、瑠瑠色金メッキのナイフを手元でコンパクトに構えた俺に――

「キンジ。人が起床直後に眠ろうとしてもすぐには眠れないように、ヒヒは依り代に」

憑依すると、すぐには自分の意志で抜け出す事ができません。つまり今、ヒヒは逃げ場が無い状態。刺突しなくても構いませんから、そのナイフを持ったまま3人に接近して下さい。そうすれば、私はヒヒの意識を換価重力圏に取り込み、潰してしまえるのです。あの魂を、部分的にとはいえ殺せるのです」

兵に発砲を命じる将校のように、目を閉じたままの瑠瑠神がハビたちを手で示す。

俺はその物言いに不安を覚え、

「ま……待て、瑠瑠神っ。お前がそれをやったら、アリアたちはどうなるんだ」

こっちの事前コミュニケーションが十分取れていない事が敵に筒抜けになるのも構わず、瑠瑠神にそれを尋ねる。

緋緋色金はアリアたちの魂を、意識を乗っ取っている。

色金たちの生命システムは人間のものとは異なるようだが、取り憑いた分だけとはいえその緋緋神を殺すという事は、アリアたちの意識をも殺す事になるんじゃないのか。

という俺の懸念は

「今キンジが考えている通りです」

それを俺の頭から読み取ったらしい瑠瑠神に、その通りと宣告されてしまった。

「ヒヒの心の一部と、依り代の心の全ては各々、融合しています。そこにあるヒヒの

心が死ねば、依り代の心も死ぬ。以前パトラが色金殺女の被甲弾で、それに準ずる効果をアリアに一時もたらした事をご記憶かと」

パトラの呪弾……去年、ピラミディオン台場でアリアが狙撃された時のことか。

「喩えるなら、あの時は麻酔弾、今度は実弾。あのような効果が永続するのです。いずれにせよ、同じ手が何度も通じる相手ではありません。チャンスは、今この時だけです」

パトラに撃たれた時、アリアは24時間の仮死状態となった。

瑠瑠神の命令通り、俺がこのナイフをアリアたちに近づければ――今度は、あの状態がずっと続くんだ。今の瑠瑠神の発言は、そういう意味に取れる。

あの状態から復活できなければ、3人とも生存すら危ぶまれるだろう。

「……ダメだ！　よせッ、殺すな瑠瑠神！」

「あなたの気持ちはお察しします。ですが、これは千載一遇の好機なのです。今この時を逃せば、二度と――」

ダメだ。瑠瑠神を理詰めで説得する事はできないムードだ。それなら、

「俺は……美しいルルが美しいヒヒを手にかける姿なんて、見たくないんだッ」

神は神でも、色金の神々は女神。

神にヒステリアモードの口説きが通じるかどうか

「ルル。俺には見える。姉を手にかけたくないルルの心が、涙を流しているのが。だからここは、俺に任せてくれ。女の涙を止めるのは、男の仕事なんだから……！」

口を突いて出た、我ながらいかがなものかと思われたセリフだが……

「……っ……」

そのあまりの直球っぷりに、瑠瑠神はリアクションに困るような仕草で緋緋神と俺とを交互に見た。

その、刹那の隙を

見逃す緋緋神では、なかった。

「ははっ、ルル！　惜しかったな！」

バッ！　と、アリアが。

続けて孫が、ハビが、天守閣の広間を左に駆けた。

「……！」

だが、それを俺は追えない。瑠瑠神がどう動くか分からなかったからだ。

アリアは崩れた窓枠から、ぽん、ぽん、と見えない階段を踏んで空中を跳躍していく。

その姿はすぐ、鬱蒼と茂る木々の影に消えていき――その後ろを守るように孫とハビが跳んでいく。こちらは、枝を飛び石のようにして。

鍍金された色金に宿っているため、どうやら俺のナイフからあまり離れられないらしい
瑠瑠神は……
緋緋神を追うように半透明の手を伸ばしたが、それだけしかできなかった。
広間には俺と瑠瑠神、そして一部始終の光景に腰を抜かした鬼たちだけが残されている。
「……キンジ……」
瑠瑠神は、少しうつむくような仕草をして……
「あなたの言葉は、その意味に於いて正しかったと言えます。私も本当は、姉を殺したくない。ですが……あなたと私は現存するヒヒの依り代を全て潰えさせる、最大の、そして最後の好機を逃しました。ヒヒは大胆なように見えて細心、これからは私や璃璃の追撃も及ばぬ拠点に立てこもり、人の世に戦を振りまく事でしょう。アリアたち3人の代わりに、多くの人が死ぬ。それを止めることは　もう、不可能となりました」
諦めたのか、その靄のような体を薄めさせていく。
俺は、青い光を失っていくナイフを手元で回して収めつつ
「良かった」
と、瑠瑠神に言ってやった。

「何が良かったのですか、キンジ」
「『不可能』――その言葉が、ルルから出たからさ」
ヒステリアモードはまだ続いている。
「ルルも知ってるだろう？　俺は『聖偉流（エイリュー）』――不可能を可能にする男なんでね」
逃げたアリアたちがキノクニからどう出るつもりか、想像できないが……
泳ごうと飛ぼうと、追ってやるさ。地の果てまでも。
行くぞ、緋緋神（ひひかみ）。そして――アリア。

3弾　トライアングル・ノヌガーレ

キノクニは、いわば絶海の孤島。
出口なんか無い。アリアたちは、すぐにはそう遠くへ行けないハズだ。
瑠瑠神も消え失せ、たった1人になった俺は――
鬼たちを掻き分け、天守閣の窓からキノクニを見渡す。
すると、
「……っ」
刺すような直射日光の下、周囲の光景は来た時とは一変していた。
潮が引いている。干潮だ。
海水面は下がり、キノクニ周囲の浅い海底が砂浜となって露出している。
なだらかな海底には特に、北西方向に向かう砂浜が数kmに渡って細長く整備されているようだった。
（あれは干潮時のみ使える……滑走路……！）
だが、そこを含め周囲のどこにもアリアたちの姿は見当たらない。
……ドォンッ、ドォッ、ドォッ、ドォドドドドッドドドッ……

キノクニの片隅から、地鳴りのような爆音が轟く。
一瞬そうと分からなかったほどデカイが、これはエンジン音だ。クルマのエンジンなら排気量は2～3リットルだが、その排気量が60リットルはある化け物エンジン。
それが3つ、4つ――6発、同時に動き始めているのが聞き取れる。
「富嶽、か……！」
俺は、この天守閣からも部分的に見えるその巨大爆撃機を見下ろす。
見れば富嶽は海水面が下がったことで、今や地上に駐機しているのと同じ状態にあった。
それが暖気も無しに緊急発進を試みており、地上走行の時点で翼の各所から煙を噴いている。
だが、そこは軍用機。苦悶のような軋み音を上げながらも、動き出したぞ。
直径およそ5mの4翅二重反転プロペラをギロチンのように叩きつけ、バキバキとマングローブの林を薙ぎ払って。
「！」
その時、ヒステリアモードの視覚が捉えた。
富嶽のガラス張りの操縦席に――操縦をしているそぶりはないものの――

広い視界を求めてか、アリアたち3人の姿があるのを。

「――アリア！」

バッ！　と

俺は天守閣の窓から空中へ飛び出し、樹木の枝にワイヤーを掛け、マングローブの枝を蹴って飛ぶように富嶽へ向かう。

そして転がって着地した砂浜で何度も受け身を取り、星砂を蹴って駆け出す。

富嶽はもう、滑走路を北西へ向かって地上加速中だ。

「うおおおおッ……！」

プロペラが起こす風で巻き上がる砂塵を掻き分け、俺は全力疾走で富嶽を追う。

富嶽が加速しきってしまえば、ヒステリアモードの足でも追えない。

カーキ色の機体と、クリーム色の砂浜。

そこに落ちる巨大な翼の、黒く濃い影。

追って、追って、手を伸ばして――

「――ッ……！」

滑走する富嶽の左翼下、巨大なダブルタイヤを支える主脚に後ろから触れた。

だが、富嶽が浮かぼうとする力で指が脚柱から離れる。

富嶽は今まさに、離陸しようとしているのだ。

（ダメだ、追いつけない……ッ！）

と、歯を食いしばった俺のケツを。

ぐいっ。

何者かの力強い手が、押し上げた。

「うっ!?」

何にせよとりあえず脚にしがみついた俺に、女の巨大な胸が、覆い被さってきた。

こ、この胸は。

失礼ながら触ってしまった事があるから、覚えてる。闇だ。

と、視線を上げた俺と共に富嶽の脚にしがみついたのは、やはり闇。

俺と同じで全力疾走してきたらしく、フゥーッ、と大きく息をついてる。

ハビに気合い一閃で吹っ飛ばされてからしばらくピヨってたようだが、復活してきたんだな。

左翼下にはさらに、

「――闇姉様っ！」

たんっ、たぁんっ、と、星砂を蹴立てて。

黒い和服の袖を靡かせて水平方向に跳躍するように、後ろからついてきた津羽鬼が手を

伸ばしてきた。

俺は全力疾走だったが、津羽鬼は余裕でついて来れてるな。さすがスピード鬼だ。

少し浮かんだ富嶽の主脚へ伸ばした津羽鬼の手を、闇は

「津羽鬼、御苦労だった」

くきっ、と、絶牢気味に押し返した。

目を丸くした津羽鬼が、柔らかい砂浜へと落ち……ゴロゴロゴロッ！　と転げて、富嶽後方へと遠ざかっていく。

そして、がば、と女の子座りでこっちを見上げている。

信じられない、という顔をした津羽鬼が、闇と遠ざかる視線を交わす。

「――夢幻の、如くなり」

そう呟いて穏やかな笑顔を津羽鬼に向けた、闇の目つきは……

自分が死地に赴く事を、悟っている目だった。

俺が仲間のアリアを救おうとしているように、闇もまた主のハビを救おうと

どうすれば救えるのかすら分からず、それでも緋緋神を相手取る腹なのだ。

だが、それは文字通り神に逆らうこと。神の怒りに触れたら、鬼とはいえすぐ殺されてしまうかもしれない。いや、その可能性は大きいだろう。

だから　津羽鬼を、逃がした。
富嶽という死地に、連れ込まないために。
その意味を悟った津羽鬼は……ホロホロと、泣いて……闇の眺める先、離陸した富嶽の遥か後方で、今や点のように見えるのみとなった。
富嶽は広がった砂浜を飛び越え、透明な海の上でどんどん加速・上昇していく。
今やキノクニも、ナナメ下に伸ばした手のひらで隠せる程の大きさになってしまった。
巨大プロペラが巻き起こす気流の中、赤銅色の髪をバタつかせる闇は、
「……遠山。もう還れぬぞ」
キノクニへの想いを断ち切るように、俺の方を向いた。
千年をも生きてきた闇だが、彼女はここで死ぬ覚悟なのだ。
主君が攫われたのを、放ってはおけないから。
絶対に、たとえ自分が死んでも、無視はできないから。
……まったく。誠実というか、どこまでも忠実な鬼だよ。
今日日の人間よりも立派なんじゃないか？　闇の、そういうとこ、部下にほしいぐらいですよ。
「還らない。行くだけさ」

既に車輪格納庫へ懸垂で上がっていた俺は、闇のセリフとほぼ同義の、しかしもう少し聞こえの良いセリフを返す。

そして、脚に掴まる闇に手をさしのべる。さっき押し上げてもらった、お礼として。

闇は、男以上にカッコいい顔で小さく笑い

「異なものよ。頼光殿の末裔と酒呑様の末裔が、まさか千歳の後に手を結ぼうとは」

と、尖った爪の手で俺の手を取った。

俺と闇。かつて敵としてこの翼に立った2人は……

今、緋緋神に抗う仲間として同じ翼に戻ってきたのだ。

二度と還らない、その覚悟で。

重量軽減のためか、ダブルタイヤの車輪は外側2輪が切り離されて投棄されていく。

残った車輪と脚柱が主翼に格納されると、俺と闇はセットで棺桶に入れられたみたいになってしまった。

マッシブとはいえ闇も女は女だし、向こうは気にしてないがあまりベッタリくっついてたら申し訳ない。というわけでまずは車輪格納庫から脱出しなければならかったんだが、これが思いのほか難儀してタイムロスになった。

まず内部構造がよく分からないので無闇に周囲を破壊するワケにもいかず、俺が壁面を細かく叩いて薄い部分を探す。

すると……前後左右には航空揮発油が入っているようだったが、上面の一部は何も無いようだった。

そこへ闇がツノで缶切りみたいに丸く穴を開けてくれて、俺たちはなんとか左翼内部の小部屋に出られた。

翼内の居室には、誰の気配もない。

（とりあえずはここを拠点に、状況を確認しよう）

と、細い窓から外を見ると、太陽の方向から見て進行方向は、北西。小笠原沖、日本の方角だ。

速度は７００km／h程度と、非常に速い。爆弾を搭載してはいないらしいが、それでも富嶽の性能から考えてムチャな高速度だ。

……それと、

「妙に傾いで飛ばすものよ」

闇も言う通り、富嶽の床は後方へかなり傾いている。

つまり、急ペースで上昇しているのだ。

明らかに迎角を取り過ぎており、これでは墜落とは言わないまでも失速で機体に負担がかかるだろう。

それを証明するかのように、富嶽はゴゴゴ……ゴググ……と魔獣が唸るような軋み音を全体から上げていた。

武偵手帳から出したミラーで窓からプロペラを確認すると、燃料の燃焼過多を意味する黒煙がエンジンから吹き流れている。

目的地がどこなのか知らないが、仮に日本を目指しているのだとしても、このままじゃそこまで保たないぞ。どこか空の上が目的地なら、これでいいのかもしれないが――

「……！」

そこに思い当たって、航空機の用途を人間の常識の範囲内で考えていた俺は息を呑む。

この飛び方は、速度より高度を重視した飛び方。

進行方向の先にあるのであろう目的地への距離を、軽視している。

軽視、できるのだ。

（……有視界内瞬間移動、か……！）

緋緋神には瞬間移動ができるのだ。

だがそれは視界内、つまり見える範囲までしか跳躍できない術らしい。

遠くまで跳ぼうとしても、地球には丸みがあるから見渡せる距離に限りが出る。しかしその距離は、高度を高く取るほど遠くまで見渡せるようになる。これは簡単な幾何学だ。

緋緋神が富嶽で急速に高度を取ろうとしているのは、視界を遠くまで広げるため。

そして、目的地が見えたら瞬間移動する。この富嶽を、空中に乗り捨てて　使い捨てにするつもりなら、壊れても構わないようなこの飛ばし方にも納得がいく。

「――急ぐぞ、閻」

緋緋神が富嶽をどこまで上げ、どこまで近づき、何が見えたら瞬間移動するつもりかは分からないが――それが見えるまでがタイムリミットなんだろう。

つまり、時間制限があるんだ。

あまりノンビリ様子見をしてはいられないぞ。

「うむ、急こうぞ。この機内、天空では肺腑が痛もう。覇美様の御体にも悪い」

閻の言うように

緋緋神の乱暴な操縦で、機内の気密は不完全になっている模様だ。

ＩＣＢＭやＶ　２で高空を飛ばされた経験を振り返って理解した能力だが、ヒステリアモード時の俺は無意識に胸筋で肺と気管支を鳥のように制御し、生身でも低酸素や減圧に一定程度は耐える事ができる。

だがそれも、リサと飛んだ9千m前後で数十秒が体感的な限界だった。
富嶽はスペック上、高度1万mまで飛べる。緋緋神が富嶽をそこまで飛ばすつもりなら、際どいぞ。
「闇。この戦いは3対2だ。つまりどちらかが、2人の緋緋神を受け持たなきゃならない。そうなった時は、俺が主戦になって2対1で戦うよ。闇は状況を見ながら、援護するなり退避するなりしてくれ」
ドアに鍵を掛けない鬼の習性のお陰で、翼の中は難なく移動できる。
時間も無いので、俺と闇は作戦会議をしながら歩くんだが、
「己より弱しと見た者を前に立たせまいとする汝の胸裏、我も分からぬでも無い」
と、闇は大股歩きで俺より前に出てしまう。
「……闇より俺が弱いと思うのは自由だけど。俺は、できるだけ女性を戦わせたくないんだよ」
俺も改めて前に出るので、2人は翼の内部で自然と駆け足になっていき
「其は女性蔑視と云うのではなかったか？　人の間では」
「じゃあ……先に緋緋神たちの前に出た方が主将、後についてきた方が副将って事で」
「心得た」

「ところで闇、さっき廊下にワンカップ大関が落ちてたよ」
「何処ぞ？」
廊下で闇の足を止めさせて、からの――ドカンッ！　左足から右足への筋骨連動による桜花蹴りで、俺は胴体へと続く扉を蹴り開ける。
それでまず俺が入り、「謀ったな遠山」と赤面した闇も侵入してきた富嶽の胴体内には、
「たった2人で来たか」
ガラス張りの操縦席で、こっちを向いて腕組みして立つアリア。
そのアリアの前で左右に少し問を開けて立つ、
「じゃあこっちも」
ぶぅん、と青龍偃月刀を振って構えた孫と、
「2人で相手してやる」
ずんっ、と破星燦華銃を担いだハビの姿があった。
セリフは3人で割って喋ってるし声も異なるが、セリフは全て同一人物の――緋緋神のものだということが、何とはなしに伝わってくるな。なんとも不思議な感覚だ。
アリアの背後、操縦席のインパネでは、ガチャ、パチンッ、と、スイッチが動いて切り

替わっている。ビリビリ震える操縦桿も、誰も触れてないのに少しずつ動いている。自動操縦って感じじゃないな。S研用語でいう念力で、緋緋神アリアが富嶽を操縦してるんだ。

「タッグ・マッチってことか。よし、受けて立とう。孫悟空・織田信長タッグと、遠山の金さん・酒呑童子の子孫タッグ。観客はホームズ4世。なんとも豪華で、贅沢なカードになったね」

どうあれ3対2よりマシな事は絶対に確かなので、俺は2対2を提案してきた緋緋神の気が変わらない内にと　場を盛り上げるような事を言っておく。

（……無我夢中で追ってきたが、さあ、どうする）

目の前には、超々能力を持った緋緋神が3体。

富嶽の高度は止めどなく上がり、無茶な急上昇のせいでエンジンは爆発寸前。

緋緋神たちに瞬間移動で消えられたらオシマイで、それがいつ行われる、どこへの跳躍なのかも分からない。だからタイムリミットも不明。

……どこからどう手を付けて、どう挑めばいいのかすら分からない。
勝利条件が見えず、パニックに陥りそうだ。
だが、こういう時は
武偵高で習ったな。『各個撃破を心がけろ』と。
つまり1つ1つ着実に、丁寧に片付けていくべきだ。
慌てふためいて一気に全部片付けようとしたって、どうせ1つも片付けられず時間だけ失い、事態を悪化させるだけだからな。
この場合は、ハビ、孫、アリア。3人を1人ずつ失神K.O.させていく　できるだけ傷つけないように。それを最初の目標にしよう。その後、富嶽をなんとかする。
緋緋神が乗り移っていようと、アリアたちの体は各々の体だ。
それは乃木坂でカナがアリアを気絶させる形で証明してくれている。
だから、その体が身動きを取れないようにするんだ。
とはいえ相手は緋緋神の化身。この戦術、言うは易し行うは難しだろう。それに女性を失神させるだなんて、ヒステリアモードの俺には耐えがたい事だ。
なら、せめて……
「……闇。お互い友達だったり主君だったりでやりにくい相手は外そう。闇は、孫を相手

してくれ。俺はハビの相手をする。手抜きして勝てる相手じゃなさそだうから、ハビにも本気でオシオキするかもしれない。だが、どうか止めないでくれ」

「案ずるな。汝が遠慮するは、寧ろ覇美様の為ならず。まずはお止めして、如何とすれば良いかは知らねど……御心に入りし緋緋神様を、お祓いせねばならぬ故」

俺と闇は語りながら、横に並んで進んでいく。ハビと孫の方へ。

だが、ニヤリと笑ったアリアの前で

「じゃあこうしたら、どうする？」

バッ！

と、ハビと孫が

俺めがけて、2人で飛びかかってきた！

「ッ！」

想定外の集中攻撃に、それでも俺は何とか即応する。

亜音速で突き出された偃月刀の柄を肘で捌くと同時に、降り落とされた斧はその側面を手のひらで曲線的に受け流す。

富嶽の床は合金製だが、この巨大斧を落とされたら機体が空中分解しかねない。

なので、なんとかハビの肩に乗り直すよう誘導したが

ジャンプしたままだ空中にいるハビは、ロデオのように肩で勢いよく跳ね上げさせた

斧を――ガツンッ！　天井に食い込ませてから、パパパパパパパパパパンッ！

「――あはははははははっ！」

残像で手が何十本にも見える連打を、頭上から放ってきた。ほぼ逆立ちの姿勢で。その打撃を俺に防がれ続ける反動で、空中に留まり続けている。

短機関銃の銃声にも似た空気の破裂音を上げる、亜音速の正拳、平拳、貫手の雨霰。

それが俺の上半身に、間断無く降り注ぐ。

それは乱打のように見えて、眼球、眉間、頭蓋の継ぎ目、耳、鼻、口、喉笛、頸動脈、鎖骨、全ての攻撃が人体のウィーク・ポイントを外さず襲い来る、必殺必死の集中豪雨。

その突きを、俺は左右の手指、手首、前腕、肘、肩、頭突きも併用して――受け流し、躱し、あるいはポイントをずらして受けざるを得ない。

頭上のハビを必死で捌く俺の眼下では、

「――ひひっ！」

カツンッ！　石突きを床に跳ねさせた孫が、偃月刀から手を離す。

そして肘を90度に曲げ、体操のように脚を大きく前後に広げ、すとんっ。腰を落とした。

古流だが、中国拳法・花拳の構えだ。こっちも同時に来る気か――！

「うおりやっ！」

ザザザザザザザザッ！　と、その場でネズミ花火のように回りながら、孫の打撃が俺の下半身に襲いかかってきた。

刃物のような手刀、足刀、爪撃に加えて、回し蹴り、裏拳、シッポの打撃までもが俺の下半身を襲う。ハビ同様、孫もアキレス腱、前後の十字靱帯、大腿動脈、足背動脈、睾丸といった急所ばかりをえげつなく狙ってくる。

俺は足を止めないように、その場で回転・後退しながら孫をいなすしかない。

蹴り足に蹴り足を合わせたり、時に何度か宙返りしながら　孫に拳で、ハビに蹴りで対応するような瞬間もあった。

激しく天と地とから叩きつけてくる、間断無き百烈の連撃。

まるで降雹と噴火の挟み撃ちだぜ。

「……遠山ッ……！」

闇は

割って入ろうとした足を、止めた。

自分がというより、ジャマすると俺がむしろ危険と判断したらしく　それは正しい。

緋緋神2人との格闘戦は、シャーロックとの冪乗弾幕戦よりも集中力が要されるもの

だ。

俺に襲いかかるのは、一撃一撃が必殺必死の打撃。

一瞬でも意識が逸れたら、それが命取りになる。最初の取り決め通りにとはいかないが、手出ししないでくれ。この2人はちゃんと、俺がおしまいまで面倒を見るから。

ドウッ！　ッドドドウッ……！

という震動が、俺の左右、直線テーパー主翼から伝わってくる。

視界の端に捉えた窓の向こうでは、北寄りに進路を取る富嶽の……6発のエンジンが、全て大なり小なりの火災を起こしている。

その火が、ジリジリと翼を覆っていくのも見えた。

クソッ、まるで紙で出来てるかのように乏しい耐火性だ。

この富嶽は新素材で造られているとはいえ、防御力を犠牲にしてでも機動力や航続力を上げようとした旧日本軍の設計思想に基づく航空機って事か。

（……１３５２　１４２１　１５０８　ッ……！）

1分足らずで、ハビと孫による上下からの打撃数が１５００を超えた。

秒間、約２７発。

ハビと孫は1人頭１３・５発毎秒で、必殺の打撃を俺に叩き込んできているのだ。

これが、神の打撃か。シビれるね。

だがきっと、この猛攻にも間が生じるハズ。ハビも孫も、どこかで息をつく。

その瞬間、カウンターを放つんだ。

耐えて、耐えて、待つんだ。反撃のチャンスを。

という俺の企みをあざ笑うかのように、

「まだまだ行くぞーッ！」

天井に刃を食い込ませてブラ下げていた斧めがけて、ガイイイインッッッ！

ハビが、銅鑼を鳴らすように裏拳をブチ当てる。

それて落ちてきた斧の柄を腰のくびれで受け、俺を殴る動きも止めずに腕や膝裏で柄を払うように、斧を回転させ始めた。ハビ自身を軸にした、フラフープのような調子で。

パパパッ！　バオッ！　パパパンッ！　バッ！　パパパパッ！　ブウンッ！

俺の上半身を襲うハビの打撃に、回転ギロチンのような斧の斬撃が加わる。

点の打撃に面の斬撃が加わり、頭の中で処理すべき致死圏が複雑になる。

だがこれを捌ききらねば、俺は鑿とアイスピックで砕かれるカチ割り氷のように上からグシャグシャにされてしまうのだ。

斧が天井に空けた裂け目から気密が盛大に破れ、機内の気圧が下がっていく中――

「そぉらッ！　脚下飛槍撹！」

――そんな事はお構いなしで、落ちていた青龍偃月刀を孫が足指で拾い上げる。

そして、ブゥンッ！　ヒュヒュヒュヒュヒュヒュビュビュビュビュン！

ハビ同様、自分と共に俺の足下で回転させ始めた。俺への連打を、止めることなく。

その薙刀は俺の腹をカッさばこうってだけじゃなく、長柄で俺の足を搦め、転倒させる狙いもあるようだ。

蹲けば、俺はミキサーの中のニンジンみたいにグシャグシャにされる。

上下から機銃掃射を浴びせられ、さらにヘリのローター翼で斬りかかられているような状態になった俺を

視界の端で緋緋神アリアが可笑しそうに嗤ってるのが見える。

よせ。やめろ、緋緋神。

アリアは俺を笑う事がよくあるけど、そんな笑い方はしないッ……！

「――よそ見とは余裕だなぁ！　遠山！」――」

手メガホンのアリアとハモるハビと孫の叫びで――

引っかけられた事に気づいた。

（……しまった！）

今のは、わざと。

俺がそれを厭がるだろうと考えた緋緋神が、わざとそういう風に笑ってみせたんだ。

「昇龍轟噴脚！」

俺の隙に乗じ、孫は後ろにでんぐり返るような大きなモーションで床に両手を突き

バオオオオオオオオオオオオッ！

逆立ちしながら、天を衝くような蹴り上げを放ってくる。

「ッ！」

偃月刀と大斧の刃の間に挟まるようにして、俺が抱え膝バック宙でそれを躱す。

それを、ハビは読めていた。

蹴り上げた孫の裸足に手を突いて、蹴り上げの力に自分のの腕の力を合わせたハビは、

上へとジャンプし――ダンッッ！

上下逆さまに、富嶽機内の天井に着地した。

そしてそこから、バンッッッ！

流れ星のように降ってくる。

ハビと孫の呼吸の合い方は、まさに一心同体。新幹線の上で見せたココ姉妹よりも上

だ。

それもそのはず、あれは姉妹だが……今やハビと孫は、本人同士なのだから。

神業のコンビネーションを使われた、俺の額を――

シャッ！　降ってきたハビの頭突きが、掠めた。

「……ッ……！」

ハビの狙いは、俺の頭蓋骨にツノで穴を開け、そのまま叩き割る事だったようだが……

ヒステリアモードの反射神経が、俺の命を救った。

身を捻る動きが間に合い、ツノには皮膚を切らせたに過ぎない。

だが、切らせてしまった。

傷は額の上、頭髪の中。

しかもツノというものに不慣れだったせいで目測を誤り、かなりの深手を負った。

傷は頭蓋骨膜スレスレまで到達しており、ツノが掠めた切創からは派手な流血が起きてしまう。

噴くような出血ではないが、ドクドクと流れ落ちてくる。鮮血が――

右の、目に。

（……クソッ……！）

こんな占い少年マンガではありがちな事が現実に起きると、笑い話では済まなくなる。
視界が塞がる事は無くとも、確実に制限されてしまうのだ。
ここからは更に、ハビと孫の猛攻を凌ぐのが難しくなる。
まずは距離を取って、時間を得て、血を拭わなければ。
そして再びあの熾烈な攻撃を受け、耐えきって、隙を突くんだ。そうするしか俺に道はないのだから。
そう判断した俺は、血涙を飛ばすように首を振るうと同時に――
バッ！
着地してすぐ、後ろっ跳びに退く。
対し――サッ、と。
俺の血濡れた狭い視野、右下で孫が消えた。
ヘビのように床を這う地躺拳の動きで、假月刀を取りながら俺の死角に駆け込んだのだ。
「――ッ！」
下を向いた俺に、
「前だ遠山！」

闇の叫びが聞こえた。

俺の前方の虚空で、上から７００kgの破星燦華錣が落下してきている。

その大斧に、床にバウンドするような跳躍を見せたハビが胴回し回転蹴りを叩き込んでバックステップした俺の方へと、射出した。刃ではなく、槍のように鋭い柄の上端を向けて。

鬼の斧戦術には空中で斧を蹴って射出するという技が普通にあるらしく、その石突きは丸く蹴りやすくなっている。

それで上手い具合に、ハビは両刃斧の形状を活かし、その上端部を、刃槍のように突き出させる角度で蹴り飛ばしてきたのだ。

まだ俺は、跳んだ動きのせいで虚空にいる。空中では、身動きが極端に制限される。

（これは、躱せないッ……！）

刃が水平翼のように見える斧が、空中で俺に追いつこうとする。

『攻め疲れ』という言葉があるように、通常、攻撃とは防御より力を消耗するものだ。

だから俺は、攻めさせて、攻めさせて、攻め疲れを起こした相手の隙を攻める。それがカウンターの基本戦術だ。

そこで攻める代わりに退く事だってできるのが、この戦術の良さだ。だから攻めさせる中で頭部に深手を負った俺は今、敵の隙を一時退却に使う判断をしていた。

猛攻を凌いだ俺が退けば、敵も一息つくのが常だ。

敵は、攻めて、攻めて、攻めて、休む。そうして、攻め疲れから回復しようとするのだ。普通は。

だが、戦神・緋緋神の反応は違った。

攻めて、攻めて、攻めてきたのだ。

コンマゼロゼロ1秒でも好機の時間があれば、その全てを熾烈な攻撃に費やす。

それが、緋緋神の戦い方なのだ……！

さらに。

攻めてきたのは、ハビだけではなかった。

ハビが大斧を蹴り出す瞬間、血塗られた俺の死角では――音で把握するしかなかったのだが――富嶽の丸い胴体の側面を駆け上がった孫が、そのまま天井を上下逆さまに駆け抜けている。

まるで360度回転するジェットコースターのような三次元的な動きは、しかし270度――機体内部の側面、俺の前方、斧とハビの向こう側で急ブレーキをかけている。

長い黒髪を宙に漂わせて垂直に立つ孫は、今や遠くに日本の太平洋岸が見え始めた窓をまたいで腰を落とし――

青龍偃月刀を、投擲槍のように構えていた。

「――覇ッ！」

闘戦勝仏・孫悟空の小さな手が、裸足の足が、一斉に伸び上がる。

射出された青龍偃月刀は、輪のような円錐水蒸気を孫の手前で生じさせた。

砲弾のような速度で飛来する、偃月刀――

これも躱せない。受け止める橘花も、呼吸が間に合わない。技を、出せない。こっちは、体勢を立て直す時間をもらうつもりだったから。

眼前に迫る破星燦華銃と青龍偃月刀の前に、俺が敗北を悟った――その時。

「ぬううんッ！」

ドゴォオッ！　と、俺に真横からショルダータックルがブチ当てられた。

闇が俺を突き飛ばし、襲いかかる2つの武器から救ってくれたのだ。

内臓の位置が入れ替わってしまいそうな衝撃と共に、俺は窓へ――もう、富嶽は地球の丸みが十分見える高度に至っている――吹っ飛ばされる。

だが何とか、機体の壁をブチ破らないように橘花気味の受け身を取ることはできた。

しかし、血に曇った視界では……

「闇ッ！」

闇の右大腿部と右腕に、ハビが蹴り飛ばした斧と孫が投げた偃月刀が突き刺さっていく。

俺の、身代わりとなって。

「……ッ……！」

悲鳴を上げないように歯を食いしばった闇は　ドゴオオオオオオッ！

そのまま機体後方まで吹っ飛び、ハビの玉座に激突する。

元々、ハビと孫は俺を玉座に張り付けるつもりで大斧と偃月刀を投擲したのだろう。

だがそれとは異なる角度で2つの武器を受けた闇は、無人の玉座の傍らに座り込む形で縫い付けられてしまった。

トラックのタイヤみたいに硬かった闇の体を、緋緋神が放った破星燦華銛と青龍偃月刀は……

易々と、貫いている。

「……グぅ……おおッ……！」

闇はそれを外そうと身をよじっているが、体勢が悪く、力が入らない。

「闇！」

助けにいこうとした俺の左右、翼から、とうとう機内に炎が回ってきて……

「……ッ……！」

熱で溶けた窓が歪み、パッキンの部分から割れて外へ吹っ飛んでいく。

与圧されていた空気は更に漏出し、機内に風が吹き荒れる。

炎の翼と化した両翼の向こうには、地図とは違う向きなので一瞬分からなかったが日本、本州の――福島以北、東北地方の海岸線が見えている。低く薄い、靄のような雲の切れ目の下に。

やっぱり……

（緋緋神の目的地は、日本……！）

それが見える以上、富嶽はもう用済みなのだ。

もうエンジンは機能を停止しつつあったが、富嶽は惰性で高高度・高速度を保っている。機体の向きは尾翼側で微調整しているらしい。

胴体下部から回ってきた炎が、床のあちこちから煙と共に上がってくる。

俺は闇の方を振り向く。もう炎に埋もれるようになってしまった闇は、僅かな動きしか見せていない。

「闇……！」

「……あ……案ずるに及ばずだッ……遠山っ……手助け無用だ、此のッ、程度……」

炎の向こうから、むしろ見苦しい自分の姿を炎が隠してくれた事に安堵しているような闇の声が聞こえてきた。今すぐに失血死しそうな感じじゃないのは、不幸中の幸いだ。

とはいえ、しかし……

富嶽に乗り込んできた時には、各個撃破だなどと意気込んでいた俺だが――

自らは負傷し、闇は磔にされて救出不能の状態。

ハビ、孫、アリア、そしてこの富嶽。各個撃破どころか、何1つ解決できていない。

状況はもうズタボロだ。

ヒステリアモードの俺にも、智にも、緋緋神という存在は……

……荷が重かった、のか。

とはいえ、酷すぎる負け方だ。ハビにも孫にも、一撃も反撃できなかった。

対・緋緋神アリアに至っては、無傷どころか指一本動かさせる事もできてない。

あいつはただ、俺を喰っただけだ。

もう俺や闇なんかを見てすらいない――そのアリアは今、

「山がジャマだなあ」

などと、ガラス張りの操縦席から日本の方を眺めていた。
いつしかハビと孫も炎を跳び越えるようにして、アリアの元へと集まっている。
悪巧みするような笑みを浮かべて孫がチラッと俺を見る中、
「でも、ひひっ。雲間に面白い物が視えた。よし、よし、行くぞ」
ガラス越しに機外を見て言ったハビの、平たい胸の前に。
……キラ……キラ、キラ……キラキラ……
小さな金色の光が生じた。それが2つ、4つ、8つと倍・倍に増えていく。
光は小さな銀河を巡る星々のように、空間を飛び交う。
その領域は富嶽の操縦席を覆うような楕円体　フットボールのような形で、アリア、ハビ、孫を中に含むものだ。
（あれは……有視界内瞬間移動……！）
いや、緋緋神がそれを使うこと自体はこっちも読めていたことだ。
香港での猴も乃木坂での緋緋神アリアもそれを使えていた以上、ハビが同じ術を使った事に対しても驚きは無い。
しかし、瞬間移動の術をハビだけが使った今の光景に
俺は、ある事に気づかされたのだ。

とっくに気づいておくべきだった、重要な事に。

猴は香港で、瞬間移動が出来るのは『1昼夜に1回だけ』と言っていた。

それは今もって、事実なのだろう。キノクニから日本への中継ぎに富嶽を使ったという事が、緋緋神にもその術が無制限には出来ない事の裏付けとなっている。

そして緋緋神は今、目的地が完全には見えなかったような事を言っていた。やむなく、どこか中継地までを瞬間移動するつもりらしい事も。

だがそれに対して、さほど失望した様子を見せなかったのだ。

これはつまり、多分……

緋緋神アリア、緋緋神ハビ、緋緋神猴――つまり孫は、有視界内瞬間移動を、それぞれ1日1回ずつできる。

そう考えるのが妥当だ。

つまり緋緋神は瞬間移動をあと2回、残している。

富嶽からは見晴らしのいいタワーや山の頂上なんかに、日ジャンプして、飛び石を渡るように瞬間移動を繰り返し、目的地へ行くつもりなんだ。

そして恐らく、3回できるのは瞬間移動だけじゃない。

あの必殺技、レーザービームも……3発まで撃てるって話になるぞ……！

こいつは

手強い。手強いなんてもんじゃないぜ。
マジでどうするんだよ、キンジよ。
（そういや、理子が俺の部屋に持ち込んだレトロゲームに、『グラディウス』というのがあったな）
けっこう面白かったから、よく夜中に遊んでたシューティングゲームなんだが……
アリアが自機だと考えると、ハビや孫は……あれでいう、オプション、同じ技を使える、便利なコピーなのだ。
俺と閻はそのオプションとだけ戦わされて、ご覧の有様って事か。
そして、その3人を操作しているゲーム・プレイヤーが……緋緋神。
緋緋神はゲーム画面の外にいるプレイヤー同様、自機や敵機がどんな鉄火場にいようとケガひとつ負うことはない。ネバダに無人機を飛ばしてたマッシュと同じ理屈で。
その事実をヒステリアモードの頭で理解していく内、あまりの絶望感に気が遠のく。
失神させるつもりだったのが、こっちが気を失っちまいそうだよ。クソッタレ。
……キラキラキラ……キラキラ……
と、ハビ・孫・アリアを包む金色の光の粒は広がっていく。
もう、跳ぶつもりだ。

だが、そうはさせるか。

（割り込んでやる）

かつて、香港で猴に聞いてある。

觔斗雲、すなわち瞬間移動は　あの光の雲に包まれた空間内にある物を運ぶ術。

発動の瞬間に光の雲から少しでも出ていれば術者であっても移動しないし、逆に全身で割り込めば共に跳躍できてしまうのだ。

運べる体積には限界があるとの話だったが、見たところハビの発光は猴がやった時よりずっと盛大だ。緋緋神が覚醒していない状態より、覚醒している状態の方が術を効率良く使えるのかもしれないな。

だが、3倍4倍って規模じゃないぞ。

「閻っ、アイツらは瞬間移動の光を焚いてる！　そこに入り込めば、富嶽から脱出できるぞ！　こっちだ！　来られるか!?」

「……応！　鈸も薙も、ようやっと外せた。今、我も行くぞ遠山ッ……！　間もなく炎が弱まった折に、其方へ渡るッ！」

機内に充満した黒煙と炎の向こうから、閻の明るい声が響く。

よし、それなら

「相乗りさせてもらうぜ。乗車賃には飴玉をくれてやるッ」

と、俺は銃を抜いて操縦席へと飛び込んでいく。光の、中へと。

眩しさに目を細めつつ、辺りを見回すと……

「来ると思ってたぜ」

よく見えないものの、金色の光の向こうからハビの声がする。

「いくらなんでも今回、まだ戦い足りないからな。こいつは、遠山もギリギリ乗せられる光量の觔斗雲だ」

孫の声もだ。

「……もう1人、運んでもらう。彼女はガタイがいいんで、体積オーバーになるぞ。ハビだけじゃなく、アリアか孫も使って光を増やしたらどうだ」

俺は闇も来るという話をして、瞬間移動の消費を促す。

そう何度もテレポートされては、追うにせよ戦うにせよ圧倒的に不利だ。今日3回まで瞬間移動できるのなら、その2回分、あわよくば3回分をここで使わせてやるぞ。

これも武侯高で習った事だが、相手が強すぎる場合は――その移動手段を破壊あるいは阻害するのが鉄則だ。行きたい所に行かせない事で、敵の活動を未然に防ぐ。それは必ずこっちに有利に働く間接攻撃になる。

ただでさえ強いヤツに入城されちまったら、今度こそ本当に打つ手無しになるものだが――このケースで言えば、こうして瞬間移動をジャマすれば、緋緋神は拠点まで辿り着けないかもしれないのだ。

という俺の目論見に対し……

緋緋神3人は、ふふふ、あははは！　と、笑い声を合唱させている。

「……遠山……」

金色の光と、黒煙の影と、紅蓮の炎の向こう側から……

「……御免也や。先刻の我は、偽りを云った」

姿の見えない闇のハスキーボイスが、聞こえてくる。

その声の発生場所が、玉座の下から動いていない。

闇、お前……！

斧と偃月刀を、外せなかったのか……！　だがそれを言うと、せっかく脱出法を見つけた俺が助けに来てしまうから――ウソをついたんだ。逆に、俺を助けるために。

「――闇ッ！」

グゴゴゴ……グゴゴゴゴゴゴゴッゴ……と、地獄を思わせる機体の軋み音の中……

富嶽の燃え落ちた外装が、メキメキと空に剥がれていく。

翼も今や、ほとんど骨組みだけだ。
機内の黒煙が外気に吹き飛ばされ、炎の向こうに見えた
流れる血と共に、煤と炭で焼死体のように黒くなってしまっていた闇は……
自らを富嶽に縫い付ける、主君の斧　破星燦華鋏に、藻掻く中で爪が割れてしまった
手を愛おしそうに寄せ、
「御屋形様を……頼んだぞ」
力つきた笑顔を、俺に向けた。
その直後、風船が破裂するように
富嶽が、音も無くバラバラに空中分解していく。
さっき見た地平線の様子から見て、高度は1万2千メートル、外気はマイナス60度近い。気圧は地上の7分の1程度。

ジャンボジェットが飛ぶような高空に散華する、富嶽の破片は……付着した燃料が燃え尽き次第、見る間に白く凍り付いていく。

その光景を最後に、俺とアリア、孫とハビは

空から、消えた。

金色の光が収まると同時に、冷たい爆風が俺に叩きつけられた。

どこだ。景色が素早く動きすぎていて、分からない。

直交座標系でいうX軸・Y軸・Z軸がメチャクチャに入れ替わる。

俺は、左右・上下・前後の全てに対して転げているのだ。

次に感じ取れたのは、気圧。

突如として気圧が1になったせいで破裂しかけた肺を、咄嗟の回天で抑える。

その気圧で判明した。ここは、地上だ。

続けて、重力。

背中が何らかの金属の床にバウンドした事で、下方向を認識できた。

さらに、飛び込んでくる銀色の光。

それが超高速で風上から無数に飛びかかり、或いは俺の左右を通過していく。

（……これは……雪……!?）

この冷たさは、雪だ――雪が不自然なまでに高速度の吹雪となって、烈風と共に前から叩きつけてきている。

そして――速い。俺はどこか、とんでもない速さを持った物の上にいる。緋緋神たちが……瞬間移動の直後に運動エネルギーが突然ゼロになってフッ飛ぶ事を避け、この場所を選んだのかもだ。

その体感速度は――もう音速で言った方がいいレベル。

マッハおよそ、0・5……！

だが、ここはどこだ。これは何だ。

何らかの、さっきの富嶽の最終速度とほぼ等速の高速移動体の上に伏せた俺の耳にだんっ、だだんっ、と、3人が降り立つ足音が響く。

「おい遠山、滑り落ちるなよ!?」

進行方向に、緋緋神アリア。

「おー寒い寒いっ！」

右後方に、孫。

「あはははっ！　ほら立てよ！」

左後方に、ハビ。

それぞれ叫ぶようにして、俺に話しかけている。

ゴオオオォォオッォオオッォオッォオッォオオオオオオオォ

（何だ――この音と、感覚は――!?）

爆風の中で薄目を開けると、視界には　白いボディーに青いフチ取りの　新幹線？

ここはかつてココ姉妹と戦ったような、新幹線の列車上のように見える。

だが、あれとは違う。架線やパンタグラフが無い。

何より、車輪が線路を走る音が全くしない。

多分、飛んでいる。

これは……地上スレスレを飛ぶ超々特急。

おかしな表現だが、俺の感覚が出した結論はそういったものだ。

あまりの速さに歪んで見える、雪深いブナの森。そこを超高速で進む、マッハ０・５の車両の上で

「遠山。お前に似合う事をしようと思ってな。この戦い、『ジャック』で締めくくろう」

指向性を持たせたらしいアリアの声が、俺の額の辺りで響くように聞こえる。それこそまるで、神のお告げのように。

「……ッ……！」

分かった……！

これは、磁気浮上式リニアモーターカー！　超伝導リニア新幹線の、青森実験線だ。

青森実験線とは、八戸から新弘前までを走るＪＲ東日本の実験線。ロシア・カナダへの将来的な輸出も狙って耐寒構造、融雪ガイドウェーを装備し、八甲田山、白神山地といった豪雪地帯を突っ切らせる耐久実験線だ。

その単線を、このリニア新幹線は2両編成で西へ西へと突進している。

「超々特急乗っ取り。気に入ったか？　遠山はアリアと出会った頃から、ジャッカー戦がおなじみだからな」「それも、実に21世紀らしい決戦の舞台だろ」「さあ戦ろうぜ」

俺の周囲をグルリと囲んでこっちへ向かってくる緋緋神3人に、

「……まあ、今まで乗った中ではマシな方かな。構造上、脱線とかも無いだろうし」

風の中で聞こえるかどうかはともかく、ボヤいて言葉は努めて落ち着いた素振りで、それでも足には緋緋神への怒りを込めて立ち上がる。闇の弔い合戦だ、とばかりに。

だが、激しい想いとは裏腹に背を伸ばす事はできない。

前方から吹き付ける、突風のためだ。

初めて乗ったが、このリニア新幹線ってやつは……

こんな乗り方で言うのも何だが、奇妙な乗り心地のものだ。

接地していない車両からは、音も揺れもほとんど伝わってこない。
ただ、激しい空気抵抗だけが足下を苛む。
UFOでサーフィンしてる気分だぜ。
ちゃんと戦えるのか。こんな足場で。
「キンジ。お前への気持ちはコントロールがきかないよ」「自分じゃ、どうしようもないんだ」「これって恋なのかな」
今や、舞台は3対1。
「……恋か。そう言っていただけて光栄だ」
二等辺三角形のように並び、その重心に俺を囲んだ3人から語りかけられて
今度こそ、今度ばかりは俺の力じゃどうしようもない……さっきも悟ったその現実が、改めてハッキリ突きつけられてくる。
それでも、いつも何か思いつくのがヒステリアモードだった。
だが今はもう、この状況をどう解決すればいいのか、ヒステリアモードの俺も何も思いつかないのだ。
その状況で、俺は追っている。アリアを。がむしゃらに。
戦えば負けると分かっていて、実際、苦汁をなめ、仲間を失いながら追っている。
愚かだ。

だが、この愚行をさせてしまう。
俺の、パートナーへの想いが。
アリアへの、想いが……！
「恋！」「恋とは、すなわち戦い！」「戦おう遠山！　ははははっ！」
緋緋神。
お前も神を名乗る割には、不器用な女だな。
気のある男と、戦いたいだなんて。
緋緋神に好かれてる事を認めるようで、気恥ずかしいが
お前は、好きなタイプにはイジワルしちゃうタイプ。その、究極版って事か。
恋と戦を引るが故に、なんだろうけどさ、
俺とお前は、この2両編成のリニアみたいなもの。
とめどなく行き交う、超伝導の力にみちびかれて
暴走してる。お互いに、もうどうしようもない心で。
「よし。恋人よ。今夜は行くとこまで行こうぜ」
マッハ0・5の猛吹雪の中。リニア新幹線の上。
そこで俺は身をたわめ、転落しかけた時に備えてナイフを抜く。今の間で靴にベルトの

バックルから出した鉤爪は付けておいたが、それじゃ事足りないかもしれないからな。

さて――この、超々特急乗っ取り。

相手は緋緋神。それも3人。完全緋緋神――『緋弾のアリア』を中心に、ほぼ全く同じ攻撃力を持ったコピーが2体。同じ存在が、3体いるって事だ。アリアの姿をしてようと、もう俺たち常人とは全く異なる概念の存在と考えなければならないな。緋弾のアリアは。

そう、緋弾のアリアとは――

――理解を超え、理屈の通じない、どうすりゃいいのか1ミリグラムも分からない存在。

だが、それが何だってんだ。

女の子って、元々そういうもんだろ？

（前にホームズ、右後ろに悟空、左後ろには信長か）

なんか不揃いだが、それが俺にはお似合いの現実ってやつだ。

3人の中で一番怖いのは、やはりアリア。

直感的にではあるが、孫やハビの2倍ぐらいの存在感を感じるぞ。

その、感覚が……ビシッ……ビビビシッ……と、物理的にも伝わってくる。

微震、している。空気が。森が。山が。吹雪(ブリザード)渦巻く、空間そのものが。

そして

白銀の世界に、緋色の光が生じる。

アリアの右目が、光り始めたのだ。

赤く。

赤く、赤く、赤く赤く赤く――！

「さあ遠山(とおやま)。じゃあ、これをどうする？」

――すっ。

と……アリアが。

気配に振り返れば――すっ、すっ――と。孫と、ハビが。

正面・右後方・左後方の3方向から、3人揃って俺に『前へならえ』のポーズを取った。

そして、全員の右目が緋色に光っている。

刻一刻と、その赤い光が強まっていく。

（……レーザービーム……！）

それも、三連(トリプル)レーザーだ。

こんな事態、想定したことすらなかった。

3方向で高まる闘気によって、大地が微震している。景色となって流れ去る周囲の木々から、バシッ！　ビシッ！　と、触れもしていないのに雪や枝葉が剥離している。

そこで突如、

「――キンジ。1発なら私が相殺できます」

俺の頭の中に、アリアたちとは別の声が響く。

……瑠瑠神だ。

「あなたが香港で使った、あの技を使いなさい。私が融解中にレーザーの光路差を広げ、増加した位相を時空両面で乱し、コヒーレンスを弱めさせれば――このナイフの長さでもきっと、ヒヒのレーザーを受け止める事ができます」

兄さんの形見のバタフライ・ナイフ、色金止女が……

青く、光を放ち始めてる。

ヒステリアモードでも知識の絶対量が増えるワケではないので、止められるという瑠瑠神の理屈は分からなかったものの……

俺がスクラマ・サクスを盾にしてレーザーから身を守った技――矛盾の傘。

あの技を、この長さのナイフでやれって言うのか。瑠瑠神。

「そうです。必ずや、1発は食い止めてみせます。その代わり、ここに鍍された分の私は死にます。未遂とはいえ、私は姉を殺そうとした。これはその報いであり、償いなのです。ですから遠山。躊躇うことはありません」

「ルル、お前……！」

「キンジ。叶うなら私もこの戦いを、最後まで見守りたかった。ですがこれより先、私はキンジに力を貸す事もできなくなります。ご武運を――」

そう言い残し、瑠瑠神は光を強めていく。

青く、青く青く青く青く――！

「そうきたか」「だがどうする？」「残りの2発は？」「遠山、お前が」「なんとかするのか？」「できるのか？」

それを見たアリア、孫、ハビが

3方向から、セリフをグルグル回すように聞いてくる。

聞かれるまでもない。その通り。

1発は受けるとしてくれた瑠瑠神だが、あとの2発は俺の仕事だ。

なんとかしないと。できないと。

（あの、レーザーは……）

それぞれの、右の瞳孔から放たれる。
視線を逸らさせれば、当たらないんだ。
だが俺は正面に立つアリアの、あの赤紫色の瞳と見つめ合っている。
見つめ合う運命にある男女が、それに逆らうような事はするべきじゃないよな。
俺も、あの愛らしいツリ目から視線を逸らしたくはないし。
だから、アリアの光を受けよう。
と、俺は……人間とは死生観が異なるとはいえ、命の一部分を擲ってでも戦おうとした瑠瑠神の意志を尊重して
サファイアのように輝くバタフライ・ナイフを、突き出すように構えた。
突く矛のように見えて、これは盾。
本邦初公開、矛盾の傘の構えだ。
「1方向からだけなら、防げたかもしれないがな」「今回は記号でいえば、アスタリスクあたしは3方向から、お前を光線の交点で捕捉する」「どこへ逃げようと、貫かれる角度が変わるだけだぞ」
……語るに落ちたな、おしゃべり緋緋神。
お前の発言から、閃いたぞ。

幾何はニガテだが、3つの直線に交点を作らせない方法をな。
それとこの作戦はアリアばかり見ていたお詫びの、孫とハビへのサービスにもなるし。
そうだな、名前は
（――『ノヌガーレ』――）
その新技を名付けると同時に、俺は風圧と桜花気味のバックステップで真後ろに飛んだ。
赤く輝くアリアに、青く輝くナイフを向けたまま。
かつて猴も言っていたが
緋緋神のレーザーには、キャンセル不能になる瞬間がある。射出のおよそ、1・2秒前。右瞳の赤い輝きが急に明るさを増したら、もう止められないのだ。
俺が狙ったのは、その瞬間。
「――！――」
俺の動きに、三連レーザーは、『＊』のように俺を3方向から貫くのではなく――
『≠』
ローマ武偵高のエンブレム・ノヌガーレ記号のように、不規則な並びとなって放たれた。

撃たれた瞬間に手を放したバタフライ・ナイフはアリアのレーザーで融解し、青い花のように広がっていく。

音も無く、受け止めている。

（……ルル……！）

緋緋神の必殺の一撃を、瑠瑠神が。

小さな傘が開くように膨らんでいくその速度は、スクラマ・サクスの時よりも遅い。

瑠瑠神はその超々能力でレーザーを受け止めながら弱め、受けきろうとしているのだ。

そして、俺が対処した残りの2発。

孫とハビのレーザーは、それぞれ俺の体の前と後ろへ逸れて通過している。空撃ちだ。

空撃ち、させたのだ。

それは実に実に、簡単なことだった。

やろうと思えば子どもだって出来る、レーザーへの返し技。

俺は

レーザーが発射される瞬間に、後方の左右にいた孫とハビのちょうど中間に入ったのだ。

孫・俺・ハビが直線上に並んだ事で、孫は俺を撃ち抜けばその向こうのハビを、ハビも

同様に孫を、それぞれ撃ってしまう事になる。
だから、孫とハビは同士討ちを避けるためやむなく視線を逸らして、『　』形に撃った。
で、その間に立つ俺は難を逃れたというワケだ。
とはいえこの作戦、緋緋神が孫・ハビを失っても俺を殺そうとしたならアウトだった。
まあ、依り代2人と俺との交換じゃ駒損すると思われたんだろうな。
緋緋神に安く見られたおかげで、助かったってことか。そこはちょっと、傷つくね。
風雪に飛ばされる花のように、俺と長らく生死を共にしたバタフライ・ナイフはリニア後方へ飛び去っていく。
瑠瑠神の想いと、命と共に。
「……ノヌガーレ（Non ugnale）とは、等号否定。ノット・イコールという意味だ。アリア、猴、ハビ。君たちは緋緋神じゃない。緋緋神とイコールじゃない。俺はまだ、そう信じてるからね」
リニアの上は雪で滑る事もあり、俺は今の動きの惰性で後ろに下がる。
アリア、孫、ハビは今、3人とも前方に見える位置になった。
だが3人とも、もうレーザーは撃てない。
・気に3発撃ったのが運の尽きさ。

「どうだ緋緋神。俺は君の最大の攻撃を防いだ」
だから、もう戦うだけムダ。
どうか鎮まって、アリアたちの占拠をやめてくれないか――と言おうとした俺に、
「バカキンジめ」
依り代の口癖をマネた緋緋神アリアが、腕組みしてニヤリと笑う。
吹き付ける吹雪に長い黒髪を靡かせる孫と、赤銅色のショートヘアを暴れさせるハビが……アリアの左右へと、歩み寄っていく。
「今のは攻撃じゃない。時間つぶしだ」
時間つぶし……？
だが緋緋神の口調は、負け惜しみという風ではない。
「加速させるリズムを掴むまで、ちょっと掛かったからな」
というアリアのセリフに続けて、ググググンッ！
と、リニアが急加速し出す。
（……！）
なんてこった。
アリアたちは磁力か何かを操り、このリニアを加速させている。
リニア新幹線の営業速度は、マッハ0・4～5を想定していたはず。だが今この速度

は、体感で……マッハ0・6～7……その1・5倍は出てるぞ……！

異音は少しずつ上げ始めたものの耐久実験線だけあって、それでもリニアは疾走を続ける。

まるで水平に飛ぶロケットだ。

俺は体を撓め、靴の鉤爪を頼りになんとか立ち続けるが

孫とハビはカットオフ・セーラー服のスカートやブラウス、和服の裾を風圧に引きちぎられそうなほどにバタつかせつつも、平然とリニアの上を歩いていく。アリアの、方へ。

そして、不思議な行動に出た。

（……？）

組体操やチアリーディングのように

アリアがこっちに背を向けて進行方向を向き、孫とハビが左右からその手を掴んだのだ。

頭脳の言うことを両腕が聞くような、完全な連携っぷりで。

「「よっ、と」」

アリアの手を掴んだままの孫とハビがハモって手を突き上げ、持ち上げられたアリアは空中で腕立て伏せみたいな姿勢になった。体操の吊り輪みたいに、こっちにまっすぐ足を

向けて。
そして、バサバサっ――！
真後ろに流れていたピンクブロンドのツインテールを、左右に広げていく。
翼の、ように。
「ッ……！」
その辺りで、気づいた。
ツインテールの下方で気流が渦を巻いているのが、雪の流れ方で分かる。
揚力が生じているのだ。
航空機の主翼のように。
（飛ぶつもりか！）
それを証明するかのように、それまで力を入れて持ち上げていたらしいアリアの足が、重力から解き放たれつつあるのが分かる。
孫やハビも、持ち上げるその手にはもう力を込めていない。
緋緋神が富嶽からこのリニアに瞬間移動したのは、俺が何度も巻き込まれたジャッカー戦に準えるためだけじゃない。
これは、このリニアは
緋緋神アリアの、カタパルトなんだ！

ふわ

と、アリアの体が宙に浮く。マッハ０・７５の世界で。

孫とハビが、発進する戦闘機を切り離すようにその手を開く。２人揃って、バンザイでアリアを見送るかのようなポーズになりながら。

（アリア……！）

また磁力を操ったか、或いは念力で車内のどこかを動かしたのか

ゴクンッ！

突如、リニアが減速しはじめた。

マッハ０・６　０・５　３００km／h　２００km／h

相対的に、さっきの最高速度を保ったままのアリアがリニアを置いて前進していく。

「アリア……アリア　っ！」

減速で風圧も弱まり、身動きが取れるようになった俺はリニアを前方へ走るが……

もう、アリアは遥か先の上空で雪雲を掠めるように飛んでいる。

そして……

リニアが時速１００kmを切ったあたりで、どさ、どさ。

と、孫とハビが倒れていく。

「……っ……！」

突然の事だったので、咄嗟に俺は2人が車両から転げ落ちないようにとその小さな体を抱え――意識を失っているようだ――何も見えないような吹雪の向こうに、アリアの姿を求めて視線をさまよわせる。

（アリア……！）

臙脂色をした武偵高のセーラー服と、オーラによる緋色の発光のおかげで、その位置がうっすら把握できた。

山の稜線を伝う上昇気流を捕らえたアリアは、高く、高く、また高度を取っている。

その飛び方には、迷いが無い。

やはり緋緋神アリアは、どこか特定の場所へ行こうとしているのだ。

明確に、その意志がある。

「……！」

山々よりも高く舞い上がったアリアの光は――

さっき富嶽からは角度的に見えなかったらしい、白神山地の北側へ向かうような軌跡を空に描いている。

そして緋色の光が、キラキラ……キラキラ……

と、金色の尾を曳き始めた。
（有視界内瞬間移動……！）
俺がそれに気づいた、次の瞬間――パッ――アリアの光が、突如として消えた。
瞬間移動――したのだ。孫とハビを置いて、どこかへ。

4弾　雪の樹海
Snowflakes

青森の雪は秋田以南のベタ雪とは違う、綿雪と呼ばれるものだ。
それが降り積もった大地に北風が吹き込むと、砂漠の砂のように雪が渦を巻いて、大地を吹き流れる。地吹雪と呼ばれる現象だ。
その、地吹雪の中
俺は停止したリニア新幹線、その流線型の先端を滑り台のようにして地面に降り立つ。
担いで運んできた孫とハビは脈もあり息もしていたが、失神していた。
2回ほど、この現象は見た覚えがある。緋緋神が抜けると、憑依されてた者は短時間、昏睡するのだ。つまり今、孫は猴。ハビも元のハビって事だろう。ややこしいな。
もうレーザーも撃ちきったし、緋緋神は孫とハビを不要と考えて切り捨てたんだろうか。
あるいはひょっとすると、依り代を3人同時に動かすのは緋緋神にとってもしんどい事だったのかもしれないな。何事にもコストはかかるもんだし。
（当初、気絶させるつもりだったが……こんな形で、自らしてくれたとはね）
ここもまた俺の思惑通りに進んではいないが、もうこれはこれで良しとしよう。2人

は、とりあえず救えたんだ。ここまでの戦いは少なくとも、ムダじゃなかった。犠牲になった闇も、瑠瑠神も。

気落ちしては戦い続けられないので、そう思い込もうとして、切り替えるように周囲を見回すと……車体やガイドウェーの周辺には、雪を融かした水が小川のように流れていく融雪システムがあった。だが、その左右は壁のように積もった雪に囲まれている。

積雪は目測2m。体感気温はマイナス5度。ここもまた、地獄だ。

（……1月とか2月みたいな最悪の季節よりは、幾分マシだけどな）

とはいえ、天気は吹雪。ボヤボヤしてたら……カットオフ・セーラー服の猴、ミニスカ和服のハビは元より、武偵高の男子制服しか着てない俺も凍え死んでしまう。

とばかりに、俺はベレッタでリニアの窓ガラスを撃って1つ割らせてもらう。

飛散防止タイプの二重窓は割れ方がおとなしかったので、グリップをハンマー代わりにして弾痕を広げ……後は銃身のスライドで均して、入口を作り上げる。

そして、股下1cmのスカートをはいてるわ下着をつけないわの猴&ハビを――いろんな意味で気をつけながら、車内に押し込む。

続けて自分もリニアに入り、体から雪を払うと……

非常灯に照らされた試験車両には、人は乗っていなかった。暖房は入ってなく、車内の気温は外気と大差ない。県立実験センターから運転されている、無人車両って事か。

だが、人を乗せてテストする事もあるらしく　車内のデッキには、試乗用のシートが設置されてある。

とりあえず猴とハビをそこに座らせてやり、

（人が乗る事もある、って事は……）

と、車内をあちこち探してみれば……あったぞ。『非常用』と書かれた断熱ロッカーに、保存水の５００㎖ペットボトルと、乾パンのカンヅメ。救急箱に、非常時用のマグライト。そして、防寒コートも……！

天は俺に味方したな。

（いや、味方してくれてれば最初からこんな事にはなってないか）

と、俺がとりあえず頭の傷に消毒液をぶっかけたり、ペットボトルから水を一口、二口、飲んだりしていると

「ん……」

「うゆ……」

と、眠りから覚める猴とハビの声が、シートの方から聞こえてくる。

「……猴。ハビ。大丈夫か」

と、俺がそばへ歩み寄ると……２人は『キノクニにいたのに、気づいたらリニアの中』ってんで、揃ってお目々をパチクリさせている。

俺からすると、さっきまで命の取り合いをしていた相手がただの女児みたいなモードに戻ってる感じだ。

その辺の心の整理タイムを兼ねて、2人に事のあらましをザッと説明すると

「……？　はらへった」

「孫のしたこととはいえ、猴が遠山と闇さんを……」

まるで話を理解してないハビの隣で、猴はションボリと涙ぐんでいたが、

「……緋緋神がアリアさん、ハビさん、猴を同時に動かしていたのは……比較して、最終確認していた意図もあったかもです。緋緋色金が入っていないハビさん、性格が緋緋神と異なる猴、この2人は不完全緋緋神にしかなれなかった。不完全緋緋神は乗っ取ってない間は勝手に動いてしまうし、こうして緋緋神の事を人に喋ってしまう　緋緋神の側から見ると、不便な存在です。だから、猴とハビさんを捨てていったのでしょう。アリアさんこそが、完全な化身として選ばれたということなのです」

その辺の見解も、教えてくれた。

瑠瑠神も言ってたが……

思いの外、慎重なヤツなんだな。緋緋神は。

同条件で3体動かすテストも実施して、アリアの実戦性能まで相対的に評価してたってワケか。

「降りる。アリアを追うぞ」
俺はそう言い残して、合皮のコートを羽織る。
そしてリニアからパクった諸々の非常用アイテムを手に、窓から出ようと手を掛ける。
「ムチャです遠山っ、こ、こんな雪の山へ出るなんて……！　それに、アリアさんがこのリニア電車の進行方向側に飛んだなら、このまま電車がまた動けばきっと近づけるです」
俺の事は呼び捨てなのにアリアにはさん付けする点が少々イラッとくる猴は……吹雪にすっかり怯えて、俺のコートの裾を引っ張ってくる。
だが俺は、
「違う。方向は関係ないんだ」
と、窓の外に吹き荒れる地吹雪を睨む。
終わりかけのヒステリアモードで、それでも俺は推理してある。
アリアが飛んでいったのは、目指す方向じゃない。
方向や距離は、無視できるのだ。有視界内瞬間移動という移動方法を前提にするなら。
瞬間移動以外の移動は全て、『見る』ための移動。
そう考えなければ、緋緋神アリアの行き先は正しく判明させられない。
では、富嶽からは見えず、八甲田山の南西側からなら見えたものは何か？

それぞれの緯度・経度。

かつて見た、青森県の地図と等高線の記憶。

消失した瞬間の、アリアの高度。

それらの条件を、脳内で3Dモデルを組み立てながら確認していく。

それが見えた瞬間、緋緋神アリアは瞬間移動したのだ。

「星伽神社だ」

青森県弘前市星伽山、星伽神社。山深い砦のような、あの神社へと。

「……」

薄れゆくヒステリアモードにもう頼れなくなってきて、俺は携帯を取り出す。

アンテナは……よかった、1本立ってるぞ。

GPSを使って現在位置を測位し、星伽神社との距離を測る。

……起伏を考慮しなければ、50kmってとこか。

行くぞ。

行くんだ。

緋緋神に囚われたアリアを、今度こそ救うために。

そしてこれはもう、偶然ではないだろう――白雪。

メヌエットに教わった通り、そこにいるのであろうお前にも聞かせてもらうぞ。
お前が知るのであろう、全ての答えを。
「猴。来い。ここから先、俺にはお前が必要だ」
と、俺が有無を言わせない表情で半分だけ振り返ると
「あ……あぃ……」
なんでか猴は少し赤くなって、非常用ロッカーへ駆けて防寒コートを取ってきた。
「猴は何なりとお力添えするです。緋緋色金には永い間、辛い思いをさせられてきました。誰も、それを解決することはできなさそうでした。でも、遠山なら。遠山なら、緋緋神の呪いを根っこから断てるのかもしれないです。猴はそれをお手伝いするです」
そう言って、大きなお目々にやる気を漲らせて来た猴だが……身長が１４０も無いので、コートをズルズル引きずってるよ。俺も人の事は言えないが、この子もキマらない子だなぁ。まあ、そこがカワイイんだけど。
それと、ハビもこんな所に１人で置いていかれるのはイヤらしく、
「覇美、いっしょ！」
と、貴重な食糧をバリボリ頬張りながら猴のコートに潜り込んだ。
「ひゃうぁ!?」

くすぐったそうに猴が声を上げ、もごもごっ！　とコートの中で2人が蠢いて……
ぼん。ぼぼん。
コートの上に頭が2つ、下に足が4本出てて、猴の右腕が右袖に、ハビの左腕が左袖に入ってる状態になった。
変則的な二人羽織みたいなスタイルだ。横並びの。
……じゃあ、もういいやそれで。
ハビは外見だけじゃなく脳ミソも子どもなので、保育が必要そうだしな。放っといたらネグレクトになる。
文字通り足手まとい感のあるハビにため息しながら　俺が水のペットボトルを2人に1本ずつ渡すと、2人ともそのままポケットに入れようとするので、
「水は今3割ぐらい飲んでおけ。満杯のまま運ぶと、動かないからすぐ凍っちまうんだ。ボトルの中でチャプチャプ動いてる分には、凍らない」
武偵高じゃ1年のサバイバル訓練で習う知識を教えると、猴は「そ、そうなのですか」と、それを知らなかった様子だ。
「そっか……お前は暖かい香港の出身だもんな。雪山はニガテか」
「……あい。西蔵で雪を見た事はありますが、ここまでの吹雪は見たことがありません」

キノクニやアフリカで暮らしてたハビも、推して知るべしだな。どっちも雪なんて降るわけない土地だ。

シベリア寒気の吹き溜まりとなる世界一雪深い土地、青森には最も不向きかもしれん。

2人とも、しっかり守ってやらないと。

「心配するな。俺は子供の頃、兄さんの仕事の都合でしばらく青森にいた事があるんだ。雪山で遭難したのも、初めてじゃない」

「さすが遠山です。あらゆる危機に一度は陥っているですね」

猴は胸の前に両こぶしを上げて、尊敬の眼差しで俺を見上げてくるんだが……

……誉めてんのそれ？

俺たちはリニアから出て、周囲の雪をジグザグに這い上がる。

厚い雲に上空を押さえられたブナの森は薄暗く、雪原には煙のように雪が流れている。

俺は二人羽織状態の猴&ハビに、

「携帯の地図を頼りに、西の沢を目指す。そこを回り込めば、3月じゃまだ通行止めだが国道があるハズなんだ。国道に出たら、そこを伝ってさらに北の尾根を目指す。そこまで出れば――俺に、作戦がある」

と、まずは行路だけを伝えた。
作戦があるとは言ったが、その成算は薄いものだ。
仲間のモチベーションを下げないためにも、説明しないでおいた方が賢明だろう。
「あと、猴、ハビ。外を歩く間は、手の指先を絶えず動かしておけ。時々、鼻も揉め」
「どうしてなのです？」
「はらへった」
「そうしないと、気づかないうちに凍傷になるんだ」
と、寒さへの警戒を促しつつ……
俺はバックルを後ろに向けたベルトのワイヤーを伸ばし、後続の2人に掴ませた。
ハビと猴は同じコートを羽織っているので、そこがはぐれる心配は無いが吹雪の中じゃ、列になって歩いていてもすぐ前の人影すら見えなくなってしまうからな。
さっき猴にも話した通り、俺は去年アルプスで遭難したが
この山は、地の利の全く無かったモンブランとは違う。日本の山だ。
八甲田や白神山地では小さい頃に兄さんとキャンプした事もあるから、地形を知らないワケじゃない。道案内が居なくても、なんとか出来るハズだ。山岳訓練だって高1の冬にやらされてるしな。あれは赤城山だったけど。

……四の五の言っても始まらない。
行くぞ。
緋緋神は紛争を起こすつもりか知らんが、それより何より
俺のパートナーを、アリアを取り戻すためにな。
と、俺はマイナス5度の雪原へと踏み出す。

後ろに猴&ハビがついてくるのを時々確かめながら、吹雪の中を歩く。
ほぼ氷原だったモンブランとは違い、足下の雪は綿のように柔らかい。
滑らないのはいいんだが、足は容赦無く膝辺りまで沈む。なので、先頭を歩く俺が雪を蹴り上げて道を作りながら進まなければならない。
……普通に歩けば5km/hは出せる山道だが、この条件だと3km/hも厳しいな。
コートのポケットには手袋もあったが、足下の防寒は不十分だ。
リニアのシートから合皮を剥がして皆で足に巻いてみたものの、靴の中には雪が入ってきてしまっている。
応まだ地図は見られるものの、携帯の電波も届かなくなった。
西へ向かってはいるつもりだが、目印にするものが何もない。
そんな状況で少し歩いているうちに……前後左右、どっちの方向もみんな同じに見える

森になってしまった。
まるで、雪の樹海……
（クソッ。甘かったかもしれないな）
まだリニアを発って1時間も経ってないのに、正しい方向へ進んでいるのか自信が無くなってきた。
もしかすると、迷ってしまっているのかもしれない。
だとすると、ムダに体力を消耗するのは危険だぞ。
一旦、線路まで戻るか？　いや、もう俺たちの足跡は雪で隠れてしまっているだろう。
「この吹雪さえ、やんでくれれば……」
俺は森を見回し、白い息を吐いて舌打ちする。
すると……
「やむ」
後ろから、ハビの声が。
「……？　分かるのか？」
「おう。覇美わかる。雪、すぐやむ」
猴とほっぺたをくっつけ、身を寄せてコートを被っているハビが

そんな事を、言ってるぞ。

「それと遠山、あるく道、南ずれてる。あの岩のほう歩く、よい。風の通り道ちがう」

ダブダブの手袋をした手で右前方の雪原を示したハビは、どうやら……

アフリカ帰りの鬼だけあって、自然の事が分かるらしい。野生児の本能みたいなもので。

「猴。ここ、キリマンジャロのてっぺん、似てるな！」

「似てるな！　と言われましても……」

と、ニコニコ笑顔のハビと困り顔の猴は横並びの二人羽織モードで喋ってるが　俺も、浅学だったな。

アフリカの大自然にも、雪深い高山ぐらいあったって事か。

そこから、俺たちは……

ハビを道案内にする事で、吹雪のブナ森を順調に進めた。

ハビには実際、野性のレーダーみたいな感覚があるようで　言われた通りに歩くと、地形的に風があまり直撃しないコースを行けるのだ。

すげえなハビは。カンで山を渡れるのか。

「はらへった」

「ご褒美だ」

どうせ凍りかけてもう俺には噛めないので、俺は自分の乾パンもハビに与える。

ハビは「たいぎ！」と嬉しそうにキバを剥き、バリボリとそれを頬張った。

そうこうして西の沢へ向け、進んでいくと……

標高が下がるにつれ、積雪も減ってきた。

（沢を目指したのは正解だったな）

3月ともなれば、雪解けシーズンだ。いくら青森とはいえ、低地では雪も少なくなってきている。

そして――ありがたい事に、ハビの予報通り雪もやんできた。

雪の中を強行軍した甲斐があったぜ。

もう難所は抜けた手応えがあるぞ。

だが、雲間に見えた空では……

「……日没が近い。露営する場所を探さないとな」

日が傾いている。

それに伴って、刻一刻と気温が下がってきてもいるな。

「野宿するですか、じゅる」

猴が鼻水をすすりつつ、弱り顔で聞いてくるので……

「ブッ通しで歩いて急ぎたいのは山々だが、夜の雪山を歩くのはさすがに自殺行為なんだ。日が出てる内に岩陰の雪に穴を掘ったりして、夜はその中で冷気を避け、日の出を待つ」

と、俺が説明していると。

「やすむ？」

ハビは猴と俺の話から、それが分かったらしく

「それなら、こっち良い」

俺たちが下ってきた勾配のさらに下を、ちっこい手で示している。

「……人家でもあるのか？」

ネバダの砂漠で遭遇したサンダース爺さんみたいに、こんな所に住んでいる変わり者がいるのかも……？　と思って尋ねると、

「人、無い。でもこっち、あったかい感じする」

ハビの回答からは、何があるのかイマイチ分からない。

時刻は

そろそろ雪壕を掘るなら掘り始めないと、身を隠す前に日が沈んでしまう頃合いだ。

雪壕掘りとは要するに、かまくらを下向きに作るような行為だ。全身がすっぽり隠れるまで掘らねばならず、スコップも何も無しではかなりの時間が要される。

だが、まだ日は出ている。

雪壕を掘らず、ハビの話を信じて歩こうと思えば――まだ、歩ける。

「その『温かい』まで、距離はどのくらいなんだ。今までと同じぐらいの速さで歩いたとして、日の入りまでに着ける距離か」

「んー。んー」

ハビは俺の言葉の意味を理解しようと努めている感じで、眉間に皺を寄せ、ツノを握り、フンス、フンス、フンフン。何やら虚空を嗅ぐような仕草だ。

そして、ぱ！　と笑顔になって、

「おう！　いける！」

……イマイチ、命を預けるには心配が残るゴーサインだが……

この山でのハビの実績からすると、賭けてみてもいいかもしれない。

よし、行こう。穴掘りはナシだ。

夜間の雪中行軍では、昔から軍人や自衛官でもバタバタ死人が出ている。

だが雪は止んだし、ハビの案内で行く道は上手く標高を先に下げるコースで、それに伴い1m、50cmと、樹木の埋もれっぷりから分かる積雪も減っていく。

そして日没とほぼ同時に、

「……上だ」

足下に、剥き出しの土が現れ始めた。

行く手の斜面は、雪のあるところと無いところがブチになっている感じだ。

土は秋に落葉した枯れ葉が腐葉土のようになったもので、雪上より遙かに歩きやすい。

「あい、遠山。ここはもう普通の冬の山という感じですね」

「どうだー」

さっきまで雪で真っ白になっていたコートが元の茶色に戻ってきつつある猴&ハビも、笑顔を並べてる。

まだ吐く息は白いものの、夜の森からは木と土の爽やかな香りがする。

銀色の月光の下、土の露出している地面を狙って歩けば、徒歩の速度もグンと増しとうとう、水の流れる音が聞こえてきた。目指していた沢だ。

「ハビ。お前に賭けて正解だったよ」

と、俺はハビを撫でてやる。ツノが手に引っかかって痛かったけど。

歩けないほど密集して生えてるわけじゃないが、笹を掻き分けて山間の川に出ると……

谷川は、雪解け水で恐ろしく増水していた。

携帯を確認すると――やった、今度はアンテナが2本立ったぞ。

GPSの誤差半径は広めだが、地図の川と接している部分は僅かだ。自分たちの位置が分かる。

「……津軽国定公園内、特別保護地区……県道28号線……」

よし、地図によれば

あと少し歩けば、谷川を渡る橋があるぞ。

その向こうには、車道もある。残念ながらこの季節、まだ山の車道はあらかた通行止めなのでヒッチハイクはできないけどな。

とはいえここから、俺たちは向こうの尾根を目指して上り坂を行く予定だ。

それが山道なのと舗装された車道なのとでは大違いだろう。

俺が目指している場所は――

ハッキリ決まってはいないが、この沢の先の尾根。

俺の記憶が正しければ、多分そこからなら星伽神社を視界内に捕らえられるんだ。

アリア同様、俺たちもわざわざ星伽まで歩かなくていい。
見える所まで歩けばいいんだ。
そこに着きさえすれば、
（猴の觔斗雲＝瞬間移動がある）
1昼夜に1回しか使えないというその技を、もうアリアとハビは使ってしまっているが……猴には、残っているからな。
そう思いながら、リニアから拝借してあったマグライトで行く手を照らしつつ橋へ急ぐ。
歩いていくと、久々の人工物も見つけた。地面から腰ぐらいの高さまでに突き出ている、『保健保安林　設置昭和五十年度　青森営林局』とか書かれた錆び錆びの鉄柱だ。
その前で、
「遠山。これは森の入口を示す標ですよね、という事はここから先は人の行き交う街道。命拾いしましたね！」
「おう！　覇美、猴、遠山、いのちみょうが！」
猴は安心した表情になり、ハビはマイペースに元気よく、俺を笑顔で見上げてくる。
2人とも、この強行軍が割と平気だったムードだ。子供は元気だなあ。

笑顔になるとどっちも個性があってカワイイ女の子なので、ちょっとニガテなムードを感じた俺は、

「まあ今は通行止めだけどな。行くぞ」

と、低テンションで小さく、サムズアップだけして見せるにとどめた。

ドドドド……と激しい水音を立てる沢に架かる、太い鉄の手すりのついた橋を渡り……そこから落ち葉だらけの県道にも出られたぞ。

だが……

そこを歩いて登っていっても、ブナの森のせいで視界は開けない。

30分歩き、1時間歩き、ハビの言う『あったかい』方へも向かいつつ……星伽の方向が見渡せそうな北の尾根にまで至った。

だが、見えるのは夜の市道とブナの森だけだ。

（でも、この尾根にだってきっとどこかにあるんだ……！）

小さい頃に何度か見た。工事や伐採、森林害虫なんかのせいで木々が無くなり、視界が開けている山肌を。そこからなら、きっと星伽が見える。

それを求めて歩くこと2時間、また行く手を雪が阻み始めた頃

俺たちは市道の脇に、何やら水蒸気の湯気がやたら上がっている建物を見つけた。

2階建てのログハウスで、夜なのに灯りは一切ついていない。明らかに無人だ。

なので失礼して、壁をヤモリのように登らせていただいて……
屋上から、ブナ森の上方に目をこらす。
その高さからも、星伽は見えなかったが――いいものが見えた。
「……！」
月明かりの下で、3kmほど先の尾根に飛び出している人工物の影。
鉄塔だ。
送電のためか、気象観測のためか、電波塔か……用途は分からないが、よくあるトラス構造の塔が森の向こうに浮かんで見える。
鉄塔を立てるためには、周囲の木が伐採される。そしてそこから禿げ山が広がっていくものだ。
つまり、その周囲の視界は開けている。
あれにいくらか登れば、星伽も見えるハズだ。
ログハウスの屋上へとハビと二人羽織のまま這い上がってきた猴に、
「猴」
「あい？」
「瞬間移動――觔斗雲は使えるな」

作戦成功がほぼ確実視できるようになったので、俺はそう尋ねる。
「あ、あい。3人は重量オーバーで運べませんが」
「運ぶのは俺だけでいい。緋緋色金は、にして全、全にして、……自分の手が自分の頭に近づくようなもんで、多分お前たちの接近は緋緋神に勘付かれるだろう。そうなれば緋緋神は、またお前たちを乗っ取って俺と戦わせるかもしれない」
緋緋神は今、一気に3人ともを動かすのをやめている。
3人同時に自分を動かすには、緋緋神とはいえ集中力が必要だと仮定して考えると……それをやめたという事は、きっと緋緋神は今、何らかの集中力を要する他の作業をしてるところなのだ。おそらく　アリアの完全緋緋神化、その総仕上げを。
星伽に行ったのも、多分それのためだ。
仮定の話。きっと、おそらく、多分。
俺の推理は穴だらけだ。
だが、その答えも全て分かる。
星伽につけば。白雪に、会えば。
それだけは、推理の天才メヌエット・ホームズ女史のお墨付きなんだからな。
（星伽に一体、何があるっていうんだ……白雪。お前たちは一体、何を隠してきたんだ）

そいつを全て、暴きに行くぞ。今から。
その腹を決め直した俺が、
「猴。俺を――あの鉄塔から、俺が指示する所まで運んでくれ」
森の向こうを手で示すと……そこで定番の不幸スキルが発動した。
――月が雲に隠れ、暗くなってきたのだ。
それも一時的にではなく、しばらく曇り続けそうな勢いで。
暗くなったのに伴い、鉄塔も闇の向こうに消えてしまう。
まるでコントみたいな調子で、猴が森の向こうを見渡した時に見えなくなった。
「それで尾根まで歩いてきたのですね、遠山。あい分かりました。でも、鉄塔……どこでしょう……？」
猴は眉を寄せ、暗闇の向こうを、生懸命見ている。
しかし、今それは見えない。
それで気になった俺は、揃って遠くを見ようと頑張ってる猴とハビに、
「ちなみに、どうなんだ。行先が見えないと、瞬間移動はできないものか？　だいたいの距離とか方向だけじゃ……」
と、聞いてみる。

3km先の鉄塔すら見えない闇で、概算40km先の星伽神社が見えるハズもないからな。

「あい。舳斗雲の出口の座標は、あくまで目に見える場所にしか設定できないのです」

……となると、雲が晴れるのを待たないといけないな。

山の天気は変わりやすいものの、最悪、明朝まで待つしかないかもしれない。

だいたいで鉄塔に行こうとしてもまた山道を迷う事になるし、よしんば鉄塔に上がったところで、暗ければ星伽は見えないからな。

（アリア……）

俺は夜10時を回っている腕時計を見て、息が詰まるほどの焦りを覚える。

焦る。気は急く。だが……

冷静さを失えば、人は能力を半減させてしまう。だったかな。

俺は昔のレキの格言を思い出し、一日、天候の回復を待つ事にするのだった。

山歩きの疲労を癒やすためにも、待つ間はこのログハウスにお邪魔しようと考え改めて人口を探してみると、

『四六年間の永きに亘るご愛顧　本当に有難う御座いました　閉業致します　平成二二年二月　星崎温泉』

という張り紙がされた、動かない自動ドアがあった。
……どうやら、ちょうど1年前に廃業した温泉ホテルらしいな。
勝手口から武偵手帳の解錠キーで入らせてもらうと、動物などに荒らされている様子は無い。
どうも温泉の脱衣所らしいその部屋には戸棚にアロマキャンドルが残されてあったので、ベレッタのホルスターの底に入れてあったメタルマッチで灯りを点しておく。
それで分かったが、このログハウスの裏から湯気が出ていたのは……
宿は閉業したものの、源泉掛け流しの温泉だけは湯が流れ込むままになってたからだ。
電気や暖房は動いてなかったが、おかげでこの更衣室は少しだけ暖かい。助かるぜ。
これがハビの察知してた『あったかい』場所か。なるほどね。
「ここで月が出るまで待機するぞ」
人羽織からようやく分裂した猴とハビにそんなアバウトな指示をして、俺は……
どっかりと、棚のそばに腰を下ろす。
さっきは、月が隠れた天候不順はタイムロスに思えたが……
俺の体は、思った以上に疲れている。
ヒステリアモードで戦った後遺症もあるが、それより雪山で体温を奪われたダメージが深刻だ。

ていうか、動きを止めたら体が震え始めた。今も凍死寸前ってことか。
一刻も早くアリアの所へ行きたいが、ここで休憩して、体を温めておかないと途中で、くたばる。
今は休んでおこう。急がば回れってことだ。
「……」
と、寄りかかった棚――そこに置かれた脱衣カゴには、ビニールに包まれたままの真新しいタオルや、ポケットティッシュが残っていた。
どちらにも、ここの温泉名と電話番号が書かれてある。
（『星崎温泉』、か……）
この辺の地名には、星にちなんだものが多い。
星伽もその1つだ。
『星』のつく土地に入ったという事は、それだけ星伽神社……メヌエット曰く『緋緋色金研究所』に接近してるって事だ。
結果的にはそのメヌエットの助言に従う感じで、な。
「湯ぞ！　湯ぞ！　わぁー！　遠山！　ほめてつかわす！」

どたどたた。
目の前を、全裸の幼女が走っていった。
「は、ハビさーん！　待ってくださいぃ～！」
それを、カットオフ・セーラー服の幼女が追っていった。
……ドドドド……バチンッ……
バキッ……ドドドド……
（……この、音……）
遥か遠くの山から、地響きのような音が聞こえてくる。
あれは雪崩の音だ。
途中に聞こえたワイヤーが切れるような音は、木やその枝が折られて薙ぎ倒された音。
小さい頃にも春先にはたまに聞こえて、怖がって泣く白雪たちを宥めたから覚えてる。
（山中で露営してたら、巻き込まれて死んでたな）
ハビの野性に賭けて、強行軍で降りてきて正解だった。
ハビ様様だよ。
「わぁーい！」
どたどたた。

って……

「……ハビ……様……？

さっきは雪崩の音に現実逃避してスルーできたが、

「おい！　ハビ！　なんで――」

すっぽんぽんなんだよ！

という俺の疑問に答えるように、ハビは浴場へのドアを開けて突っ走っていく。

そして元気いっぱいのスッパダカで、ざぶーん！　と、どうやらほぼ天然の温泉を掘り広げただけのものらしい露天風呂に両手を広げてダイブしてる。

俺と猴はアリアみたいに急速赤面しつつ、しかし……

「よいぞ、よいぞ！　覇美、冷えた！　湯あったかい！」

……などと湯煙の向こうでザブザブはしゃぐハビの姿に、恥ずかしさを上回る羨ましさを感じてしまう。

本当に、本当に、温かそうだ。

芯まで冷えきった全身が、全力であれに入る事を求めている。

湯に浸かれば、寒さにやられた状態からも一発で復活できるだろう。

「……あの、遠山。猴も……」

心の底から気持ちよさそうなハビを見て、猴もガマンできなさそうだ。

ホカホカと湯煙を上げる温泉に、目が釘付けになっている。

夜空は――

まだ、真っ暗な曇り空。

「入っていい。どうせすぐに月は出なさそうだしな。お前たちは奥の方で体を温めろ。俺も手前に入るから」

この温泉はプールみたいに広いし、元から男湯・女湯は分かれてないみたいだし……

これだけ湯気がもうもうと上がってるんだ。ちょっと離れれば、お互いの姿は見えないだろう。

まずは俺が目を閉じて壁の方を向き、裸になった猴を先行して入浴させ、それから俺もタオルを手に温泉へ向かう。

向こうで「それー！　たんとかぶれ！」「ひゃあぁ、耳にお湯が入ったですー」などと女の子2人がキャッキャしてる歓声は妙な想像を掻き立ててよろしくなかったので、俺はさっきのポケットティッシュをちぎって耳に詰め、即席の耳栓にしてある。

女が2人もいる温泉に闖入するなど、普段の俺なら拳銃で脅されてもしない事だが……寒さにやられた体を回復させるためだ。

耳栓はしてある。

視界は暗さと湯気によってほぼ何も見えない。

安全確認完了。よし、行くぞ。

と、足の指を湯に入れた瞬間から

（……い、生き返るぜ……！）

気持ちいい。

涙が出るほど、気持ちいい。

死体みたいに青くなってた手足の先や体の節々が、みるみるうちに甦っていく。

湯温は熱めだが、冷え切った体には適温だ。湯冷め防止にもなるしな。

あと、入ってから分かったが……
この温泉は浅く、岩に寄りかかって座って浸かるシステム。
それによりちょっとゴツゴツした湯の底に背中や足が乗っかって、マッサージ感がある。
爺むさいと言われるかもしれんが、そんな所も俺好みだね。すばらしい。
（ゲームだったら全回復のエフェクトが出てるとこだな、今……）
と、肩まで湯に浸かった俺は手足を伸ばし、ふぅーっ……と息をつく。
視界は空の黒と、温泉を囲む岩の灰色、あとは温泉を囲む木々の深緑ばかり。月の白い光は、まだ訪れない。
俺は厚い雲を見上げ……
体を湯で癒やしつつ、晴れ間が訪れるのを待つ。
10分。20分。むしろ汗が出てくるぐらい、体が暖まった頃
雲に、薄いところが現れ始めた。
そこが月にかかると、ちょっと明るくなるぞ。
その頻度は増し、時に雲には切れ間が生じるほどになった。
よし、天気は持ち直しつつある。確実に。
そしてついに

（……月明かりだ！）

見えてきた。

白い月の光。黒い空。肌色の……猴……ッ？

「……！」

お、お、俺のッ、目の前にっ……！

こ、こ、猴ちゃん！　猴ちゃんがっ！

入浴中だから当然なんだが、す、すっぽんぽんで……立っていらっしゃる！

「……！」

俺と目が合った猴の、幼い顔つきと同じ幼い作りの身体が、白銀の月光で何もかも詳らかに見えてしまう。

幅の狭い、白い撫で肩。

発育途中のままの、ささやかで小ぶりな胸。その曲線が膨らみきらないままに、腰あまりくびれのないウエストへと続き、その下、両手で楽に抱えられちゃえそうなミニさが逆に誘惑的な小尻へと緩やかな曲線を繋いでいる。

猴の脚線美をコロコロ滴り落ちてくる湯の雫が、なんでかハート型に見えてしまう。

「ぁぁぁぁ、ぁぁぁぁ！」

小動物みたいにくりっとしたお目々をまん丸に見開いた猴は、顔だけでなく体まで赤らめながら、白い歯の覗く桜色の唇をパクパクさせてる。

耳栓で聞こえなかったが、読唇したところ――暗闇の向こうの俺が静かだったのでもう上がったんだと誤解し、月が出て視界が開けてきたのを教えに来ようとしたら――ここで出くわした。って事らしい。

両手とシッポを上手く使い、猴は女子としての重要箇所を自ら隠してくれたものの……貴重な触斗雲をムダ遣いして逃げられたら困ると思った俺は、話すために耳栓を外す。

だが猴は思ったよりパニクってない感じで、

「す、すみません、すみません、すみませんです遠山」

ペコペコ謝ってきたが、その動作で、

「――ひゃあぁあぁぁ～！」

ゴツゴツしてる足下を踏み外し……

……ばしゃあ！

前に倒れてきた。

せっかくガードしてた手やシッポを外し、俺の肩に両手をつきながら。

「……！」

「……！」

避けりゃよかった俺だが、それだと猴が岩に顔をぶつけそうだったので

裸の猴を、受け止めてしまう。裸同士で。

結果

いま俺は温かいお湯に浸かりながら、女の子を抱き留めている。上から乗っかられてる体勢で。

しかも実際には、千歳とかとはいえ、見た目的には小五ぐらいの女の子を。

湯に濡れた黒髪がひとすじペッタンとほわほわのほっぺに貼りついて、元から幼い猴の印象を、より幼く感じさせてる。

「遠山……大丈夫なのです、猴は落ち着いています　猴は、緋緋神に心の隙は、見、見せないのです」

猴は猴で、俺の胸に抱かれたまま

両腕を折り曲げて縮め、小さく震えていた。

妙な気分を高めると緋緋神に乗っ取られるかもだから、俺　男に抱かれてる事で起きる興奮をけなげに抑えている様子だ。

その切なそうな表情の、愛らしさが

血流的には、マズイんですよこれが……！　中心・中央に集まりつつあるッ！

耐えろ、耐えるんだキンジ。今はこの波をやりすごせ。このシチュエーションに陥った

相手が白雪や理子だったら完全にアウトだったが、外見がこれだけ幼い猴なら脳内で子供扱いできるハズだ。俺には年下趣味は無い。無いのだ。無いのだから……！

俺と猴はお互い妙なところを触ったりしないため、ヘタに動けずにいる。

と……そこに。

「むむむ？　むー？　おー！」

出、出た！　全裸幼女1人目というか2人目というかの、ハビが！

思いっきり足を振り上げてバッシャバシャ湯を撥ねさせつつ、やってきちゃったよ！

全開の笑顔でダブルガッツポーズしながら！

ちっちゃくても女の子っぽい猴と違って、少年っぽい溌剌さが魅力のハビだが……

これも月明かりで鮮明に見えるその身体は、やっぱりオンナノコだとハッキリ分かる。

輪郭が浮かび上がったばかりの胸が、それでもプルプル躍動するのも分かっちまった。

「おおおおーっ！　遠山、猴、こどもつくるか！」

爆竹みたいにやかましいハビ様は、裸の俺に裸の猴が乗っかってる光景に何やら誤った解釈をなさった御様子。

そんな事を言われた猴は真っ赤にした顔を両手で覆い、指の合間からハビや俺を見回してるよ。

「ち、ち、ちげーよッ！」

今のは猴にも失礼な発言だったので、俺は真っ赤になってハビを叱る。

だがハビは、

「つくるの見せろ！　見たい見たい見たい！」

バシャッと湯船から上がり、俺たちの至近距離で四つん這いになってマジマジ見てくる。

「な、ななんで見たがるんだそんなの！　悪趣味だぞッ！」

「閻、津羽鬼、教えてくれないっ。赤子、いずこからくるか？　覇美に教えぬっ。誰も教えてくれぬ！　遠山、教えろっ！」

「そっ、それは……産院の分娩室だよッ！」

ていうか、俺は何でこんなとこで女児に性教育してるのか。

これはもうヒステリアモードになりつつあるための影響と見るべきだろう。

聞かれたから、求めに応じて教えちゃってる。ごまかしてるけど。

「山陰の分家？　わからぬ！　やっぱり見せろ！」

「と、遠山。そ、その。孫がまた出ると困りますから、心穏やかにお願いします。私も、最後まで心を乱さぬようがんばりますから……！」

猴は猴でなんで受け入れ態勢なのかと！

「こ、心穏やかにできる事じゃないだろそれはきっと！　あくまで想像だがッ……」

と、俺はここもちゃんとツッコミで応じてしまっている。危険だっ

「はやく見せろ！　見せたら、次、覇美！　覇美にも、赤子くれ！」

ぎゃあ！

実際には人知を超えた年齢とはいえ、こんなの2名のお腹を膨らましてたら逮捕からの武偵三倍刑で打ち首・獄門もんだぞ！

「見たい見たい見ーたーいー！　天下！　布武！」

とうとうハビは温泉の横に寝っ転がって手足をバタバタさせ、駄々っ子モードになった。

こう見えて超力の鬼だから、暴れさせると廃業したとはいえ温泉が破壊されかねない。

というか実際、岩がガシュガシュ素手で削られているので

慌てた俺と猴は、スッパダカのまま湯から這い出る。そしてそれぞれがハビの両手首・両足首をつかんで、イノシシを捕まえた時みたいに運んでいくのだった。

そして、この段階で分かった。

やっぱり俺は、ヒステリアモードになっている。湯から上がった事で血流が整ったか、

自分の脳髄を含む中枢神経が水晶のように明晰な状態になっているのが分かる。

この先さっきのような事をハビや猴に要求されては困るので、俺は

「――行くぞ。月がまた隠れる前に」

話を逸らすというか本筋に戻すように、猴とハビにそう命じるのだった。

俺にとって、温泉というものは

体力だけでなく、ヒステリアモードの全回復ポイントでもあったわけだな。

ただ、これがゲームだとしたらこの温泉シーンのせいでＣＥＲＯに全年齢対象じゃないって審査・区分されちゃいそうだけど。

コートを再び着込んで星崎温泉から出た俺たちは、マグライトを手に森を歩き……

薄く雪の積もった、円形の、樹木のない場所に出た。

銀の月明かりが白く地面を煌めかせ、まるで妖精でも棲んでるかのようなムードがある。

だがそこの中心からは、亜鉛メッキを施された無骨な鉄塔が闇へ伸びている。

どうやら、冬期は通電しない架電塔らしいな。

昇降階段は無かったが、ステップボルトを伝って鉄塔のてっぺん付近まで上がり

（あれが岩木山……ってことは、あっちが津軽平野で……）

幼い頃の記憶を頼りに、山々の形から星伽の方向を探す。

そして、まず見つけた。

標高が低くグーグルマップには名前すら載ってないが、特徴が多いから分かる。

星伽山だ。

昔聞いたところによると太古の噴火口らしい、山腹の凹みも確認できる。

火山は必ずしも頂上から噴火するとは限らず、中腹から破裂するように噴火することもあるからな。

それで山麓が抉れて出来たという、上弦の二日月形の湖も見えた。

星伽神社は当初、その噴火の地鎮のために建立されたとかで――その湖の手前に、在るのだ。

「猴。あの、表面に凹みのある山の手前。裾野に、横倒しにしたバナナみたいな形の湖があるだろう。その手前まで、俺を送れるか？」

改めてハビとコートを二人羽織したまま、手足とシッポを使って鉄塔を上ってきた猴は……俺にそう問われて……

――こくり。

頷いた。

よし、行けるぞ。アリアから遅れる事およそ7時間だが、俺も星伽に。

「森の木々で隠れている部分に、神社があるですね」

「そうだ」

「神社そのものは見えないですが、その周囲の森なら見えるので送れます。この距離だと、運べる重量は遠山1人でもギリギリです」

元より1人で行くつもりだったが……便利なようで不便だな、觔斗雲。

念のため余計な重量物は外した方がいいというので、俺はコートを脱いで武偵高の男子制服姿になった。アリアと初めて会った日と、同じ姿に。

それは日本のどこにでもいる、ただの平凡な男子高校生の姿。

遠山キンジ。お前は何者だ？

ただの高校生だよ。

数多の敵と応酬した、そのセリフが……

ある種の覚悟を促すように、俺の脳裏でリピートされる。

（ただの高校生が、神に挑む、か）

自嘲のような、あきらめのような、そんな苦笑が俺から漏れる。

完全緋緋神

そいつは今度こそ、俺1人じゃ１００％、絶対、手に負えない敵だ。
それはずっと、理解できてる事だ。残念ながら……ヒステリアモードの、頭で。
今まで俺が敵に立ち向かった時には、１％、０・１％、０・００１％だろうと勝ち目があった。それもヒステリアモードで分かっていた。だから、賭けてきた。
だが、今回は……０％だ。
シャーロックじゃないが、やる前に分かってしまうんだ。
俺じゃ、緋緋神には勝てない。
それが分かった上で、行こうとしてる。
あーあ。
いったい、なんで、こんなことになっちまったんだろうな？
なあ、アリア。
「遠山」
猴のコートから出て、俺から受け取ったコートを着たハビが……不意に。
「今のおまえ、あぶない。死ぬ覚悟してる」
俺の心を見透かしたように、そう告げてくる。
「死ぬ、思えば、まことに死ぬぞ」

額のツノごと顔を上げ、俺をシリアスに見上げるハビの表情は凛としていた。

思わずこっちも真摯に、その声を聞いてしまうほど。

「――いきろ」

普段は軽のように見えて、イザという時　その激励には、言いしれぬ力強さがある。

織田信長も、そういう人だったらしいな。ハビから今、その魂をちょっと感じたよ。

信長に応援されちゃった俺は、それでもハビはハビだと思っているので、

「――ありがとう、ハビ」

と、キノクニの王、ハビにお礼を言っておいた。

それから、改めて猴とハビの方を向いて……

制服のポケットから、何枚かの１００ドル札を差し出した。

だがここは、ちょっとキマらなかったな。ピン札だから破れちゃいなかったが、雪道を歩いたせいでけっこう濡れてる。

２つ折りにしてクリップしただけで、封筒にも入れず持ち歩いてたからな。この金。

猴、ハビ。さっきの星崎温泉から県道沿いに白神山地を下っていけ。半日ぐらい歩けば、陸奥岩崎って駅がある。そこから電車で、秋田に出られる。秋田ならホテルでドルを

円に両替できるから、後は新幹線に乗るなり瞬間移動するなりして好きな所へ行け」

実はイ・ウー艦内で金庫に迷い込んだ時に弾代として失敬したそのプチ札束を、2人に受け取らせる。

本当は自分の学費にでも充てたかった金だが、俺はもうこれきり生きて帰っては来られないかもだからな。金なんか、墓場までは持っていけないもんだよ。

どうせなら気前よく、ここで生きてるうちにカッコつけるのに使っちゃおう。

金を受け取った猴は感謝の眼差しで俺を見上げ、

「遠山……旅費のお礼というワケではないですが、これを。時が来れば渡そうと思ってたです」

セーラーブラウスの襟にある隠しポケットから、折り畳みナイフを出してきた。

しっかりとした鋼の重みをもつグリップは、艶々した白いコンク貝で表面を覆われてる。

洒落てるな。というか、アリアのグリップにあったカメオとお揃いの素材だ。

ピッ、と刃を出して何となく直感したんだが、この輝きは……

「これ、イクスカリヴァーン……俺が香港で、孫のレーザーを受け止めた剣か……？」

「そうです。融解し、傘のように広がってたのを機娘が回収したです。とても良い金属で

出来てたから、马尼亚戈から一等賞のナイフ職人を招聘して、护身刀に造り直させたそうです。ずいぶん、小さくなってはしまいましたが……」

ドイツのゾーリンゲン、日本の関に並ぶ刃物の名産地、イタリアのマニアゴからナイフ職人を呼んで打たせたのか。藍幇は相変わらず金あるなぁ。

ともあれ、俺と孫の、つまり猴との思い出の品ともいえるスクラマ・サクスはマニアゴナイフとなって、俺の手に戻ってきたワケだ。

「ありがたく、いただいとくよ。ちょうどさっきバタフライ・ナイフを無くしちゃって、あとで学校へ帰ったら校則違反で先生にしょっぴかれるとこだったからな」

俺はそれをクルッ、パチンッ、と手首を回して片手で折りたたみ、ズボンのポケットにしまう。武侦高で1年の時に流行った、ちょっとキザなフォールディング・ナイフの納刀法だが――このスマートなマニアゴナイフなら似合う。

ちょっとギャングっぽいのがアレだが、自称も他称も暗い俺には似つかわしいだろう。

気に入った。目惚れしたよ。今度はもう壊さないように、大事に使うさ。

「猴、ここまでありがとう。またいつか香港の高速下の粥屋で、一緒に粥を食おう」

「……あい……」

香港で会った時の話をされて、これがお別れの時なのだと悟ったらしい猴は

涙ぐんで俺に抱きつき、長い黒髪を揺らしてこくこく頷いてから、

「觔斗雲！　来了来了、来了――！」

別れを惜しめばもっと悲しくなるとばかりに、天を仰いで意識集中のための呪文を唱え始めた。

らいらーらいらー　らいらー

金色の光の粒が、俺を包むように飛び交い始める。1粒、2粒、4、8、16、32――

ハビが鉄棒のように鉄骨に捕まって懸垂し、靄となった光の粒の群れを避ける。

その光景を最後に、俺の視界は光で塗りつぶされていった。

……らいらー、らいらー……

猴の手が、俺の腰から離れていくような感覚があって……

（さよならだ、猴、ハビ）

……俺は、鉄塔の上から消えた。

5弾　星伽山の御神体

秋田との県境も近い、弘前市南西部の山林地帯――
星伽はその、まず人は来ないような山奥にある。
視界が暗闇に戻っていくと共に、俺はベキベキとブナ原生林の枝葉に引っかかりながら落ちていく。
そして、どちゃっ。
（……痛ってえ……！）
猴のヤツ。鉄塔から森の上辺を見て俺を移動させたんだな。
そこしか見えなかったからしょうがないのかも知れんが、それ事前に教えといてくれってての。
地面が腐葉土だったから助かったものの、岩とかだったら転落死してたぞ。20mぐらい落ちてなかったか、今。……応、多点着地法で受け身取ったけどさ。
だが、ともあれ――
ここはもう、星伽神社の鎮守の森だ。
なんとなく見覚えがある景色の中を少し歩くと、獣道みたいな山道に出たが……それ

が、星伽の表参道。

この古代からの参道は、外から自然に歩いて来てもなかなか発見できないようになっている。

敢えて、分かりにくく造られているのだ。

星伽神社は極めて排他的で、外との交流を嫌う。

その理由も、今の俺には理解できている。

白雪の炎の魔術や粉雪の神託の術からも分かるが、星伽巫女たちは代々ある種のＥＳＰ集団として、超能力を継承してきた。

長い歴史の中では、その力を利用しようとする権力者が現れたり、民衆から怖がられて差別されたりもしたんだろう。

それらから自分たちを守るために、星伽は外界に通じる道を隠し、神社に閉じこもってきたのだ。言うなれば星伽は、ある種のエスパー村。超能力者の隠れ里だ。

（超能力は、未だにニガテ分野だが……）

そこへ、拳銃だけを頼りに

俺は、向かっている。

闇の中、草木と寒風を掻き分け、雪土を蹴立てながら。

……祀る、祈る、祓う……

社、祠、禊、祭……

祥い、禍い……神……

神道で使われる文字は、示偏のものが多い。

神社――星伽神社は、示すのだろう。

アリアのため、世界中をさまよった俺に。

緋緋神の事を。

その、答えを。

そして、行くべき道を。

幼稚園の頃に白雪と花火を見に行った時、星伽神社からの出口となった石段――その石段を、月を見上げるようにして上る。時刻は深夜0時前ってとこだ。

石段の左右には等間隔に石灯籠があり、月下の寒梅がそれを彩っている。

関東で見かけるものよりビビッドな緋色に塗られた鳥居まで、百二十五段を上がりきると……

鳥居の右側から、

「……来ることは分かっていました」

星伽粉雪。

去年の夏休みに俺が武偵高を案内した、白雪の義妹が現れた。その白い手に、抜き身の短刀を持って。

もう1人、華雪――

これも白雪の妹が、薙刀を持って左から現れる。

今は粉雪が15歳で、華雪が14歳だったかな。白雪リスペクトでなのか、揃ってぱっつん前髪の姉妹だ。

さらに鳥居の奥、合祀されている稲荷の野狐像の陰からは……

かつて京都で俺とレキを救った風雪が、和弓を携えて姿を現した。

風雪は白雪の1つ下だから、16歳。長い黒髪を白いリボンでポニーテールに結い上げている。

それぞれ短距離、中距離、長距離の武具で、侵入者を迎え撃つ態勢だな。

人域と神域を分かつ鳥居を守るゴールキーパーのように立つ、白雪の妹たちに――

「星伽の決まりじゃ、就寝は8時じゃなかったのか？」

俺は、挨拶代わりの軽口を叩く。

ここで一悶着あるなら、ちょっと手荒な事になるかもな。

だが俺の危惧は取り越し苦労で、星伽巫女3人は少し沈黙した後、

「……白雪お姉様に逢いに来られたのですね」

「先程、天厄を示す緋色の帚星が……神崎アリア様のように見えた光が現れ、お姉様は、それを追って……」

「岩戸隠れなさったのです。お姉様は今宵、御神体の元へ参られました」

粉雪、華雪、風雪がそれぞれセリフを割って、そう教えてくれた。

やっぱりいるんだな。白雪も、アリアも。

そして風雪が言った、『御神体』。

小さい頃に星伽へ来た俺も、御神体がある所にだけは絶対行ってはいけないと言われていた。

そこが終着点だ。

日本、アメリカ、イギリス、キノクニ、日本と巡ってきた……長かったようで短かった、世界一周の旅のな。

「この段になって、俺もようやく読めてきたぜ」

ヒステリアモードの頭が、この旅を締め括る推理を紡ぎ出す。

「お前たち星伽の巫女は、緋緋色金の本体をあそこに祀ってたんだな」

その言葉に、ぴくっ、と、粉雪の指が動くのが分かった。

分かりやすい子だ。どうやら、当たりらしい。

秘密を知っている者を消すかどうか、華雪もここでは最年長の風雪にアイコンタクトで尋ねている。

だが　風雪が、視線で妹たちを制止し……

3人が改めて俺の方を見るので、俺は話を続ける。

「色金は、理子の小さなロザリオに微量だけ含有されてたり、弾丸サイズの緋弾が『世界最大級』とか言われてたり、極めて希少なレアメタルの一種のように思えた。だが、俺がアメリカで見た瑠瑠色金はトン単位だった。形は自動車の部品に変えられちまってたが、纏まってた質量は大きかった、ウルス族が保有していた湖底の璃璃色金も、岩というべきサイズだったそうだぜ」

その話に粉雪と華雪は少し驚いた表情をしたが、渉外担当の風雪はその辺の事も知っていたらしく、クールな顔つきを崩さずにいた。

「俺が見た色金は微小なものと、巨大なものに分かれていた、だが、その中間は無かった。つまり……緋緋色金・瑠瑠色金・璃璃色金には人工的には造り出せない天然オリジナルの巨大な『原石』があって、そこから削り取られた微小な物が各地に出回ってるんだろう。その原石のうち、緋緋色金の原石を持っているのが　お前たち、星伽神社だ」

日本人は、神社の御神体をむやみに暴こうとはしないからな。バチが当たるって事で。

それで、星伽は千年・・千年の昔からずっと隠せてきたんだろう。

おそらくトン単位の、緋緋色金の巨大なカタマリを。

「……」

粉雪と華雪は『バレてる』的に顔を見合わせていたが……

何も、答えない。風雪もだ。

だがその沈黙が、俺の推理が正しかった事を示してくれる。

「答えなくていい。お前たちにその権限は無いんだろう。詳細は今から白雪に直接聞きに行くさ。アリアの妹にもそう指示されたしな」

と、俺が踏み出すと……

星伽姉妹は、俺が鳥居をくぐる事を止めはしなかった。

きっと、彼女たちは……

御神体である緋緋色金の原石、そこに行ったのであろう緋緋神アリア　さらにそれを追って行った姉・白雪のことが心配なんだ。

出来ることなら、俺に白雪を守ってほしいと思っているんだ。

だから、通すか通さないかの判断は任されていたようだが……

俺を、通した。

自分たちが祀っていた、自分たちの手に余る超常の力、緋緋色金と、緋緋神。アリアを

使って復活し、戦争の暴風を吹き荒らそうとするその祟神に立ち向かわせる、侍として。

その辺も全て俺の考えた通りだったらしく、

「遠山様……白雪お姉様を、どうか……たすけて、あげて……」

お姉ちゃんっ子の粉雪が、手で顔を覆って泣き始めていた。

「心配するな、粉雪」

俺は、できるだけ優しい笑顔でそれを宥めてやる。

本当は肩を叩いたり頭を撫でたりしてやりたいところだったが、そうすると不衛生とか言われるからな。この子は男ぎらいというか、潔癖症だからね。

（そういえば……）

この粉雪が言っていたような覚えのある『緋弾は何れ、潰える』という予言。

潰える、とは、古くは『水があふれ出る』という意味の大和言葉だ。河川やダムなどが決壊するという字も、昔は『決潰』すると書いた。

色金は、にして全。全にして一。

緋弾が、あふれ出る。

緋緋色金が、あふれ出る。

それは、緋緋神の力が解放されるという意味の予言だったのだろう。

だが
　それを止める。
止めてやる、俺が。
シャーロックの推理だって覆した俺だ。粉雪の占いを覆すぐらい、わけないさ。
寵巫女たちが作った無数の風車が飾られた境内を歩き、阿吽の狛犬の間を通る。
……懐かしい。
星伽神社の本宮に来るのは、十数年ぶりだ。
あれこれ忘れちまってるが、部分部分は覚えてるもんだな。
ついでに、緋緋神以外の八百万の神に安全祈願でもしておきたいとこだ。
だが俺は、お参りをしにここへ来たんじゃない。
と、本殿を回り込み……月明かりを頼りに、神社の本殿の裏にある杉林へ　子どもの頃に『行ってはならない』と言われていた林へ入る。
防雪林のように見えるが、これはその先にあるものを隠すための人工林だったんだな。
その、ほんの数十mしかない林を抜けると、
（……みずゆみ……水弓……）

確か昔そう呼ばれていた、さっきの鉄塔からも見えた湖のほとりに着く。
昔は白雪たちが祀って『みずうみ』を『みずゆみ』と言ってるのかと思ったが、それはこの湖の形状を示した正しい名称だったのだろう。
星伽の御神体、
緋緋色金の原石は、この湖の向こうにあるハズだ。
となるとグルリと湖を回り込まないといけないところだったが、そこで……
携帯に電話がかかってきた。粉雪の番号だ。
『遠山様。もう水弓に着かれた頃でしょうか』
「ああ。今から湖畔に沿って回り込むよ。けっこう歩きそうだから、緋緋色金の原石まで30分ってとこだな」
『お力になれればと思って、道案内のため内密にお電話しました。私には御神体のことは言えませんが、それ以外は言ってもいいハズですので』
厳格なようで実はそこそこ融通の利く粉雪は、
『水弓は直進できます。古くは御神渡と呼んで、凍った湖面を歩いて御神体の所へ参ったそうですが現代では温暖化のせいで凍らない年も多いので、水面のすぐ下にガラスの隠し橋が架けてあるのです』

と、ありがたい情報をくれた。

『湖畔に小ぶりな鳥居が1つあるのが見えると思います。対岸にも同じものが1つ。その間が、渡れるのです。下駄でないと靴や靴下が濡れるかもしれませんが、対岸まで3分もかからず行けます』

実際、湖畔には小さな緋色の鳥居があって

湖の水面下には、パッと見では何も無さそうだったが……思い切って踏み出してみると、確かに水面下2～3cmほどに足場があった。

すごいなこのアイデア。見えない橋だ。

「助かったぞ、粉雪。武偵高で習った受け売りだが、時間短縮も立派な援護射撃だ」

『……どういたしまして。ですが、その先の神奈備　神の隠れる岩戸には、携帯電話の電波が届きません。私も入った事がないのですが、むかし御神酒蔵で酔ったお姉様……あ、いえ、何かの折に白雪お姉様からお聞きしたのですが、岩戸の内は、人体のようになっているとか。私が知っているのは、それだけです』

人体のように……？　ブヨブヨしてたりするのか？

「……それで十分だ。行ってくる」

『お力添えしたからには、必ず全てを丸く収めて戻ってきて下さいね。失敗したら、丑の刻参りですからねっ。では、どうかご無事で』

星伽巫女のワラ人形はガチで人を殺せるらしいので、こりゃ失敗できない理由が増えたなぁ……と、俺は苦笑いしつつ携帯をしまう。

そして、星座や月といった天体を鏡のような水面に映す水弓闇色の湖上を、渡っていく。

まるで、宇宙空間を歩いているようだ。

粉雪に吾われた通り足は濡れたが、想定より遙かに短時間で……対岸、星伽山の噴火口らしき凹みのある斜面へと辿り着く。

その山麓は草木の生えてない岩場で、神奈備の名にふさわしい人外魔境ムードがある。

微妙に階段みたいになっていた岩を上がると、『人』の文字みたいに垂なって門っぽくなっている大岩が2枚あり

その内側に、占い五色絹で飾られた鳥居がまたあった。

遠目には見えない岩陰に、ひっそりと。

……その鳥居は洞門になっていて、岩の奥へと入れるようになっている。

これは、洞窟……？

いや。マグライトで照らした内側には、人が通れるぐらいの通路が見える。

人工の岩室だ。

掘ったというよりは、石材を集めてきて噴火口を丁寧に埋めていったような造りだ。

（まるで、ナナメにひっくり返したピラミッドみたいだな。入っていく感じも、まさしくピラミッド探検っぽいし……）

と、考古学者気取りで踏み込んでいくと――地熱だろうか。

すぐに、内部の気温がそこそこ高い事に気づかされる。

冷えた体にはありがたかったし、靴も乾くし、そこはいいんだが……

（おいおい……）

……この、岩の通路。

左右の岩壁に戸棚みたいな穴が開けられていて、そこに歴史の教科書に載ってたような青銅の鏡やら銅鐸やらが幾つも収められてあるぞ。

すげえなこれ。素人目にも歴史的価値を感じるよ。

星伽もいいかげん秘密主義はやめにして、世界遺産登録とかした方がいいんじゃないかね？

この洞穴は迷路のように分岐点が多く掘られてあり、道によっては原始的なトラップの気配も感じられたので引き返した。

正解の道は何度も通られているハズなので、足下の砂や岩の様子でなんとなく判断し

て……迷いながらも歩くうちに、さっき粉雪から聞いた『人体のような』の意味が分かってきた。

俺がさまよった道には、広い狭いがあった。

広い道を腸、狭い道を脈と見做すと、その形は横たわる人体のそれにおおよそ符合する。

肺や脳と思われる、ホールのような空間もあったしな。

（という事は――）

人体で最も重要な臓器――心臓の位置に、最も重要な物があるハズだ。

そう思って、喉の位置を通っていた俺が……胃と思われる広い空間に、出ると。

「……っ……」

そこには煙でできた、恐竜サイズの狐が寝そべっていた。

煙が、巨大な狐の形になって安定しているのだ。

大狐は頭をこっちに向けていて、孔雀のように立てて広げた尾は、1、2、3……9本あるな。

だが俺も今さら、この程度の事には驚かん。

誰だかもなんとなく分かるぞ、悲しいかな、俺も超常現象に対するカンが養われてきた

ようなんでね。

「玉藻か？」

「……緋緋神、星伽巫女、遠山侍が揃いおったか。いよいよじゃな」

口を動かさず喋った大狐の声は

音程は低くなってるが、やっぱり玉藻の喋り方だ。

ってことはそれが、玉藻の本当の姿って事かな。

だとしたら今までの姿の方が好みだな。あれでも耳やシッポは決死のスルーを決め込む必要があったし、女の子だしだが、まだ人の形をしてたし。

「一つ叱り、一つ祝びる。お主は、アリアの恋心を昂ぶらせすぎておったようじゃ。この女たらしめ、そして、それを見抜けず弥生の晦日まで緋緋神化が起きぬと読んだ儂も大たわけよ。事ここに至るまで、少なからず死者も出たであろ」

俺の脳裏を、閻や瑠瑠神の事がよぎり

「これ以上は出させない。出るとしても、1人だ」

俺は、俺自身が死んでも緋緋神を止める覚悟でそう発言するが……

玉藻はそれを、俺が緋緋神アリアを殺す覚悟と受け取ったらしい。

「若武者よ、覚悟せよ。時に武士は女をも、朋をも、斬らねばならぬものよ。後詰めは何

なりと儂がやろう。心おきなく、征け」

前半は無視するとしても、後半は……

何かあっても、後片付けはしてくれるって事みたいだな。

「助かるよ。俺とアリアと白雪が揃うと、ケンカになるのが通例でね。いつも掃除が大変だったんだ」

俺は、シッポの一本で道を示してくれた玉藻を回り込むようにして――

壁面にあった通路へと、踏み込む。

緩やかな上り階段になっていたそこには、緋色の鳥居が30センチ感覚ぐらいでズラリと連なっている。まるで、鳥居のトンネルだ。

その向こうは明るく、火の気配がする。

ジャマになりそうなマグライトを捨て、人体で言えば心臓の――

その、緋色に輝く広間に至る。

Go For The NEXT!!!　緋出ずる国

緋色の光は、その広間の中心部に近づくにつれて太陽光のようになっていく。
まるで朝陽か夕陽の中にいるように、視界が明瞭になっていく。
火。日。緋。
それらは全て同じ『ひ』という大和言葉だ。
炎、天空の太陽、人を目覚めさせるその色。
それらは昔、同一のものと見做されていた。
その『ひ』を2つも冠する緋の中の緋、緋緋色金の原石がここに収められているというのか。
白雪。
（……っ……）
煌めきに目が慣れていき、まず見えてきたのは白雪。
シャンッ――シャリンッ――シャンッ――
シャンッ　シャリンッ　シャンッ
神楽鈴を鼓動のようなリズムで岩室に鳴り響かせて、白雪は……

足下を流れる緋色の霧に緋袴を溶かすように、ゆるやかな舞いを踊っている。
小さい頃に見せてもらった時と違って、歌は無いが――これは、
（神楽舞……）
星伽の、巫女神楽。その1つだ。
白雪の周囲には霧に浮かぶような彼岸花が咲き乱れ、その上を星伽揚羽がヒラヒラ飛び回っている。
――シャンッ――シャリンッ――シャンッ――！
不意に鈴を強く鳴らした白雪は、くるりっ。
艶光りする長い黒髪に優美な曲線を描かせて、全身を一回転ターンさせる。
鈴は手品のように、抜き放たれた刀――色金殺女へと持ち変えられ、そこから神楽舞は俺が見た事のないものへと変わっていく。
早まるリズム、邪悪なものを断ち切るように振るわれる刀。
まるで日本版の、剣の舞だ。
疎い俺にも視覚的・感覚的に分かるその動きは、神を鎮めようとしているもの。
人ならざる超常の存在を、宥め、治めようとしているもののようだ。
しかし――

白雪の舞いは、静かに終わりを迎える。
その向こう側に居る者の表情と、在る物の状態を、何ひとつ変えさせることなく。
「あたしの好みだぜ、その踊り。美しい星伽巫女は恋を、色金殺女は戦を感じさせる」
「……鎮まらないんだね。もう……」
その者　緋緋神アリアと、白雪が、言葉を交わす。
それから白雪は、
「……どうして来たの、来て、しまったの。キンちゃん……」
背後の俺に、悔しそうな声で呟いた。
「ここにはもう、アリアは……いないよ。緋緋神になってしまったの」
「待ちくたびれたぜ、遠山」
白雪のセリフを裏打ちするように、アリアの姿をした緋緋神も俺に話しかけてくる。
「まあ、アリアの事は諦めろ。白雪の言う通りさ」
と、緋緋神に言われるまでもなく
パートナーの俺にも、感じ取れた。
今の緋緋神は、今までの緋緋神とは違う。
遠隔からアリアを抑えつけて、一時的に乗っ取っていたのとは違う。

アリアを自分の所に直接、強引に連れてきて　　アリアに、完全に、自分を上書きした。

緋緋色金はアリアをここに連れてくる事で、それができた。

そういう、感じだ。パートナーの事だけあって、直感的にそれが感じ取れる。

ここは緋緋神の棲み家。

視覚的にも、それが分かるのだ。

アリアが今その上に崩れたあぐらをかいている、そこに在る『御神体』の巨大さから。

（それが……緋緋色金の、原石なのか……ッ……！）

緋緋色金は弾丸サイズでも世界最大級と謳われていた物だが

それは、自動車1台分ぐらいの金属塊。

それも合金じゃないだろう。純・緋緋色金だ。

その全体が、シャーロックがアリアの心臓に撃ち込んだ緋弾と全く同じ　血のような、薔薇のような、炎のような　緋色をしている。

その緋色の輝きはオーラのように広がり、周囲の足下を流れる水蒸気を染めているのだ。

緋緋色金の原石には輪っかになった注連縄がハチマキのように掛けられており、周囲の

地面には数多の色金殺女らしき刀が突き立てられてあった。代々の星伽巫女と緋緋色金の歴史を物語る、墓標のように。

原石を取り囲むように並んだ色金殺女の中には、刀だけでなく古墳時代の物と思われる青銅の剣もある。

それだけ昔から、星伽巫女たちは緋緋色金を制御しようとしてきたのだろう。

言葉を出そうとする、俺を

「……」

阻むものがある。

それは緋緋色金の原石、御神体とやらの形状。形だ。

（……笠……）

それは星伽家の家紋『星に笠』にも描かれた、『笠』の形

昔の日本人が雨や日光を避けるのに使った、麦わら帽子みたいなかぶり笠の形で。

レキが描いた絵にも似ているのだが、もっとハッキリとその形をしている。

というか……

というか……

これは。

笠というよりも、いわゆるアダムスキー型の円盤じゃないか。
宇宙人が中から手を振るような窓等は無いが、これを人に見せて『何の形でしょう』と聞けば、１００人中１００人が『空飛ぶ円盤』と答える形だぞ。
絶句していた俺は白雪の隣まで歩き、
「し……白雪。それが、緋緋色金なんだな」
そこでようやく声が出せて、再会の挨拶も無しにその確認を取る。
「うん」
「それは、その　つまり、それが原石ってことか」
言いよどむ俺に、少し眉尻を下げた白雪が流し目してくる。
「……今まで隠してごめんね。これは、緋緋色金の祖鋼、これを削ったり砕いたりした欠片が、世界中に流通している緋緋色金なの」
「ＵＦＯに見えるぞ」
と、その単語を俺がついに言うと。
「そうだよ」
白雪が、うなずく。
……っ……

……ホンモノってことかよ。

白雪は、ぱっつん前髪の下、まつ毛の長い垂れ目気味の目で眉をキリッとツリ上げ、緋緋神(ひひのかみ)アリアと緋緋色金を見据え直す。

そしてそのまま

緋緋色金の正体を、とうとう明かすのだった。

「これは、御星様(おほしさま)だよ。２０００年の昔に天から降ってきた、お星様なの」

Go For The NEXT!!!

あとがき

北国の山では遅咲きの八重桜が満開だとかそうでもないとかですね！　赤松（あかまつ）です！

……やっちまいました！　スミマセン！

例年4月に刊行となっていた新刊ですが、今年は5月となってしまいました。

とお詫びいたしますのも、しばらくインフルエンザで寝込んでいたのです。

いやー死ぬかと思いました！　9度5分とか、物心ついてから初めて出てビビりました。

ですが今は全快し、このとおり元気に書いております。

関係各位に多大なご迷惑をおかけした事、そして何より読者の皆さまを長らくお待たせしてしまいました事を重ね重ねお詫び申し上げます。

この巻では、一時的にではありますが、17巻でアリアとキンジが冗談で語った桃太郎のメンツ　アリア（桃太郎）・リサ（イヌ）・猴（サル）・キンジ（キジ）がロンドンに勢揃いしましたね。

鬼ケ島に上陸したメンツは1人欠けてましたが、瓢箪から駒が出る。ジョークで言ったことが実現しちゃう事はよくあることです。

でも、ここからはジョークではありませんよ……？

――お待たせいたしました！

TVアニメ『緋弾のアリアAA』の放送時期等の詳細が、２０１５年７月１９日（日）、イベント『ＭＦ文庫Ｊ夏の学園祭２０１５　緋弾のアリアＡＡ 開幕式ｉｎ秋葉原』にて発表される予定です！

場所は秋葉原UDX&AKIBA_SQUAREで開催予定ですので、詳しくはＭＦ文庫Ｊさんのホームページ　http://bc.mediafactory.jp/bunkoj/fes2015/　をご覧下さいね。

いやー、やっぱりアニメって、本当に楽しいものですね。

なんだかお祭りみたいで、お祭り好きの赤松はテンションが上がるのです！

それでは次は、日出る国の日が眩く輝き、夜は祭り囃子が聞こえるそのころに。

2014年5月吉日　赤松中学(ちゅうがく)

祝アリア20巻!!
■アリアもついに
20巻となりました！
うちの本棚も一段分
まるまるアリアに
なってて感無量です！
■それではまた次巻で
お会いいたしましょう！！

著者

赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回ＭＦ文庫Ｊライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

イラスト

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。

代表作は『ぷらばん！』『Ｅ×Ｅ』『夏空カナタ』『天神乱漫』『のーぶる☆わーくす』『DRACU-RIOT!』『天色＊アイルノーツ』。

小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。

趣味はゲーム、読書。

ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。

http://tyatsune.blog87.fc2.com/